

文京区 地域福祉活動計画

令和6年度～令和9年度

はじめに

このたび、令和6年度から令和9年度までの4年間で計画期間とする「文京区地域福祉活動計画」を策定しました。令和2年度に策定した前計画の理念「知り合い、伝え・伝わり、心を寛げ、つながりをもつことで『お互いさま』が生まれるまち」を引継ぎ、前計画の成果と課題を踏まえ、新たな時代に対応できる計画を目指しました。

前計画では、「社会的孤立を解決するため早期からつながる仕組みがあり、多様な主体が地域活動に参加し、生活課題がありながらも自分らしく安心して暮らせる地域」を目指し、地域の居場所を中心に、活動を広げ、互いのみまもりや支え合いにつながるよう取り組んでまいりました。

この間、我が国は新型コロナウイルス感染症の流行という未曾有の災禍に見舞われました。それにより、外国籍居住者の生活困窮、子育て家庭の孤立や経済的困難、急増を続けるひきこもりや不登校児童の社会的孤立など、多くの地域課題が顕在化しました。

また、都心部にある文京区ではマンションが次々と建設され、新たな住民が増え、かつての地縁を中心とした地域社会は変容しつつあります。同時に、人々の生活様式や価値観も一層多様化しています。

このような状況を前に、私たちは、より多様となった地域ニーズを見据えながら、今後の「住民同士のつながりや支え合い」のあり方を模索していかねばなりません。

今回の計画では、地域には多様な人たちがいて、つながり方もまた多様であるとし、地域住民がより豊かな生活を送るため、多様な参加・参画の機会を広げ、地域と関係機関・団体などの活動主体が、横のつながりや重なり合いを持ちながら継続的に連携していくことを目標としています。

地域住民の皆様、関係機関・団体が、この目標に向けて取り組むことにより、地域住民の複雑で複合的な課題の解決を支える包括的支援体制・重層的支援体制が構築され、地域共生社会の実現へとつながります。

文京区の皆様が安心して暮らすことのできる地域づくりに向け、今後とも一層のご理解とご協力を賜りますよう心よりお願いいたします。

最後に、本計画の策定に当たり、多大なご尽力をいただきました「文京区地域福祉活動計画策定委員会」の委員の皆様をはじめ、様々な機会に貴重なご意見をいただきました多くの皆様に厚くお礼を申し上げます。

文京区社会福祉協議会

会長 潮崎 敏彦

目次

3分でわかるダイジェスト	1
第1章 計画の策定にあたって	1 計画策定の背景と目的 6 2 計画の位置づけ 8 3 計画期間 9 4 策定体制 12 5 数字でみる文京区 13
第2章 策定に向けた方向性	1 前計画(令和2年度～令和5年度)の成果と課題 21 2 策定委員会・作業部会における検討 28 3 本活動計画の策定に向けた方向性について 43
第3章 文京区地域福祉 活動計画が めざすもの	1 計画の基本理念と基本目標 47 2 基本目標の関係性 49 3 計画の体系 50 4 基本目標の主な取組 52
資料編	1 統計データ 62 2 調査 68 3 文京区地域福祉活動計画策定委員会・作業部会設置要綱 77 4 計画策定のプロセス 78 5 文京区地域福祉活動計画策定委員会委員名簿 79 6 委員からのひとこと 80 7 用語集 82

3分でわかるダイジェスト



文京区地域福祉活動計画
令和6年度～令和9年度

「文京区地域福祉活動計画」は、地域住民や地域福祉関係者・関係団体などが、地域の課題を自分たちのものとして捉え、解決に向けての地域づくりに主体的に関わっていくための行動計画です。本計画の実現のため、3つの基本目標を定めました。

基本理念は、本計画を具体的に推進するための指針となるものです。これまでの基本理念を踏襲しながらも「多様性」や「より豊かな生活」などの新たな視点を加え、社会の変動に応じた取組を進めていきます。

課題

基本理念

基本目標

1

つながりが広がり
づらい人がいる

地域には多様な人たちがいること、地域活動や集いの場は増えているが、そこに来ることができない人たちがいることが分かりました。

2

地域の多様な
人たちと多様な
つながり方がある

地域には、多様な人たちがいて、そのような多様な人たちに合わせたつながりの機会があることが大事であることが分かりました。

3

住民と専門職が
連携をするための
工夫がある

連携・協働のためには、主体同士の距離が近いことや知り合う場面からのプロセスが大事であることが分かりました。

「お互いさま」が生まれるまち
知り合い、伝え・伝わり、心を寛^{ひろ}げ、
つながりをもつことで

基本目標
1

地域には多様な人たちがいて、つながり方も多様である。身近なところで、気にかけて、声をかけ、関心を持ち、支え・支えられる関係性が増えている。

基本目標
2

より豊かな生活をおくるため、多様な人たちに合わせた参加・参画の機会が広がっている。

基本目標
3

地域と関係機関、団体が知り合い、一緒に悩み・考え、お互いの強みを活かす機会をつくり、ネットワークで継続的に取り組んでいる。

4年後このような地域を目指します

ちょっとしたことを
気にかけて合うような
関係が増えたら
いいですね。

食を通じたつながりづくりを
様々な人たちと一緒に考えて、
地域活性化を
実現していきたい。

自分の知識や得意なこと、
色々な世代の方々と
関わる活動ができてよかったです。
毎回わくわくしています。

お互いに支え合う関係を
居場所できると
いいですね。



多様な方が
運営に協力していただき、
瞬く間につながりの輪が
広がりました。

アイデアを出し合い、
協力し合うことで、
ひとりだけではできない
実践ができていると感じます。

人を「問題がある人」ではなく、
何か素敵な魅力がある人とみること。
そしてそれが人の中で芽吹くことが
大事です。

地域住民の一人として
色々な人との距離を
近づけることを
心掛けています。

chapter 1

第1章 計画の策定にあたって

1 計画策定の背景と目的

地域福祉を取り巻く動向

かつて我が国では、生活の様々な場面で地縁や血縁の支え合い機能が存在し、人々の暮らしを支えていました。しかし、人々の価値観やライフスタイルが多様化したことや、本格的な少子高齢化・人口減少時代を迎え、世帯規模の縮小・単身世帯の増加が顕著になり、家族や地域における支え合いの基盤が弱まっています。支え合いの基盤が弱まったことで、サービスや制度があるにも関わらず、個人や世帯単位で複数の課題を抱え、複合的な支援を必要とするケース(8050問題、ひきこもり、ヤングケアラーなど)や、従来の対象者別の支援制度には合致しにくい、いわゆる「制度の狭間」にあるニーズが浮き彫りとなっています。

こうしたなか、新型コロナウイルス感染症の影響により、人と人のつながりの希薄化がさらに進みました。また、潜在的に広がっていた格差が顕在化し、とりわけ社会的弱者と言われている人々を苦しい立場に追い込み、日々の暮らしにも甚大な影響をもたらしました。

このような背景から、これまでの「つながり・支え合い」の概念を拡げた、新たな「つながり・支え合い」の在り方が求められています。民間・公共を問わず、地域の様々な構成員が制度・分野ごとの「縦割り」や「支え手」「受け手」という関係を超えてつながり、多様な新しい接点をとおして、人と人が交差し、時に特性や得意分野を活かして支え、時に支えられることで、その人らしい生活を送ることができるような社会としていくことが求められています。

国では、このような社会変化に伴い、地域福祉の視点を取り入れた社会保障制度の改正を進めています。高齢者分野では、平成27年度に住民参加型も含めた多様な活動で課題解決を行う介護予防・日常生活支援総合事業が始まりました。また同年、生活困窮者の抱える複雑化・多様化した課題に対して、生活困窮者自立支援事業により、従来の縦割りではない横断的な支援が制度化され、地域福祉の政策化が進んでいます。そして、「一億総活躍プラン」のなかで提起された「地域共生社会」の実現の具体化のために、令和3年度、**重層的支援体制整備事業**が始まりました。

PICK UP

地域共生社会とは？

制度・分野ごとの「縦割り」や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域とともに創っていく社会を指しています。

重層的支援体制整備事業とは？

この事業は、地域住民が抱える複雑化・複合化した課題や「制度の狭間」にあるニーズに対応するために市区町村の任意事業として創設されました。

「相談支援」「参加支援」「地域づくりに向けた支援」の3つの支援を柱として、それらを効果的かつ円滑に実施するため、「多機関協働による支援」「アウトリーチ等を通じた継続的支援」を新たな機能として強化しています。これにより包括的相談支援事業、参加支援事業、地域づくり事業、多機関協働事業、アウトリーチ等を通じた継続的支援事業の5つの事業を一体的に実施することができます。

文京区では、令和7年度からの本格実施に向けて準備を進めています。

計画策定の目的

地域共生社会においては、地域住民や福祉関係者は、様々な地域生活課題を把握し、できる範囲での解決を図るとともに、必要に応じて支援を行う専門機関や行政機関などと連携して課題の解決に取り組むことが大切だとされています。

そのため、区市町村は、地域住民や地域関係団体などが地域福祉の様々な活動に積極的に参加できるように支援する人材を配置すること、地域住民などが交流を図るための拠点を整備すること、地域住民等に対して地域福祉に関心を持ってもらえる機会をつくることが重要であるとされています。

このことに関して、東京都は「地域福祉支援計画」を、文京区は「地域福祉保健計画」を策定していますが、このような公的な地域福祉に関する計画の策定とその推進とともに、地域住民自身を中心となって、主体的に地域共生社会の実現に向けて活動ができるようにするための計画も一層重要になっています。

今回の**地域福祉活動計画**では、こうした政策的な背景とともに、地域共生社会の実現に向け、地域住民や地域福祉関係者・関係団体、**文京区社会福祉協議会**などがどのような地域づくりを行っていくのかを示しました。

計画策定にあたっては、「文京区地域福祉活動計画(令和2年度～令和5年度)」の成果と課題を踏まえ、新たな時代に対応できる計画となるよう改定を行いました。

PICK UP

地域福祉活動計画とは？

地域福祉活動計画は、誰もが安心して暮らしていけるような地域社会を目指して、地域住民や地域福祉関係者・関係団体など、その地域に住む人々が、自分たちの住む「まち」の課題を自分たちのものとして捉え、それらの地域課題を解決するための地域づくりに主体的に関わっていくための具体的な行動計画です。

文京区社会福祉協議会とは？

社会福祉協議会は、社会福祉法に基づき「地域福祉の推進」を目的に、全国・都道府県・区市町村のそれぞれに組織されている非営利の民間団体です。

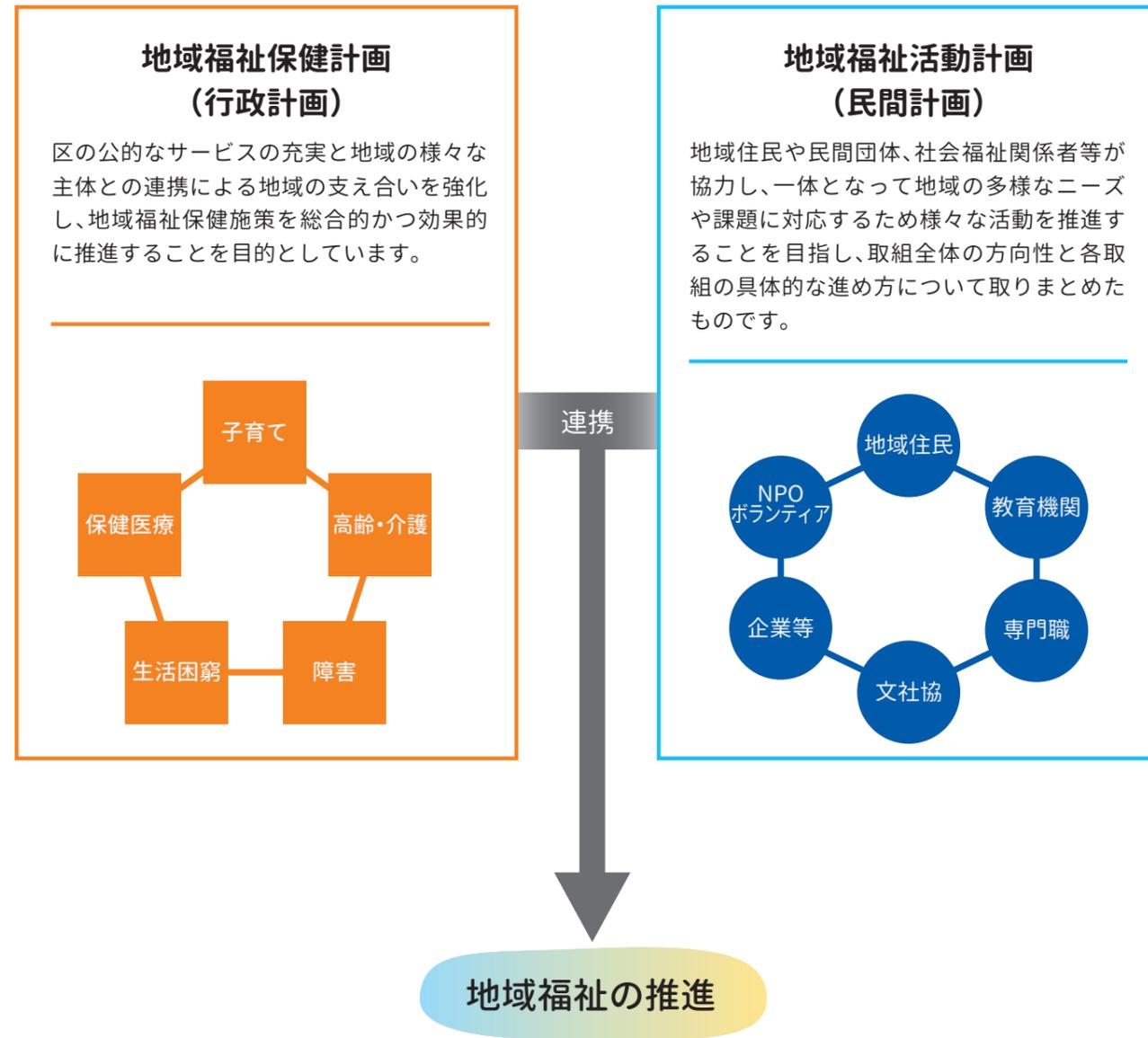
文京区社会福祉協議会(=文社協)は、昭和27年(1952年)に設立され、昭和38年(1963年)に社会福祉法人の認可を受けました。

文社協は、地域福祉活動計画の基本理念である「知り合い、伝え・伝わり、心を寛(ひろ)げ、つながりをもつこと」で、『お互いさま』が生まれるまちの実現に向けて、様々な事業を通じて、地域の皆さんをはじめ、民生委員・児童委員、行政、地域福祉関係者・関係団体等と一緒に地域福祉の向上と充実に取り組んでいます。

2 計画の位置づけ

計画の位置づけ

本計画は、文京区の地域福祉保健施策を推進するための基本となる総合計画である「文京区地域福祉保健計画」と連携した計画として策定します。行政計画である「地域福祉保健計画」と、地域住民をはじめとする地域の様々な活動主体の活動・行動計画である「地域福祉活動計画」が相互に連携し、文京区全体で地域福祉を推進していきます。

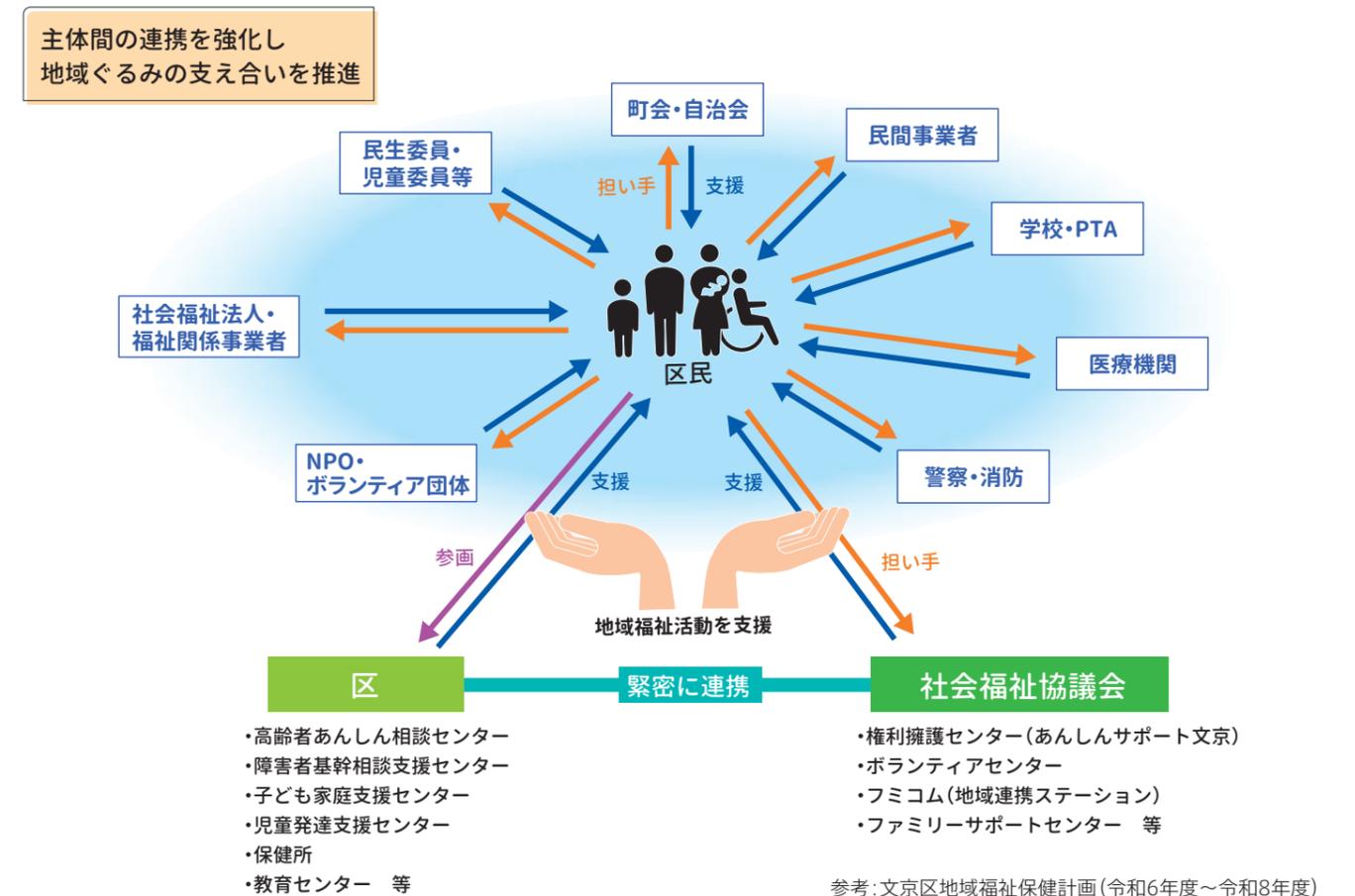


【図】 地域福祉保健計画との連携

計画の推進に向けた活動主体間の連携

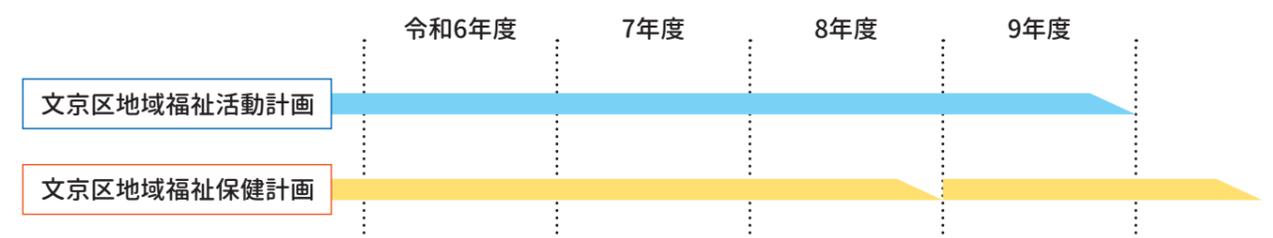
地域では、地域住民をはじめとした様々な活動主体が地域福祉の推進のために日々活動しています。本計画を推進していくうえでは、こうした地域による主体的な活動の裾野をさらに広げ、様々な活動主体間の連携を推進するとともに、支援される人たちがときには支援する担い手として活躍するような地域の支え合いを推進していくことが大切です。

本計画の推進の主な担い手である地域住民、地域福祉関係者・関係団体、社会福祉協議会は、区と緊密に連携し、協働して地域の支え合いを推進します。



3 計画期間

本計画は、令和6年度から令和9年度までの4年間を計画期間とします。



圏域について

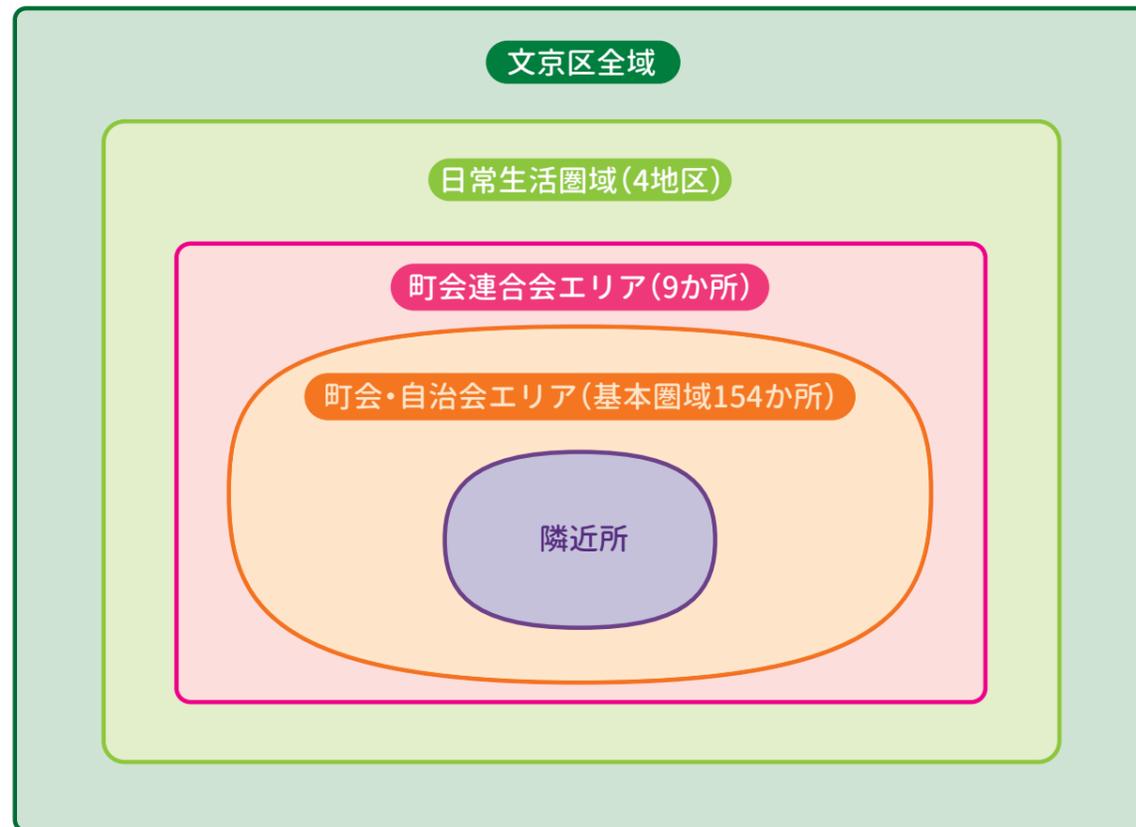
国が提起した「地域共生社会の実現」では、「住民に身近な圏域」において、地域住民が主体的に地域生活課題を把握し解決に取り組むための環境の整備が大切だとされています。また、『東京都地域福祉支援計画』（平成30年3月）や東京都社会福祉協議会『東京らしい“地域共生社会づくり”のあり方について（最終まとめ）』（平成31年3月）でも、具体的な圏域設定と関係する機関や団体、また圏域間をつなぐ機能が例示されています。

さらに、このような圏域の設定については、それぞれの区市町村域の歴史的・地理的な条件や地域の資源、住民生活の実態に即して設定することが重要だとされています。

これまでの文京区地域福祉活動計画でも、最も身近な隣近所を基本としながら、活動主体や活動内容などに応じて、「町会・自治会エリア」「町会連合会エリア」「日常生活圏域」「文京区全域」という4つの重層的な圏域を設定し、それぞれの圏域に見合った取組を推進するとともに、圏域の枠組みを越えた取組が必要な場合は、圏域間の情報共有と連携を図りながら柔軟な対応をしてきました。

この計画の圏域設定においても、以上の考え方を基本にして、この計画の体系で述べた3つの基本目標と取組が、それぞれの圏域の特徴を生かして有機的に実現することを目指します。

圏域のイメージ図



圏域の概要

エリア	圏域の概要	主な地域活動	この圏域で活動している地域団体・機関(例)
隣近所 (地域の実情や交流状況に応じた緩やかな捉え方)	隣近所の顔の見えるつきあいは、地域福祉の最も基本的な土台となるもの	隣近所の顔が見え、あいさつや近隣掃除など適度のつきあい、日常的なみまもり	—————
町会・自治会エリア (基本圏域・154か所)	地域で暮らす住民以外には把握しにくかったり、身近でなければ取り組みにくい生活課題に対応できるように、住民の暮らしに密着し、地域の課題を発見・共有しやすい範囲	日常的な集まりやみまもり・助けあい活動等	町会・自治会 高齢者クラブ
町会連合会エリア (9か所)	各地域活動センターの管轄地域であり、町会連合会、青少年健全育成会が日常的に活動している圏域	町会・自治会等の地域活動団体による基本圏域よりも広域的な活動	青少年健全育成会 地域活動センター
日常生活圏域 (4地区)	民生委員・児童委員協議会や、高齢者クラブ連合会と同一の地区区分であるとともに、高齢者あんしん相談センターの担当圏域であり、警察署管轄地域とも一致	日常生活圏域をベースとして各関係機関・団体等とのネットワーク化を図り、公的サービス・支援とも結びつけることで、基本圏域における小地域福祉活動を包括的に支援	民生委員・児童委員協議会 話し合い員連絡協議会 地区高齢者クラブ連合会 高齢者あんしん相談センター 地域生活支援拠点 地域福祉コーディネーター(文社協) 警察署
文京区全域	多機関が協働した総合的な支援体制が整備されるなど、区内全域に及ぶ広域の生活圏域	テーマ・課題別の全域を対象とした広域的な活動	ボランティア・市民活動 企業、大学 障害者基幹相談支援センター 子ども家庭支援センター

4 策定体制

(1) 計画の推進に向けた活動主体間の連携

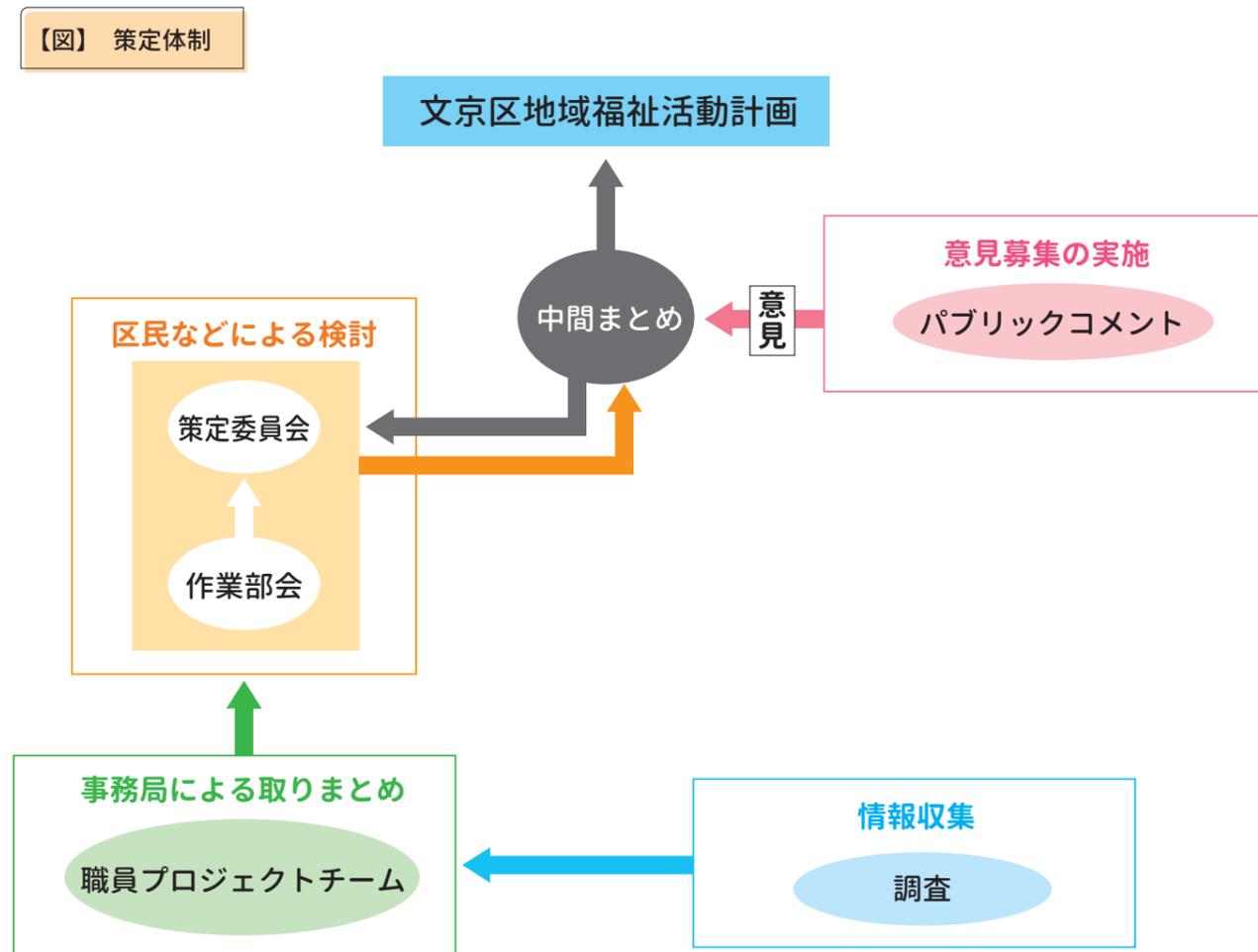
計画を改定するにあたり、内容の検討や住民の意見を反映し最終的な審議を諮る機関として、区民、関係団体、学識関係者等による20名の委員で構成する「文京区地域福祉活動計画策定委員会」(以下、策定委員会)と、横断的な意見の調整を図り、計画案を作成する機関として、策定委員会の12名の委員で構成する「文京区地域福祉活動計画策定委員会作業部会」(以下、作業部会)を設置しました。

(2) 職員プロジェクトチームの設置

文京区社会福祉協議会職員で構成し、現状と課題を把握するために必要な資料、データの収集を行うための「職員プロジェクトチーム」を設置しました。

(3) 意見募集の実施

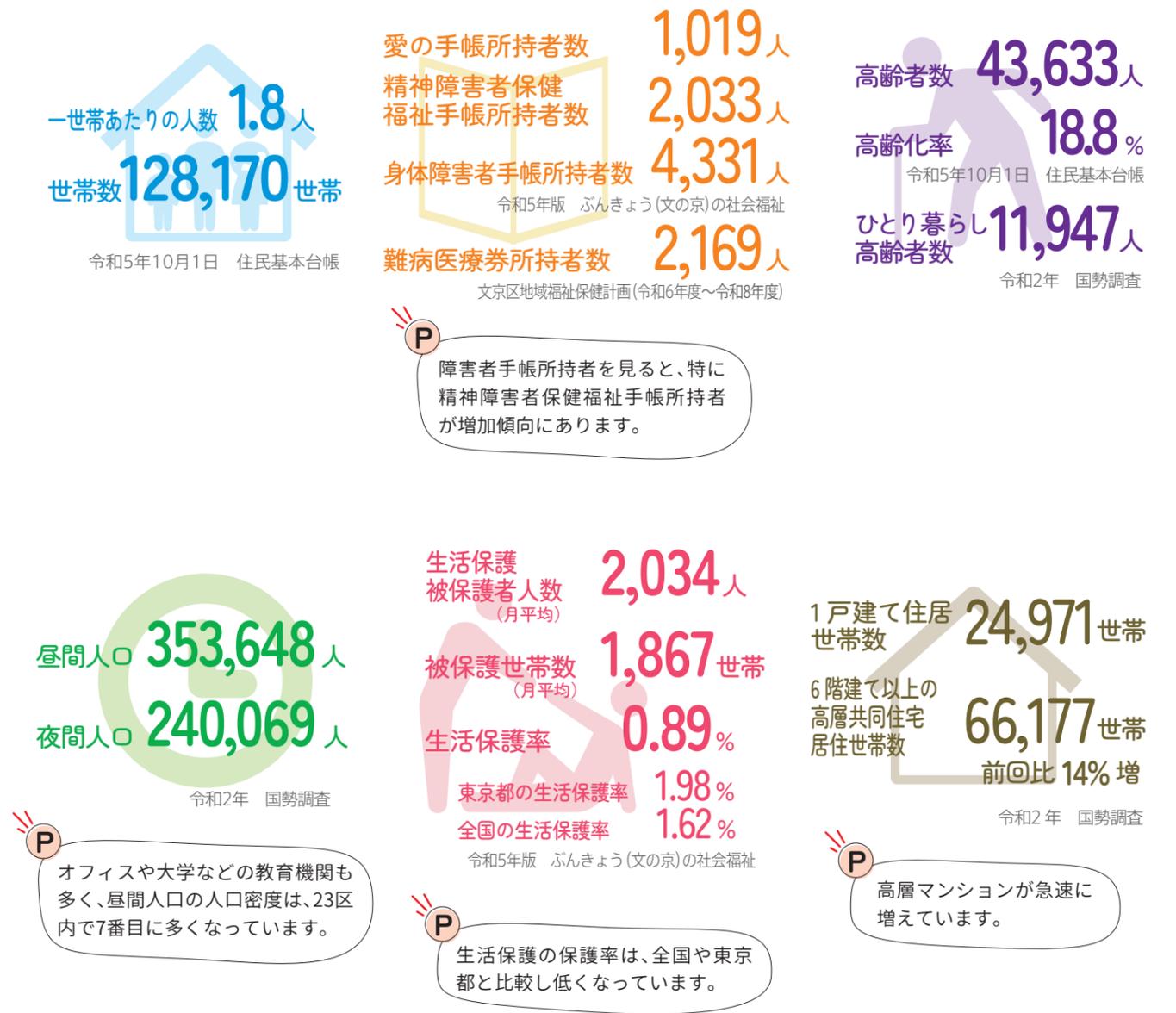
地域の関係団体を対象とした調査やパブリックコメントを実施し、広く区民の声を計画に反映しました。



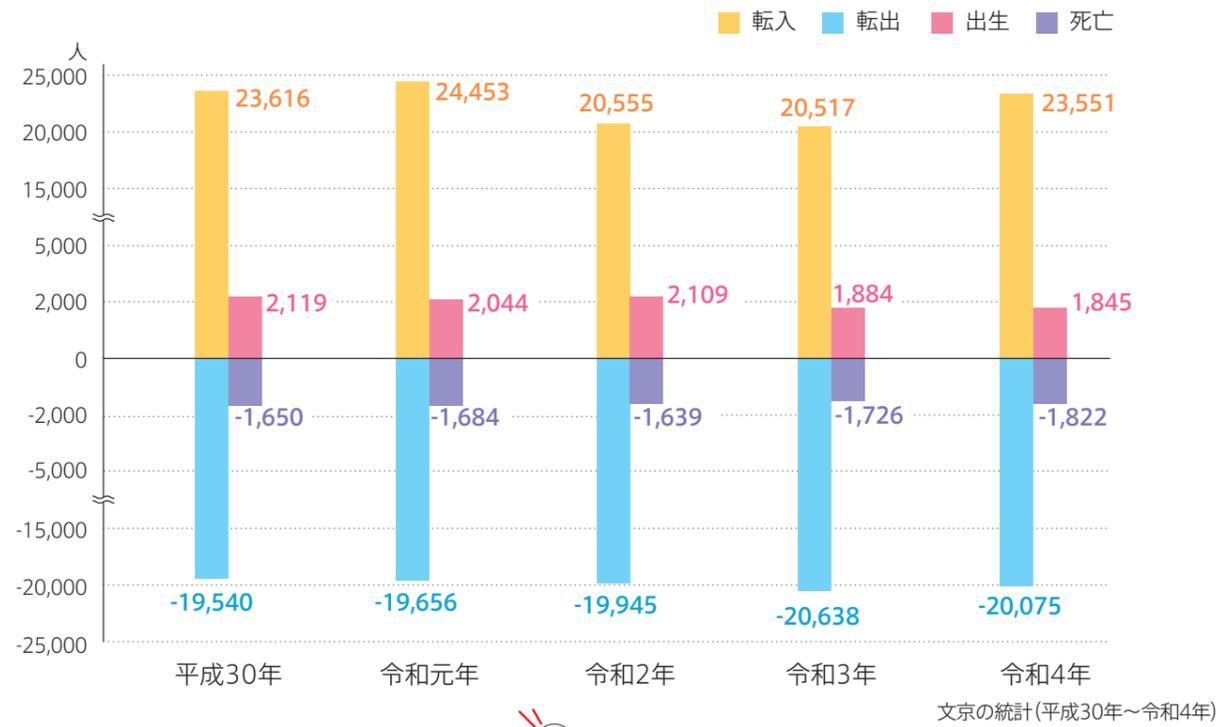
5 数字でみる文京区

文京区は、東京23区のほぼ中央に位置しており、面積は11.29平方キロメートル、人口は231,685人(令和5年10月住民基本台帳)です。住民基本台帳による人口推移は、昭和38年から平成10年まで一貫して減り続けましたが、その後増加に転じています。少子高齢化といわれていますが、文京区では年少人口も増え続けています。これはマンションの建設などによる人口増加が、転出や死亡による人口減少を上回っているためです。しかし、将来的には少子化などの影響で減少に転じると予測されています。一方、一世帯あたりの人数が東京都平均よりも低く、高層マンションも急速に増えているため、つながりをつくりづらい方が増えています。

また、外国人も新型コロナウイルス感染症の影響で一時的に減少していましたが、現在では増加傾向にあり、異なる文化や背景を持つ人々が同じ社会に暮らすことで、多様性が高まっています。

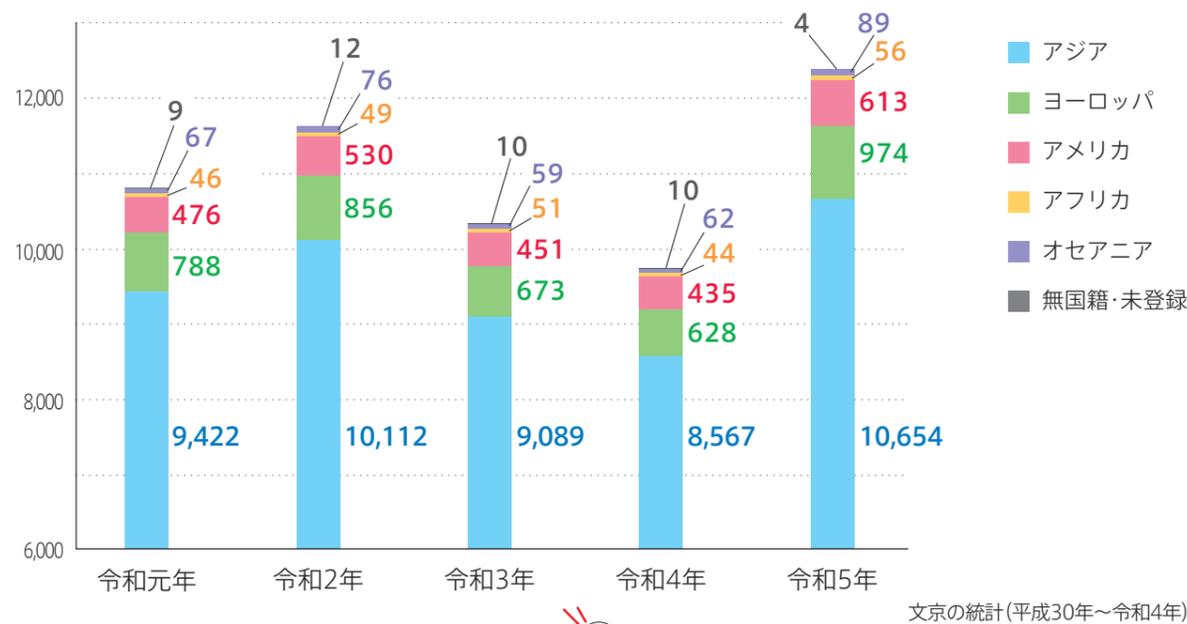


文京区の人口異動の様態



P 人口異動は、新型コロナウイルス感染症の影響で一時減少していましたが、転入・転出ともに増加傾向にあります。

国籍別外国人数



P 外国人の数は、新型コロナウイルス感染症の影響で一時減少していましたが、増加傾向にあります。また、国籍別では、特にアジアの方が増加しています。

地区カルテ

富坂地区 【現状と取組概要】

令和5年5月現在

基礎データ	
総人口	75,248人
面積	3,299km ²
高齢者人口	13,769人
高齢化率	18.30%
要支援認定者数	591人
要支援認定率	4.30%
要介護認定者数	1,953人
要介護認定率	14.20%
町会・自治会	46団体
民生委員・児童委員	43人
話し合い員	13人
高齢者クラブ	16団体 841人

富坂地区の該当住所

後楽1~2丁目全域、春日1丁目全域・2丁目1~7番・9~26番、小石川1~4丁目全域・5丁目1~4番・8~17番・20~41番、白山1丁目1~2番・5~8番・11~14番・16~22番・30~37番・2~5丁目全域、千石1~4丁目全域、水道1丁目1~2番・11~12番、小日向4丁目1~2番、大塚3丁目31~44番・4丁目1~2番(6~14)・3番(5~11)・4番(1~3)、西片1丁目19番、本駒込2丁目9番(7~17)・10~11番・29番・6丁目1~12番

町会・自治会

初音町町会、富坂一丁目町会、富坂二丁目町会、春日町三丁目町会、表町町会、小石川表町会、柳町町会、柳町中央町会、柳町三和会、八千代町町会、戸崎町町会、南戸崎町会、指ヶ谷町会、白山指ヶ谷町会、白山町会、京華通り自治会、春日一丁目仲睦会、春日大門町会、道和町会、後楽町会、第二後楽園アパート、春日礪川町会、白山前町町会、原町町会、原町西町会、東御殿町会、白山御殿町睦会、上御殿町会、林町町会、林町南町会、丸山町会、氷川下町会、大原町会、宮下町会、西丸町会、駕籠町会、西原町会、一般社団法人大和郷会、文京中央町会、久堅自治会、久堅町民会、久堅親交会、久堅西町会、春日二丁目町会、丸山新町町会

公的な施設等

高齢者関連

高齢者あんしん相談センター富坂、高齢者あんしん相談センター富坂分室、特別養護老人ホーム文京白山の郷、特別養護老人ホーム洛和ヴィラ文京春日、小石川ヒルサイドテラス、文京白山高齢者在宅サービスセンター

障害者関連

富坂生活あんしん拠点、文京区小石川福祉作業所、は〜と・ピア2、工房わかぎり、abeam(アビーム)、文京地域生活支援センターあかり、アンビション文京、富坂子どもの家、未来教室、発達支援ルームぼけっと

子ども・青少年関連

子育てひろば1か所、子ども家庭支援センター、認可保育所34か所、児童館4か所、育成室11か所、小規模保育園4か所、家庭的保育事業3か所、事業所内保育事業1か所、地域子育て支援拠点さきちゃんちpetit

その他

礪川地域活動センター、大原地域活動センター、保健サービスセンター

主な取組

富坂地区では、高層マンションの建築が進み、子育て世代が流入してくる地域に新たな居場所がオープン。気軽に参加できるプログラムを実施して交流が生まれている。住民活動が大きく広がってきているが、新たな担い手の創出をすることが課題となっている。

場づくりの取組

常設型の居場所
4か所

子ども食堂
5か所

かよい〜の(介護予防の通いの場)
11か所

ふれあいいきいきサロン
高齢者 15か所
障害児・者 2か所

子ども食堂
どなたでも 23か所
子ども・子育て親子 10か所

サロンぶらす(テーマ課題解決型サロン)
3か所



大塚地区 【現状と取組概要】

令和5年5月現在

基礎データ	
総人口	53,405人
面積	2,948km ²
高齢者人口	9,770人
高齢化率	18.30%
要支援認定者数	461人
要支援認定率	4.70%
要介護認定者数	1,377人
要介護認定率	14.10%
町会・自治会	34団体
民生委員・児童委員	35人
話し合い員	6人
高齢者クラブ	11団体 590人

大塚地区の該当住所

春日2丁目8番、小石川5丁目5～7番・18～19番、水道1丁目3～10番・2丁目全域、小日向1～3丁目全域・4丁目3～9番、大塚1～2丁目全域・3丁目1～30番・4丁目2番(1～5、15)・3番(1～4、12)・4番(4～12)・5～53番・5～6丁目全域、関口1～3丁目全域、目白台1～3丁目全域、音羽1～2丁目全域

町会・自治会

豊島ヶ岡町会、大塚坂下南町会、大塚坂下北町会、大塚上辻町会、大塚窪町町会、大塚一・二丁目町会、東青柳町会、小日向台町会、第六天町会、武島町会、水道端町会、西江戸川町会、茗荷谷町会、大塚仲町町会、大塚四丁目協力会、高田老松町会、目白台豊川町会、目白台雑司ヶ谷町会、音一文化会、音二町会、音羽三和会、音羽四丁目町会、音羽五丁目町会、音六町会、音羽七和会、音八会、音羽九桜町会、小日水町会、古川松ヶ枝町会、関口一丁目南部会、関水町会、関口町会、目白台二丁目町会、関口二・三丁目町会

公的な施設等

高齢者関連

高齢者あんしん相談センター大塚、高齢者あんしん相談センター大塚分室、特別養護老人ホーム文京くすのきの郷、地域密着型特別養護老人ホーム文京大塚みどりの郷、特別養護老人ホーム文京小日向の家、文京大塚高齢者在宅サービスセンター、文京くすのき高齢者在宅サービスセンター、福祉センター江戸川橋(老人福祉センター)

障害者関連

障害者基幹相談支援センター、大塚生活あんしん拠点、リアン文京、こばん、は～と・ピア、大塚福祉作業所、ワークプレイスぶんぶん、マイポジション、地域活動支援センターみんなの部屋、地域活動支援センター ぱれっと、放課後等デイサービス びおら

子ども・青少年関連

子育てひろば2か所、認可保育所26か所、児童館5か所、育成室3か所、小規模保育園5か所、地域子育て支援拠点おひさま0・1・2

その他

大塚地域活動センター、音羽地域活動センター、文京総合福祉センター

主な取組

区境に近いエリアで、新たに空き家を活用した多機能な居場所が立ち上がっている。新型コロナウイルス感染症の影響もあり、交流が希薄化していた地域住民のつながりの場となっている。様々な地域活動において、継続していくため支え合える体制づくりが課題となっている。

場づくりの取組

常設型の居場所

2か所

子ども食堂

3か所

かよい～の(介護予防の通いの場)

6か所

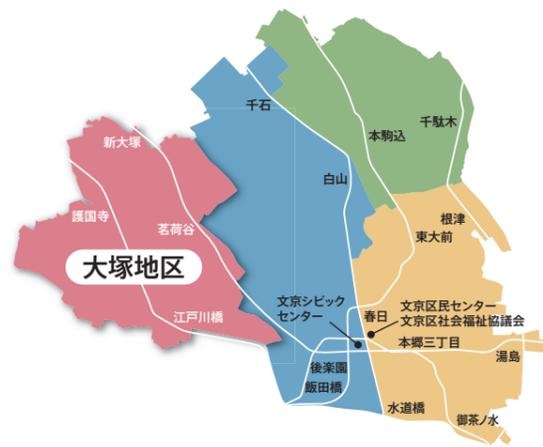
ふれあいいきいきサロン

高齢者 11か所 障害児・者 1か所

どなたでも 12か所 子ども・子育て親子 2か所

サロンぶらす(テーマ課題解決型サロン)

1か所



本富士地区 【現状と取組概要】

令和5年5月現在

基礎データ	
総人口	50,468人
面積	2,809 km ²
高齢者人口	9,478人
高齢化率	18.80%
要支援認定者数	480人
要支援認定率	5.10%
要介護認定者数	1,410人
要介護認定率	14.90%
町会・自治会	51団体
民生委員・児童委員	29人
話し合い員	6人
高齢者クラブ	11団体 554人

本富士地区の該当住所

白山1丁目3～4番・9～10番・15番、本郷1～7丁目全域、湯島1～4丁目全域、西片1丁目1～18番・20番・2丁目全域、向丘1丁目1～6番・16～20番・2丁目1～10番・11番(1～5)・13番(8～21)、弥生1～2丁目全域、根津1～2丁目全域

町会・自治会

春日町一・二丁目春睦会、本郷一丁目アパート自治会、湯島一丁目町会、湯島会、湯島新花町会、三組町会、妻恋会、湯島三丁目梅光会、本郷三丁目南部会、本郷三丁目金助町会、春木会、元二親和会、本郷弓一町会、本郷二丁目元一会、本郷二丁目弓二会、本郷二・三丁目町会、本一町会、本郷同四会、上真砂町会、下真砂町会、中真砂町会、田町町会、菊坂町会、菊和会、本郷五丁目台町町会、本郷五丁目町会、赤門前町会、本富士町会、天梅会、三組弥生会、天一町会、天二町会、天三町会、湯島同朋町会、湯島切通町会、湯島北町会、竜岡会、両門町会、森川町会、向丘追分町会、向丘追分東部町会、地縁法人西片町会、丸山福山町町会、向丘一丁目中町会、東大農学部前自治会、根津宮永町会、根津八重垣町会、藍染町会、根津片町町会、根津宮本町会、向ヶ岡弥生町会、弥生一丁目町会

公的な施設等

高齢者関連

高齢者あんしん相談センター本富士、高齢者あんしん相談センター本富士分室、特別養護老人ホームゆしまの郷、文京湯島高齢者在宅サービスセンター、文京本郷高齢者在宅サービスセンター、文京福祉センター湯島(老人福祉センター)

障害者関連

本富士生活あんしん拠点、文京区障害者就労支援センター、ワークショップやまどり、生活介護みらいコンパス根津、银杏企画、银杏企画II、银杏企画三丁目、ふる里学舎本郷、文京区児童発達支援センター「そよかぜ」、文京区児童発達支援センター「ほっこり」、御茶ノ水発達センター、ひよこ教室、畑中こども研究所

子ども・青少年関連

子育てひろば1か所、b-lab(ビーラボ)、認可保育所19か所、児童館4か所、育成室7か所、小規模保育園3か所、家庭的保育事業2か所、地域子育て支援拠点こそだて応援まちぶら

その他

区民センター、湯島地域活動センター、向丘地域活動センター、根津地域活動センター

主な取組

多機能な居場所では、若年性認知症の会や精神障害者の会などのテーマ性のある活動が定着してきている。また、さらなる多世代の交流を目指した活動も行われている。交流や学びの場として、地域住民や専門職と協働した地域づくりが行われている。多様な人たちへの情報提供や場にどのようにつないでいくかが課題となっている。

場づくりの取組

常設型の居場所

1か所

子ども食堂

0か所

かよい～の(介護予防の通いの場)

8か所

ふれあいいきいきサロン

高齢者 8か所 障害児・者 0か所

どなたでも 10か所 子ども・子育て親子 4か所

サロンぶらす(テーマ課題解決型サロン)

1か所



基礎データ	
総人口	51,492人
面積	2,234km ²
高齢者人口	10,552人
高齢化率	20.50%
要支援認定者数	502人
要支援認定率	4.80%
要介護認定者数	1,559人
要介護認定率	14.80%
町会・自治会	23団体
民生委員・児童委員	33人
話し合い員	8人
高齢者クラブ	13団体 745人

駒込地区の該当住所

白山1丁目23～29番、向丘1丁目7～15番・2丁目11番(6～14)・12～13番(1～7)・14～39番、千駄木1～5丁目全域、本駒込1丁目全域・2丁目1～8番・9番(1～6・18～33)・12～28番・3～5丁目全域・6丁目13～25番

町会・自治会

肴町町会、白山上自治会、丸山新町町会、蓬萊町会、向丘一丁目上町会、千駄木二丁目東町会、千駄木二丁目西町会、上千駄木町会、千駄木東林町会、千駄木西林町会、千駄木三丁目南部町会、千駄木三丁目北町会、吉片町会、浅嘉町会、曙町会、上富士町会、上動五三会、動坂中町会、動坂町会、富士前町会、神明町会、神明上町会、神明西部町会、本駒自治会

chapter 2

第2章 策定に向けた方向性

公的な施設等

高齢者関連

高齢者あんしん相談センター駒込、高齢者あんしん相談センター駒込分室、特別養護老人ホーム文京千駄木の郷、文京昭和高齢者在宅サービスセンター、文京千駄木高齢者在宅サービスセンター、文京区向丘高齢者在宅サービスセンター

障害者関連

駒込生活あんしん拠点、本郷福祉センター、エナジーハウス、文京区放課後等デイサービスJOY、放課後等デイサービスカリタス翼

青少年関連

子育てひろば1か所、認可保育所22か所、児童館3か所、育成室7か所、小規模保育園3か所、事業所内保育事業1か所、地域子育て支援拠点こまびよのおうち

その他

駒込地域活動センター、汐見地域活動センター、保健サービスセンター本郷支所

場づくりの取組

常設型の居場所

2か所

子ども食堂

5か所

かよい～の
(介護予防の通いの場)

6か所

ふれあいいきいきサロン

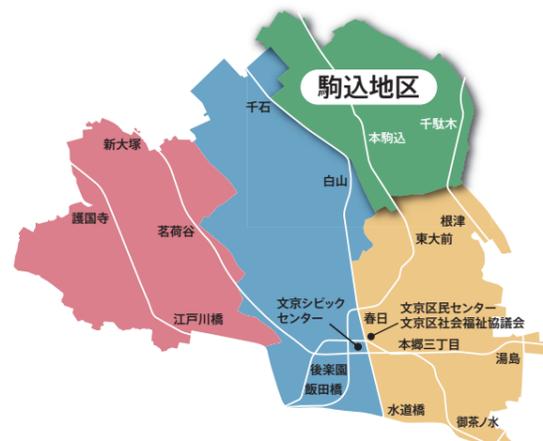
高齢者 12か所 障害児・者 0か所

どなたでも 子ども・子育て親子

12か所 2か所

サロンぶらす
(テーマ課題解決型サロン)

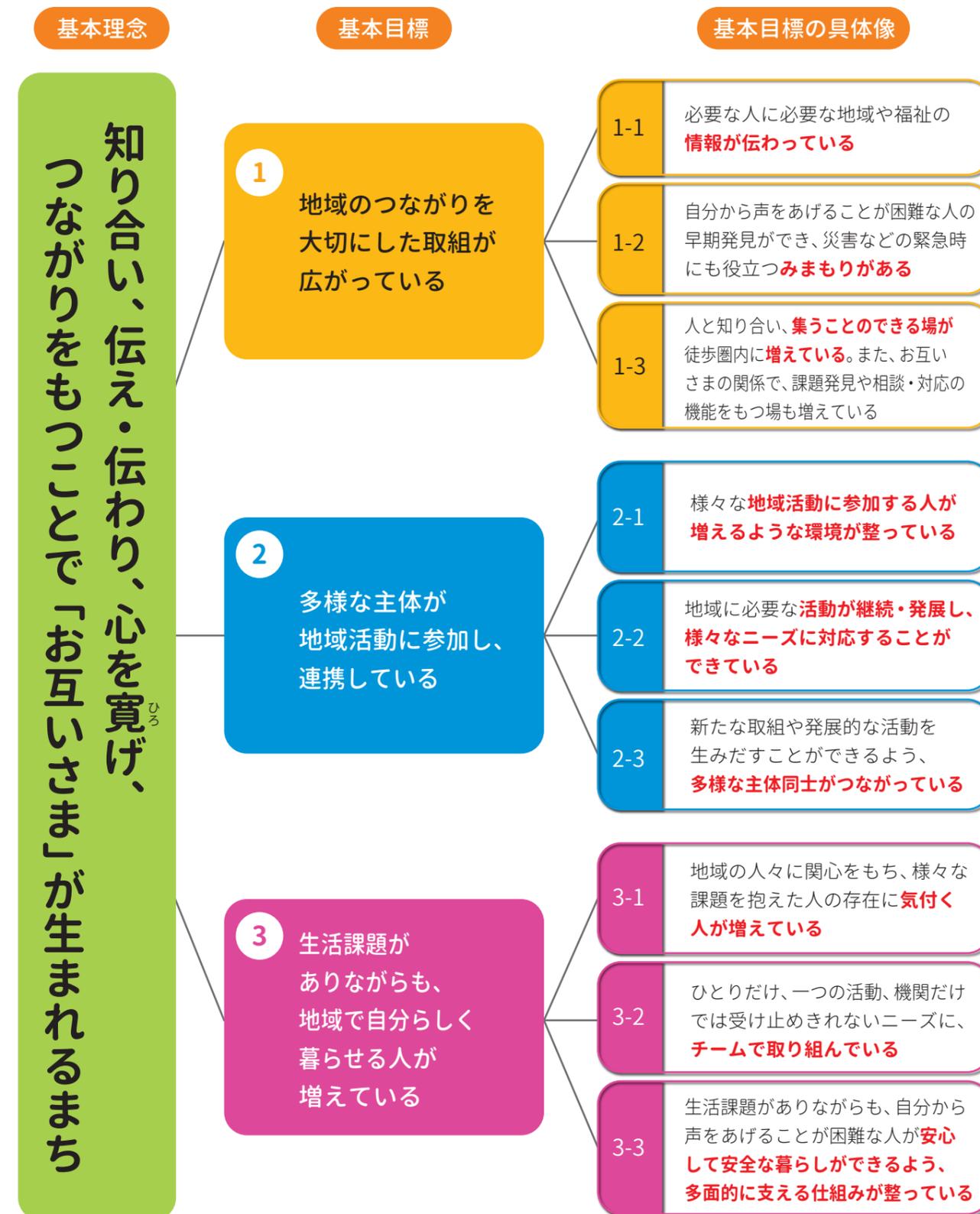
0か所



1 前計画(令和2年度～令和5年度)の成果と課題

前計画の策定から4年が経過し、計画改定の時期を迎えました。

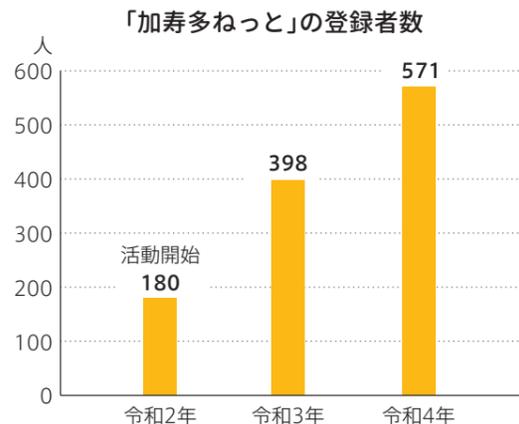
令和2年度～令和5年度における取組の成果と課題について、文京区地域福祉活動計画推進委員会において評価しました。



1-1 必要な人に必要な地域や福祉の情報が伝わっている

成果 集うことや出向くことに制約が加わったコロナ禍では、情報の伝達について電子媒体や紙媒体等を利用しながら、人と人とのつながりを大事にした取組をとって多くの情報が伝えられました。

オンラインでつながり、情報を届ける活動「加寿多ねっと」の取組



課題 新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から外出行動の抑制や3密を避けた行動が奨励されたため、情報を伝える手段においても電子媒体を活用した取組が広がりました。しかし、その一方で、「端末の操作が難しい」、「近くに相談できる人がいない」といった理由で、利用を躊躇する人たちがいることがわかりました。

1-2 自分から声をあげることが困難な人の早期発見ができ、災害などの緊急時にも役立つみまもりがある

成果 新型コロナウイルス感染症の影響により、もともと孤立しがちな人たちがさらに孤立してしまう現状がありました。地域では、対面での活動が制限されていたなか、LINE や電話、手紙を送るなど多様な方法でのみまもりが行われました。

みまもり訪問事業



かよいへの※団体代表者に伺った取組の工夫

- 電話やLINEなどで連絡する
- 様子伺いのハガキを送る
- 家で少しでも体が動かせるように絵や写真を中心とした体操内容がわかるお手紙を送る

※介護予防を目的に、住民同士が定期的に集まり身体を動かしながら、お互いできることとしてみまもりや助け合いを行う活動

課題 みまもり訪問事業では、訪問から電話に切り替えたことで、耳が遠く会話が難しいため、充分なみまもりをすることができない方がいました。また、新型コロナウイルス感染症の収束が見えてきても、一部の活動では、まだ再開できていない取組もあります。

1-3 人と知り合い、集うことのできる場が徒歩圏内に増えている。また、お互いさまの関係で、課題発見や相談・対応の機能をもつ場も増えている

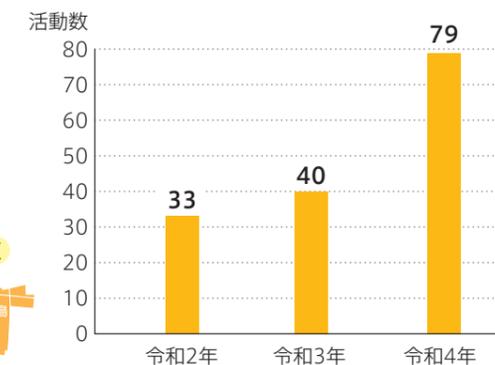
成果 人と知り合い、集うことのできるサロンや、課題の発見、相談対応ができる多機能な居場所が5か所増えました。それに伴い活動数も増えました。また、居場所を通じて、必要な支援につながるケースもありました。

多機能な居場所及び活動数の増加

- ① 風のやすみ場
- ② 氷川下つゆくさ荘
- ③ こびなたぼっこ
- ④ しゃべり間処かづ屋
- ⑤ Reなでしこ元町
- ⑥ こまじいのうち
- ⑦ 坂下テラス&動坂テラス
- ⑧ ぶんたねこいしか和

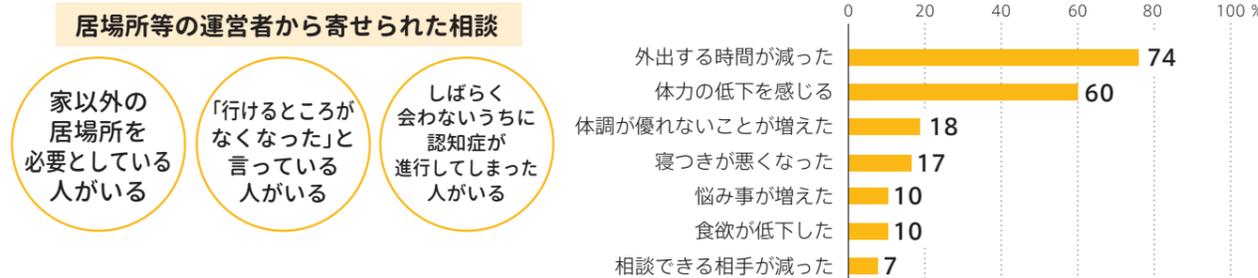


多機能な居場所の活動数



課題 新型コロナウイルス感染症の影響により、地域で交流する機会や場が減少し、心身の健康状態の低下や社会的孤立の増加が懸念されました。改めて人とのつながりを通じた交流の重要性が再認識されました。

コロナ禍での参加者の心身の状況の変化に関する調査結果



令和4年度 地域福祉コーディネーター 生活支援コーディネーター活動報告書 (文京区社会福祉協議会)

基本目標1に関するまとめ

- 必要な人に必要な情報を伝えるためには、電子媒体や紙媒体だけでなく、その人の状況にある程度理解している人から伝えてもらう必要があります。
- 身近な人や場所だからこそできる相談や、本人からの「普段と違う」という小さな変化に気づけることがわかりました。普段のつながりを大切にしたい取組が必要です。
- 居場所は増えた一方で、居場所に行けない人の存在も明らかになってきました。居場所以外につながる方法が必要です。

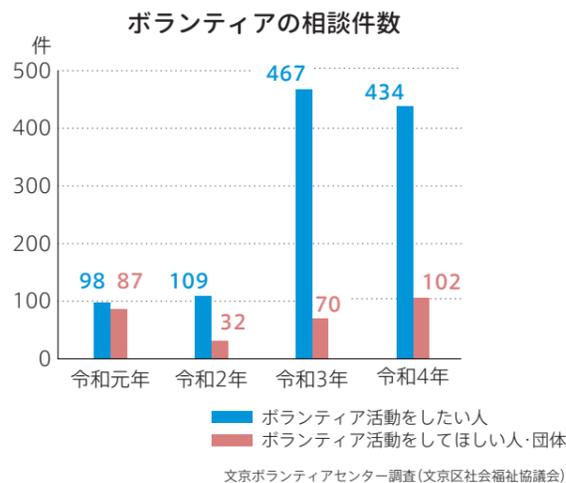
2-1 様々な地域活動に参加する人が増えるような環境が整っている

成果 新型コロナウイルス感染症の影響により対面で行う地域活動が制限されたため、令和2年度の終わり頃から、自宅できる活動やオンラインで参加できるボランティア活動のプログラムを増やしたところ、「自宅できることがあれば地域貢献をしたい」と参加を希望する人が増えました。

自宅できるボランティア活動



自宅できる活動「使用済み切手」の取組

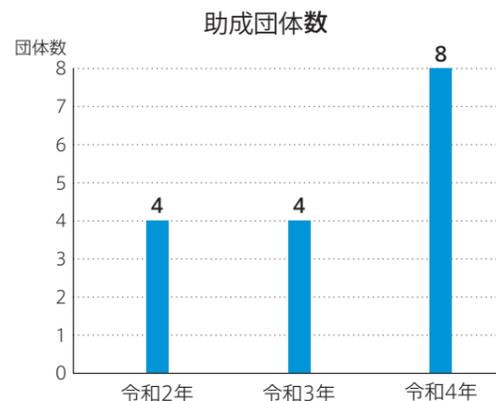


課題 単発・短時間の参加を希望する人が多くなってきています。一方、継続的に活動する担い手の確保が難しくなっています。

2-2 地域に必要な活動が継続・発展し、様々なニーズに対応できている

成果 ボランティア・NPO・企業・行政・学生(学校)・ソーシャルビジネスなどで活動する人により、様々な地域課題の解決や地域の活性化が進められました。

Bチャレ(提案公募型協働事業)

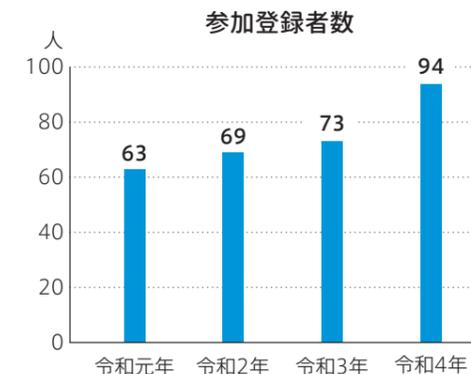


課題 新たなニーズとして、不登校・ひきこもりの子どもに対する支援ニーズが見えてきました。しかし、不登校・子どもに対する支援は、専門的な関わりを必要とすることもあり、地域活動だけでは対応が難しく、またその一方で、専門職だけで対応することも難しいことが見えてきました。

2-3 新たな取組や発展的な活動を生み出すことができるよう、多様な主体同士がつながっている

成果 これまで一緒に活動してこなかった団体との情報交換や連携につながるような取組が進みました。連携や協働をすることによって、新しい価値やより良いものを生み出すきっかけにつながりました。

企業地域連携推進ネットワーク会議

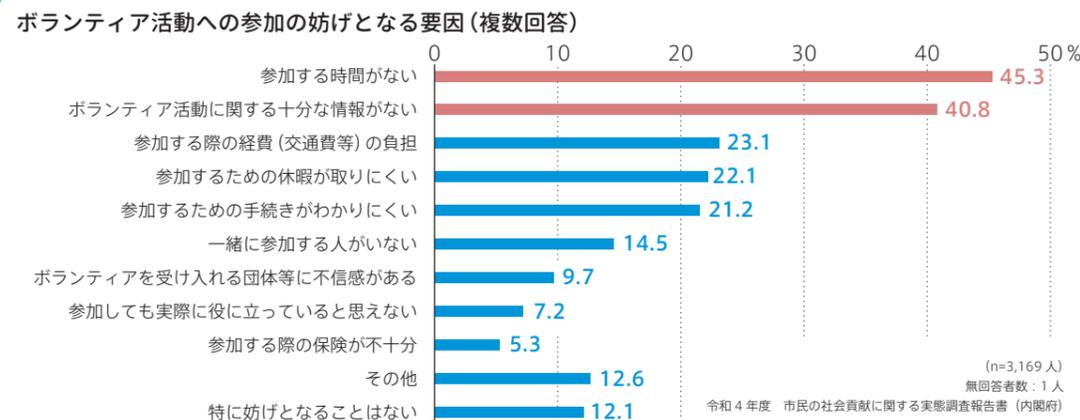


課題 取組に参加した方からは、「他の団体と協力したいと思っていたが、何から始めたらいいのかわからなかった」「相手の取組を知ることができて良かった」などの声がありました。多様な地域のニーズに対応していくためには、多様な主体同士の連携が必要です。しかし、団体同士が連携するためには、そのきっかけが必要であることもわかりました。



基本目標2に関するまとめ

- 新たな参加者を増やすためには、「参加する時間がない」、「ボランティア活動に関する十分な情報がない」などの参加の妨げとなる要因を考慮することが必要です。



- 継続して活動することができる担い手や、不登校・ひきこもりなどの子どもに対応することのできる知識・経験のある担い手の確保が必要となっています。
- 新たなニーズに対応するためには、多様な主体同士がつながることが必要です。また、多様な主体同士がつながるためには、つながるための機会をつくる必要があります。

3-1 地域の人々に関心をもち、様々な課題を抱えた人の存在に気付く人が増えている

成果 文京区地域公益活動ネットワークに参加している社会福祉法人が、子ども食堂を運営している人から活動内容を聞き、地域の実態や課題を知る取組が行われました。これにより、地域では様々な活動が行われていることや生活課題を抱えた人がいることを知り、その現状に関心をもってくれる人たちが増える機会になりました。

文京区地域公益活動ネットワークによる「緊急食支援プロジェクト報告会」



～参加した社会福祉法人から寄せられた感想～

場所、時間、お一人お一人の力の提供により、支援活動がとても身近なところで行われていたことを改めて知ることができた。

抱えている課題や、不安について知ることができ、また自分たちに何ができるか考えさせられた。

課題 地域には様々な問題や不安を抱えて過ごしている人がいることに気づく人が増えてきました。今後は、困りごとを抱えている人に気づいた人が、「どこに相談したらいいかわからない」など一人で抱え込むことがないよう相談しやすい地域づくりが必要です。

3-2 ひとりだけ、一つの活動、機関だけでは受け止めきれないニーズに、チームで取り組んでいる

成果 新型コロナウイルス感染症などの影響により、新しく顕在化した多様なニーズに専門職や地域住民が連携してサポートする取組が行われました。

総合支援資金アンケート調査及び支援回数	世帯状況	57.6%	単身
		39.3%	家族同居
		6.0%	友達と同居

現在困っていること (複数回答)	93.9%	生活費が不足
	75.7%	家族のこと
	54.5%	税金・保険料等が払えない
	48.4%	仕事の収入が少ない
	21.2%	家賃が払えない
	15.1%	病気のこと

回答数/対象者数 1,125 / 1,336 (回答率 84.2%)
支援回数が多かったケース (支援回数 30 回以上) 33 件
(文京区社会福祉協議会調査)

～チームとなって取り組んだ事例～

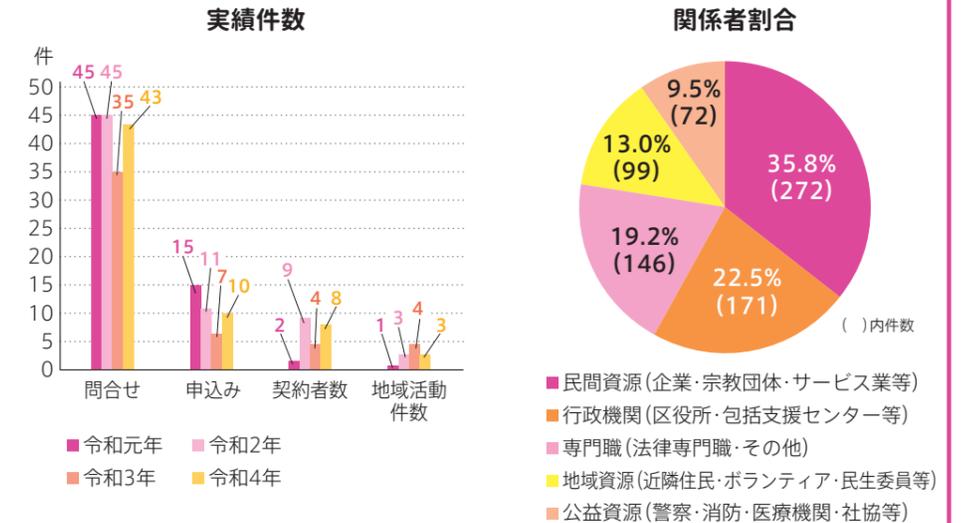
飲食店に勤務する母親から「新型コロナウイルス感染症の影響により、収入が減少したため、生活が困窮している」との相談が文社協へ入った。この家庭には子どもがいたため、コロナの貸付制度の申請だけでなく、文京区地域公益活動ネットワークと連携し、緊急食支援を行った。また、緊急食支援では、主任児童委員と商店が連携し、みまもり活動も行った。

課題 障害のある家族の問題など、本人だけでなく家族を含めた支援が必要な場合があります。また、つながり先のない福祉的な課題を抱えている若者もいました。このような新たなニーズに対応するため、複数の関係機関や地域がつながり、連携してサポートしていく必要性が見えてきました。

3-3 生活課題がありながらも、自分から声をあげることが困難な人が安心して安全な暮らしができるよう、多面的に支える仕組みが整っている

成果 身近に頼れる人がいなくても、住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるよう、元気なうちから死後の準備まで一体的にサポートする取組が、多様な関係機関・団体との連携で進みました。

多様なネットワークによる終活等支援の取組「文京ユアストーリー」



課題 将来、認知機能の低下により判断能力が十分でなくても、状況に合わせた適切な支援を受けながら地域で安心して安全な暮らしを送るためには、支援を行う関係機関・団体同士がお互いの役割を理解しながら本人の意思を尊重した支援を行うことが必要です。

基本目標3に関するまとめ

- 身近な場所だからこそできる相談がありました。身近なところで、困りごとを抱えている人に気づき、必要な支援につなぐことができる仕組みが必要です。また、困りごとを発見したときに一人で抱え込まない地域づくりが必要です。
- 困窮状態にある人や社会的孤立状態にある人は、個人あるいは世帯で様々な分野にわたる課題を抱え、複合的な支援を必要としている場合があります。そのため、生活、住まい、医療、就労、教育など複数の関係機関・団体同士がつながり、連携して支援していくことが必要です。また、高齢者、障害者、子どもなどの分野別に活動している関係機関・団体が、分野を超えて連携できるためのネットワークの構築が必要です。
- 誰でも経済的困窮や社会的孤立の状態になりうることもあり、特別なことではないことや、誰でも自分の意思が伝えられ、その意思が尊重されるような意識の醸成や支援が必要です。

2 策定委員会・作業部会における検討

策定委員会・作業部会では、文京区の地域福祉をめぐる現状と課題に関して話し合いが行われ、様々な意見が出ました。前計画策定時には、社会的孤立の予防についての意見交換が多くありましたが、今回は生活課題がある人だけではない、対象像が広がった意見交換が行われました。

作業部会①における検討のまとめ

「地域には多様な人たちがいて、つながり方も多様である。
身近な地域(日常)の中で、その人らしい人とのつながりや場を持つ」ことが大事。

前計画の取組の成果はP21～P27で記載しているとおりです。

新たに見えた課題は、以下のとおりです。

- ✓ 子ども・若者関連の相談が増加している
- ✓ 新型コロナウイルスの貸付制度で複合的な課題を抱える人が顕在化している
- ✓ 集いの場は増えているが、そこに来ることのできない人がいる

【作業部会①の議論のテーマ】

- ◎「つながりが広がりづらい人」とは、どのような人でしょうか。
- ◎うまくつながったこと、つながれなかったことはあるでしょうか。
- ◎どのような活動があれば、つながりをつくれるでしょうか。



出された意見

つながりが広がりづらい人とは、どのような人たちか。

聴覚障害などがあり、
情報を得ることに
課題がある人もいる。

地方から転入してきている人が多い。
特に子育てしている人は、助ける存在が
近くにいないので孤立しやすい。

赤ちゃんのいる親。
児童館などで初めて
地域にいることを
知ることがある。

若者の発達障害が
増えている。

人間関係に期待している人が
減っているのではないかと。

そもそも、
つながりを求めている人、
関心がない人もいる。

グループホームや施設に入所している人は、
地域とつながりを持つ機会はあるのか。

一見問題がなさそうに
見えるが、見えにくい悩みを
抱えている人がいる。

小学生は学童や地域活動の場が
増えているが、中高生の不登校が課題。

発達の特性や
障害などにより、
支援が必要な人。

ひきこもりがちな人。
以前に比べると
ひきこもりの境界線が
変わっているのかもしれない。

家族関係が悪いと、
外との信頼関係を築くことに
課題が出てくることが多い。

マンションに住んでいる人が多い。
つながりがあること自体を
知らない人が多いのではないかと。

関係が深くなると恐怖を感じる人
(ヤマアラシジレンマ)。
関係が広がりにくい。

つながりが広がりづらい人とつながるためには、 どうすれば良いか。

好きなことや興味のあること、
自分が得意なことなど
様々な切り口があると良い。

だれか一人でもつながってれば、
横のつながりは広がっていくと思う。

紹介するだけではつながれない。
一緒に体験してくれる人がいて
つながることができる。

同じような仲間からの
声かけや、共通の趣味などを
きっかけにする。

生活の質を上げるための
支援は入っているが、
生活を豊かにするために
つながりを持つという
視点が必要だと感じる。

地域の居場所や
商店や企業(民間)と
連携できると良い。

ひっそりと生きていける形、
干渉しない関係性もある。
そこも大事にしたい。

本人の気持ちを
尊重することが
大切である。

喫茶店や居酒屋などその人なりの
コミュニティ(つながり)が
あるのではないかな。

つながりを持てるフックを
増やせると良い。
色々な情報を持っている
人や理解者を増やす。

近所で挨拶するだけの関係性でも良い。
コミュニティに入りにくい人もいる。

無理につながるのでなく
待つことも大事。
その方がゆるやかに
つながることができる
こともある。

コロナ禍に民生委員が
「はがき作戦」を行った際、
訪問した時には素っ気なかった方から
丁寧なお返事がきた。
そこから世間話ができる関係になった。

だれでも来られる場があるとつながりやすい。
そこにゲームなど楽しいツールがあると良い。

だれでも来られる場ではなく、
テーマや特性の設定がある場の方が
つながりやすい人もいる。

議論のまとめ

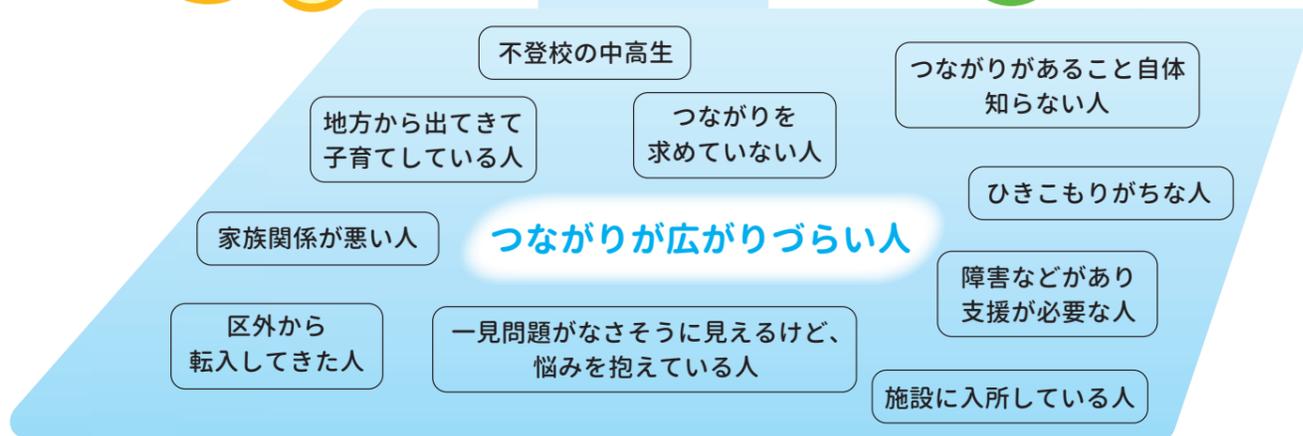
人や場(活動)につながるための土台

近所付き合い、
挨拶から始める
場の提供、
場がある
理解者を増やす
情報通を増やす

つながりが広がりづらい人とつながる(参加)の方法

テーマや特性を
設定した活動
はがき作戦で
アプローチ
地域の喫茶店や
居酒屋と協力
共通の趣味や
好きなことをきっかけに
民間(企業など)の
協力を得る
ゲームなど楽しい
ツールを活用
一緒に体験する

身近な地域



ゆるくつながる、
待つことも大切
ひっそりと
生きていける形、
干渉しない
関係性もある
本人の気持ちを
尊重する
ひとりでもつながってれば良い、
横のつながりは広がる
生活を豊かにという視点

共生の意識(認め合う)

前計画では、活動を増やすことがつながりをつくる方法として議論されましたが、作業部会①では、活動を増やすだけではなく、日常生活を大切にしながらつながりをつくっていくこと、多様な人たちにその人らしい活動や場などのつながりの根っこを広げていくことが必要であることが分かりました。つながりと言っても、活動や場に参加することだけではなく、その人らしい人とのつながりや場を持つことが大切です。日常生活の中でつながりを広げていくことが必要だと見えてきました。

作業部会②における検討のまとめ

「より豊かな生活を送るため、多様な人たちに合わせた参加(関わり)の機会がある」
ことが大事。

これまでの取組から見えてきた新たな課題と作業部会①での議論から見えてきた課題は、以下のとおりです。

- ✔ 多様な担い手の開拓、確保の必要性
- ✔ 地域には多様な人たちがいる
- ✔ 多様な人たちと多様なつながり方がある

【作業部会②の議論のテーマ】

- ◎現在は、地域活動や地域課題に関心を持っていないが、これから持つ可能性がある人とはどのような人たちでしょうか。また、どのようなプログラムやイベントがあれば関心や興味を持つことができるでしょうか。
- ◎関心を持った人が、実際に地域活動に「参加する」ためにはどのようなプログラムやイベントが考えられるでしょうか。また、参加後に運営側になっていく可能性はあるのでしょうか。
- ◎課題を抱えた個人が、受け手としてだけでなく主体として地域や活動に「参加する」ためには、どのようなことが必要でしょうか。



出された意見

地域への参加(関わり)に関心を持っていない人たちが、参加や関心を持つためには、どのようなプログラムやイベントがあると良いか。

地域の居場所などに
来ないの方が普通だと思う。
参加する人は、ロコミや誰かに
連れて来てもらうことが
多いのではないかな。

興味関心がない情報は入りづらい。
地域の居場所が身近にあっても
知るきっかけがない、一見分かりにくい。
喫茶店に行くより居場所に行くのは
ハードルが高いので、きっかけが必要。

単発のイベントでも
一回来てもらえることが大事。
まずは知ってもらうこと、
顔見知りになることから始める。

通りすがりの人に
声をかけたり、外に麦茶を置いたり
地域の居場所を知ってもらえる
工夫をしている。

地域への参加(関わり)に関心を持っている人たちが、参加することができるためには、どのようなプログラムやイベントがあると良いか。

学ぶ場、
体験できる場が
あると良い。

場があると誘いやすい。
居場所や拠点があることが
とても重要だと思う。

居場所の運営側同士が
つながっている。

多様な団体と一緒に活動すると
参加者層の幅が広がったことがある。

テーマがあると人は集まりやすいが、
だれでも来られるイベントの方が
周知しやすい。

プログラムに興味があると
参加するのではないかな。
誰がどのように誘うかも重要。

何らかの課題がある人たちが参加(関わり)できるために必要なことは何か。

課題がある人には、
多面的に色々な人たちが
色々な役割で関わる必要がある。

同じような課題を持つ人や
持っていた人が誘うと
参加しやすいのではないかな。

既存の場で特別扱いするのではなく、
その人に合った場(活動)に声をかけることが大事。

専門的な関係機関などが
伴走してくれると良い。
一緒に活動に参加してくれると
つながりやすいことが多い。

生活を豊かに、楽しくするための支援を
受けることに遠慮する人もいる。
一緒に行こうと言ってくれる人がいると
変わるのではないかな。

専門的な支援が
必要な人もいるので、
専門職との連携が必要。

継続した参加者(ボランティアや運営者)になってもらうために必要なことは何か。

活動に共感できる、活動の中で
ちょっとでも役割があると良い。

共感し合えれば、
一緒に活動できるし、
新しいつながりの縁も
広がっていくと感じる。

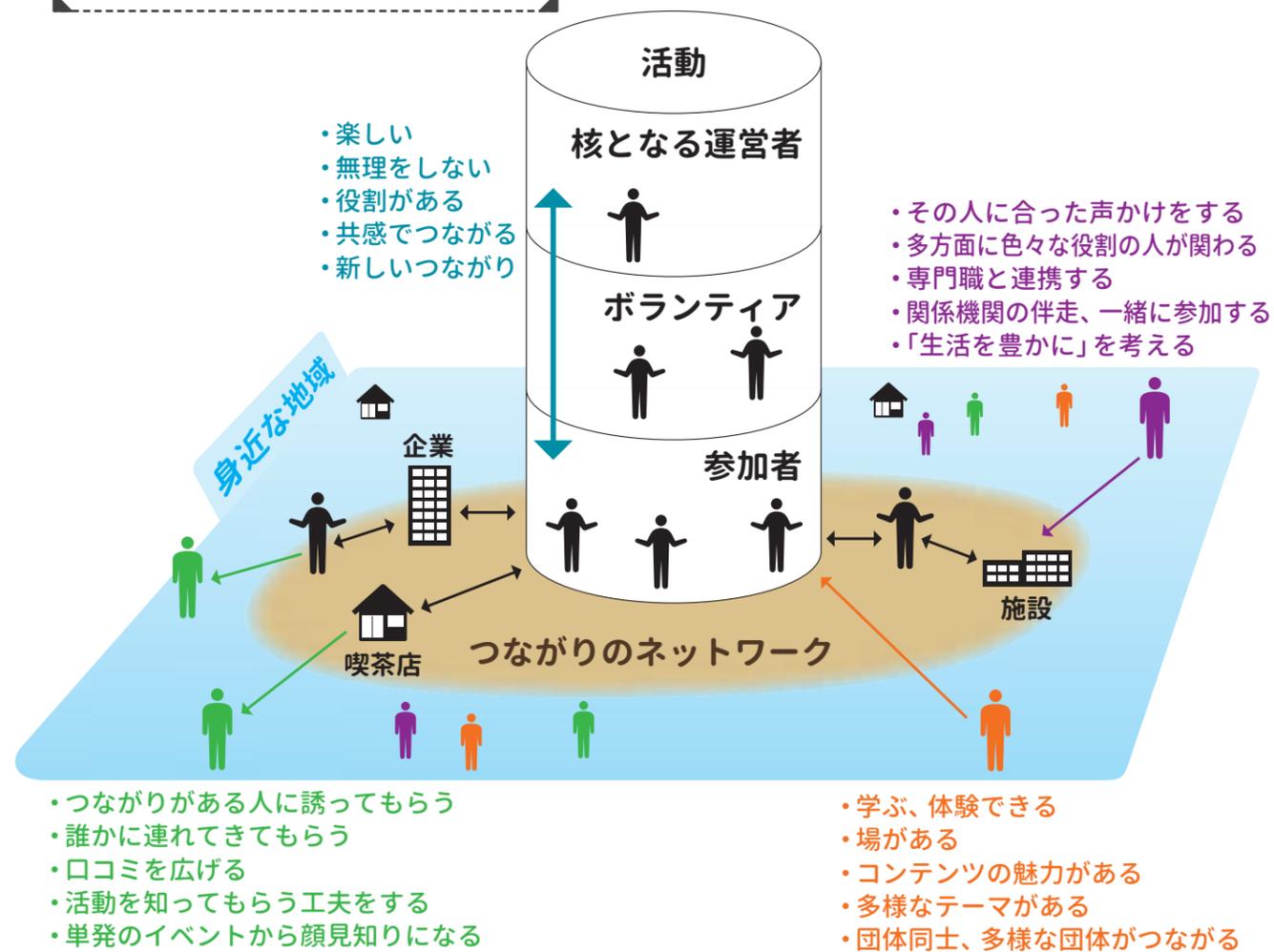
同じような活動をしている人たちと
課題解決に向けて話し合うと、
解決するための糸口が見つかる
かもしれない。

活動(運営)する側が楽しい、
無理をしないことがとても大事。

議論のまとめ

- 地域とのつながり・地域活動に興味関心がない人
- きっかけがあればつながりたいと思っている人
- つながるためには支援が必要な人
- ↑ ↓ 継続した参加者(ボランティアや運営者)になる要素

活動者/キーパーソン
(誘う人・つながっている人)



作業部会②からは、つながり(関わりの機会)をつくるためには多様な機会が必要であること、また、生活課題がある人だけではなく、生活をより豊かにするという視点を持って、多様な人たちに合わせたつながり(関わりの機会)が必要であることが分かりました。活動に直接参加しなくても、作業部会①で議論された、その人らしいつながりを持つことで、芋づる式(P40コラム参照)に他の活動や関わっている人、活動内容を知っている人につながっていくことが見えてきました。

本計画では、上図の円柱で示した、活動の「核となる運営者」の関わりを「参画」、当日にお手伝いするボランティアや参加者の関わりを「参加」として捉えています。

作業部会③における検討のまとめ

「知り合うところから、ともに目的を共有し、お互いの強みを活かしてネットワークで継続的に取り組んでいくこと」が大事。

これまでの取組から見えてきた新たな課題と作業部会①②での議論から見えてきた課題は以下のとおりです。

- ✓ 住民と専門職との連携ができる仕組みやネットワークの必要性
- ✓ 個人の意思が尊重される意識の醸成
- ✓ 多様な人たちと多様なつながり方があり、多様な人たちに合った参加(関わり)の機会がある
課題がある人に対してだけではない、連携・協働の必要性

【作業部会③の議論のテーマ】

◎現在、委員の皆さんが活動される中で、専門の相談支援機関(専門職)と地域活動とが連携・協働する際にどのような工夫があるといいでしょうか。

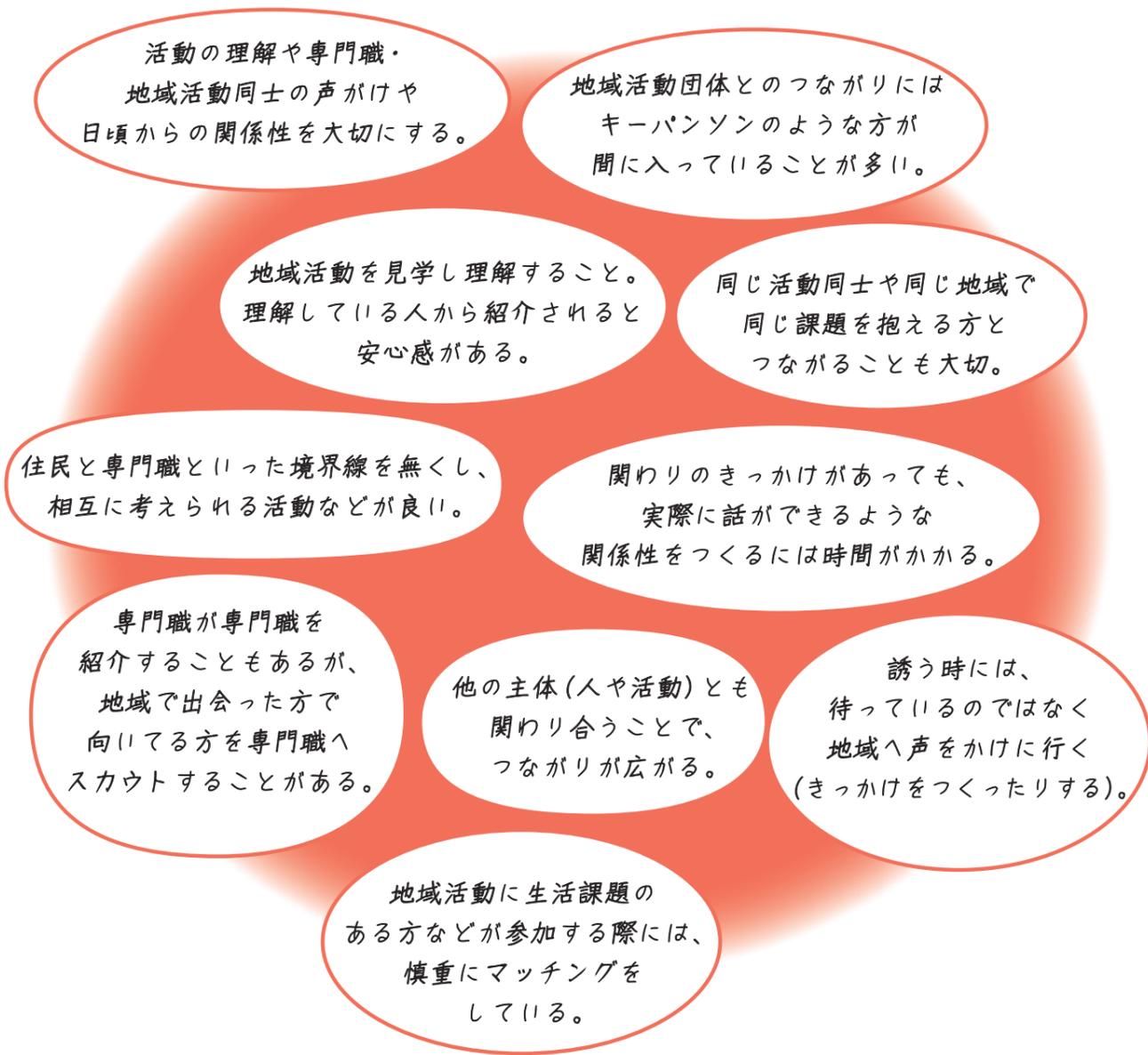
- ①知り合う場面
- ②関わり合う(連携)場面
- ③理解し合う(協働)場面



出された意見

現在の活動の中で、専門の相談支援機関(専門職)と地域活動が連携・協働する際に、どのような工夫があると良いか。

①知り合う場面での工夫やポイント



②関わり合う(連携)場面での工夫やポイント

専門性のある活動には、一定の情報共有と相談できる継続した専門職との関係性が必要。

課題解決のための支援が終わると関係が切れてしまうことがあるため、役割の線引きをせずに継続的な関わりを持つことが必要。

「住民主体の活動」や「専門的知識を活かした地域活動」や「専門職主体の活動」と分けたり選んだりするのではなく、その活動同士の重なりを大きく育てていくことが必要。

生活課題のある人が活動する際には、本人の特徴や体調不良のサインなどを共有し、何か困った際にはいつでも連絡を取り合えるようにする。

各活動が、お互いに継続した関係を築くには、協働して何かを実施するなどのプロセスが大切。

一緒に考えられる継続した関係性があると、安心して活動することができる。それにより、関われる幅が広がる。

各活動や専門職などにつながりだけでなく、関係性を継続することも大切。

アドバイスを求めるだけでなく、一緒に悩む関係性になるとお互いに助け合えて良い。

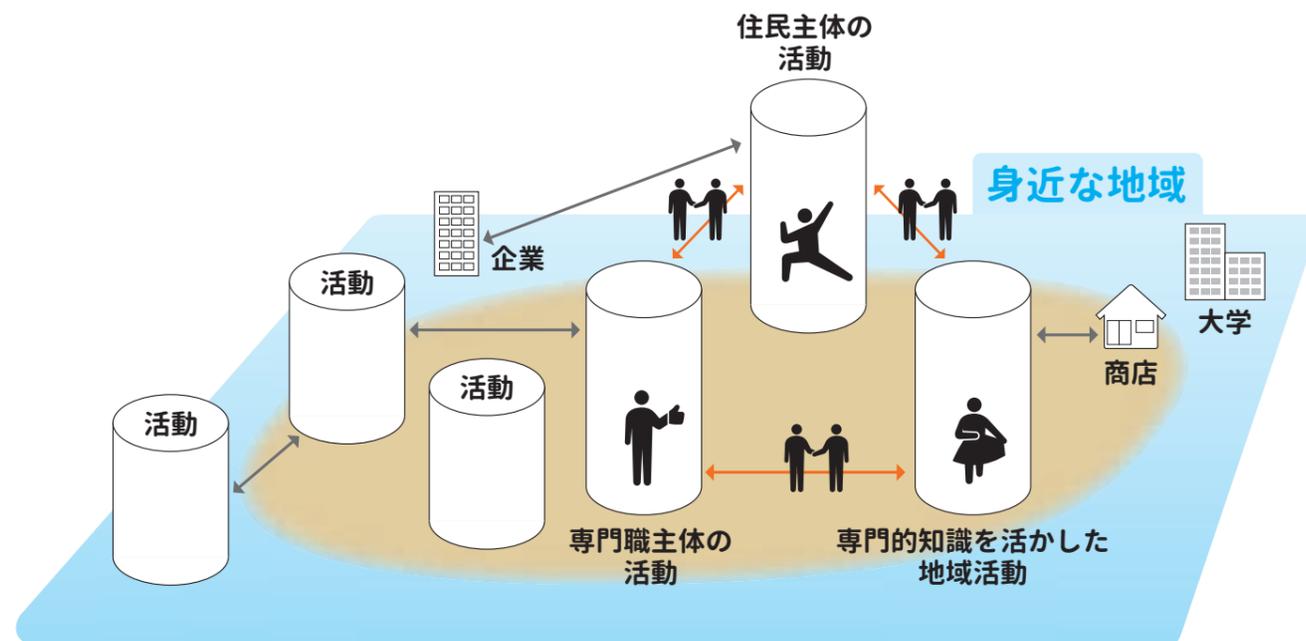
③理解し合う(協働)場面での工夫やポイント

「そういう考え方もあるよね」と違いを認めるなどのお互いに柔軟性のある関わり方も必要。

役割の線引きをせずに継続的な関わりを持つ。

生活課題のある人も専門職、地域住民と分けなくても良く、それぞれの能力や役割を活かした協働を考えることが大切。

議論のまとめ



【知り合う場面でのポイント】

- 活動を理解している人から誘う方が安心感がある
- 地域活動に人を紹介する際には、慎重にマッチングする
- 誘うときは声をかけに行く
- 日頃からの関係性を大切にする
- 関係形成には時間がかかることを理解する
- 住民と専門職の境界線をなくす

【関わり合う(連携)場面でのポイント】

- 一定の情報共有する
- 他の主体(人や活動)とも関わり合う
- 一緒に考えられる継続した関係性があると安心、関われる範囲が広がる
- 地域/専門性/専門職と分けたり選んだりするのではなく、重なりを大きく育てていくことが必要
- お互いに継続した関係を築くにはプロセスが大切

【理解し合う(協働)場面でのポイント】

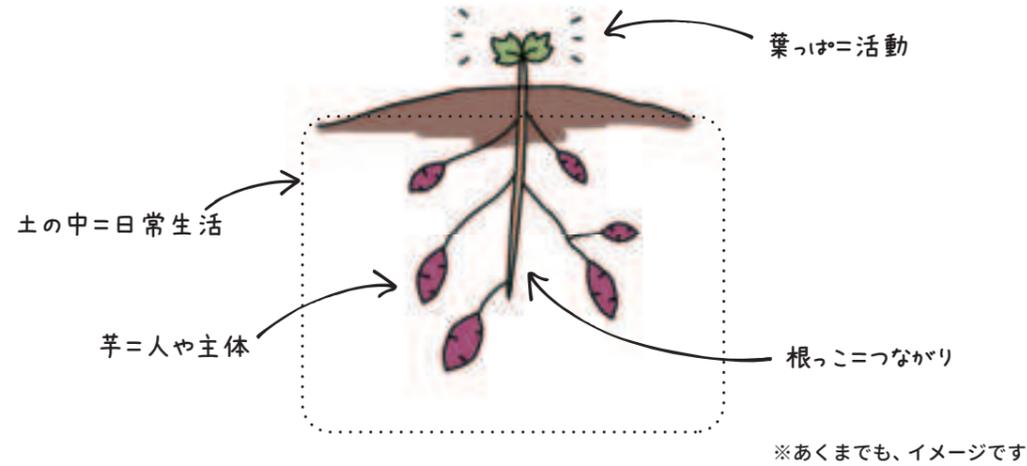
- それぞれの能力や役割を活かした協働を考える
- お互いに柔軟性が必要
- その人の生活を豊かにするときに、活動がどのように役立つかを考える
- 役割の線引きをせずに継続的な関わりを持つ

作業部会③では、活動主体同士がつながると、その接点から新たな活動が生まれたり、つながりが広がったりすることが分かりました。そのためには、地域や専門職、活動団体との距離が近いこと、知り合うところからお互いの強みを活かしたチームとしてネットワークをつくるのが大切です。継続した関わりで取り組んでいくことは、地域、専門職、専門性を持った人や主体が連携・協働するために必要であることが見えてきました。

芋づる式につながろう！

作業部会の議論で出た、地域のつながりを「芋づる式」のイメージで表現してみました。「芋づる式」とは、サツマイモなどの芋のつるをたぐると、次々と芋が連なって出てくるさまの例えです。

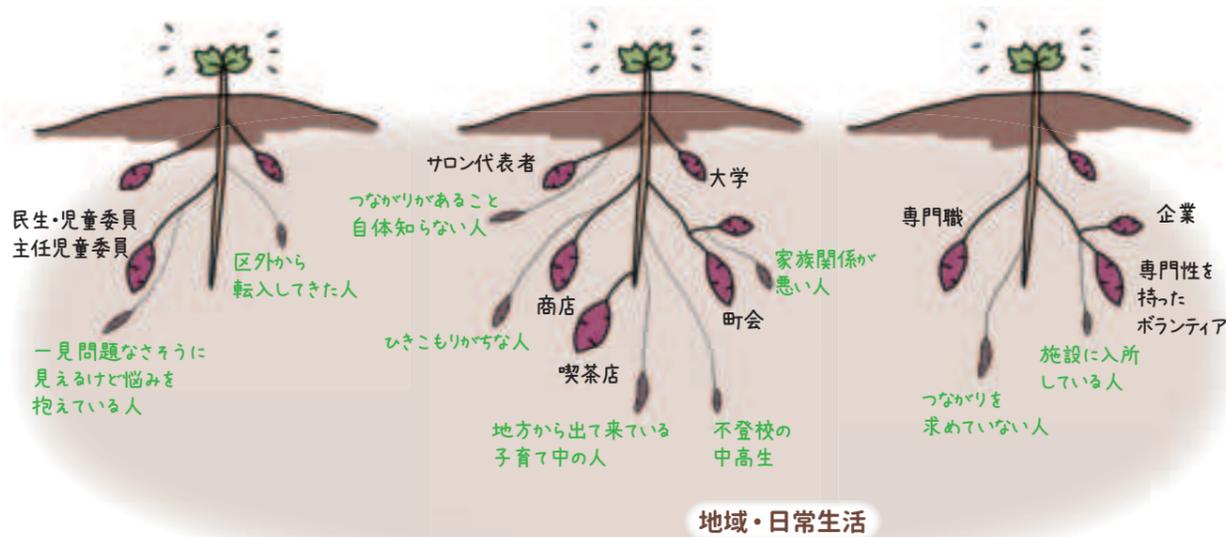
今回、このようなイメージができたのは、本計画の策定委員の方々の「ひとりでもつながっていればよい。そうすると横のつながりは芋づる式に広がっていく。」という発言からでした。いかがお感じになりますか？



その人らしい人とのつながりや場を大切にしたい！

芋を「人や主体」、根っこを「つながり」に表現すると、現状は、細いつながりしかない芋が土の中にたくさんあります。

これまでは、どう葉っぱ（活動）を増やしていけるのかが議論の中心となってきましたが、これからは、葉っぱを増やすだけでなく、土を豊かにし、土の中にいる多様な芋を大切にしながら、根っこを太く伸ばしあっていきましょう。

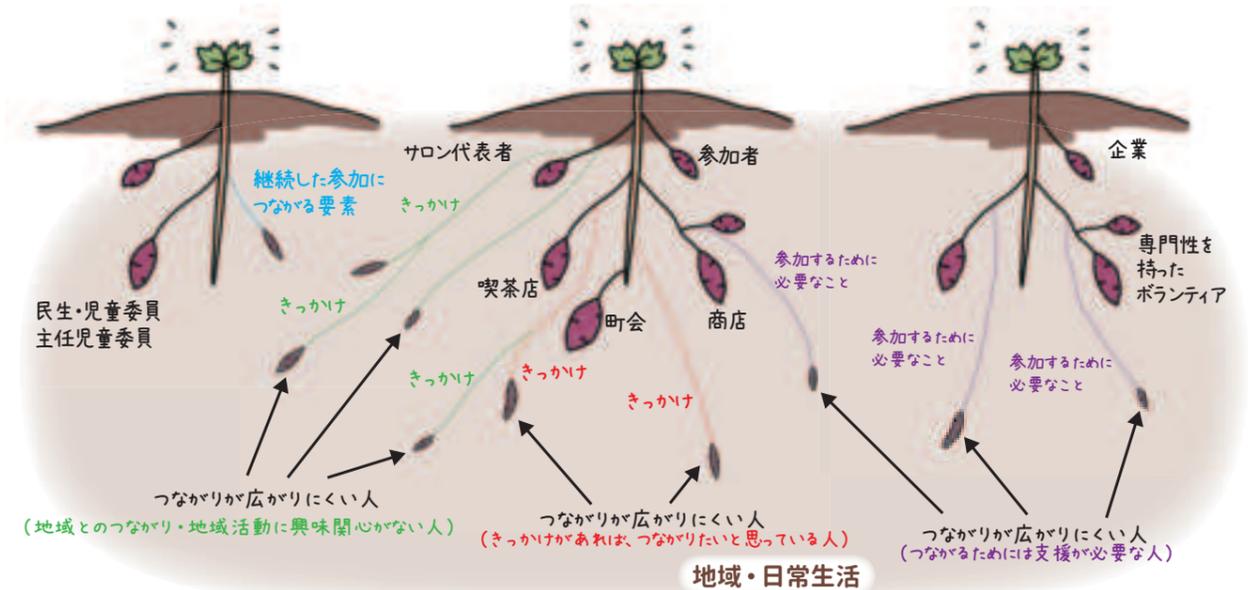


P31参照

多様な人たちに合わせた根っこの伸ばし方を考えよう！

どうしたら根っこを伸ばしていくことができるのでしょうか。土の中には、つながりに関心がない芋（人）たちもいます。

策定委員の方から「長年ひきこもっている子とオンラインゲームを通じてつながって、今では実際に会ったりしているよ。」といったエピソードがありました。その芋（人）のやりたいことや好きなことを「きっかけ」に、根っこを伸ばすことができるかもしれません。皆さんだったらどのように根っこを伸ばしていきますか。

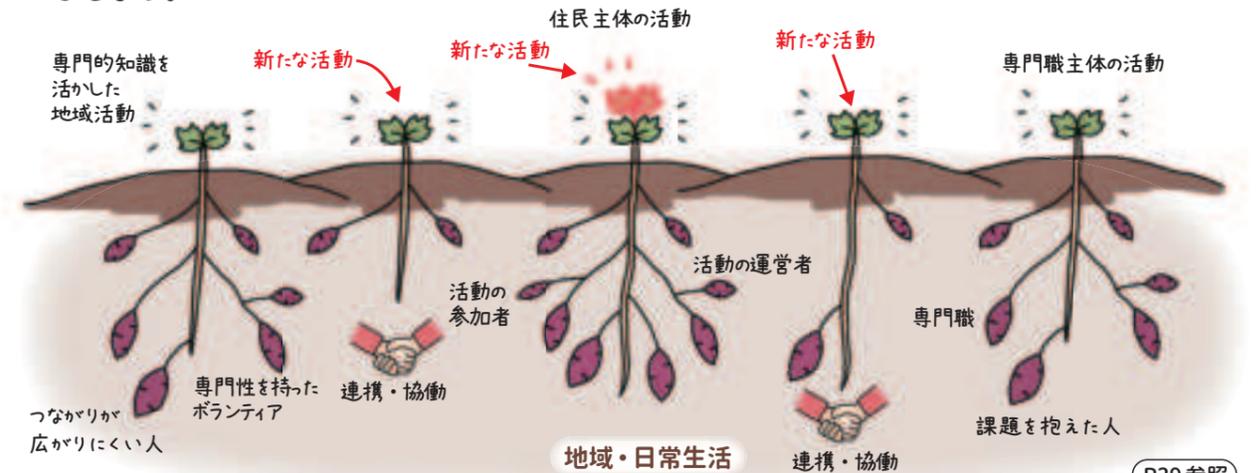


P35参照

連携・協働のネットワークを作ろう！

根っこには、葉っぱが倒れないようにしっかりと支える役割があります。また、必要な成分を葉っぱ（活動）や芋（人・主体）に届ける役割があります。根っこが土の中で伸び、芋としっかりつながっていることで、何か困りごとを抱えたときに、必要な手助けができる地域になります。

また、このような連携・協働のネットワークがあることで、新たな葉っぱが生まれることもあります。皆さんが「芋づる式」につながっていくような連携・協働のネットワークを作りましょう。



P39参照

今回は、サツマイモで表現しましたが、土の中には色々な植物や生物がいます。それらとは、どのようにつながれるのでしょうか。

3 本活動計画の策定に向けた方向性について

策定委員会における検討まとめ

策定委員会においても様々な意見交換が行われました。

出された意見を①身近な地域 ②参加・参画 ③連携・協働の3つにまとめました。

①身近な地域

地域情報を良く知っているつなぎ役がいると、孤立予防になる。

地域の人に支えてもらいたいが自分のことを知られたくない矛盾もあり、そもそもつなぎ自体を求めていない人もいる。

ひきこもりが増加し、コロナ禍で不登校も増えている。介護をしていた中高年世代の孤立もある。

マンションが増加しているが、町会に入らない人も増えてつなぎづらくなっている。高齢化のため、世代も変わった。何かあった時にSOSに気づくことが困難で、気づくための接点をつくる必要がある。

災害が起こってから初対面同士で対処するよりも、災害が起こる前から顔の見える関係づくりが必要。

継続して声をかけ合える関係でつなぎを持つことが大切。困った時に思い出ししてくれるような関係性でありたい。

②参加・参画

地域に参加しない人たちにどうアプローチするか。専門職や福祉的な立場を見せず、自然に関わっていきける方法も必要。

近所だから付き合いにくい人もいる。その人ごとの興味関心などその人に合わせてつなぎをつくる必要がある。

集いの場では対話が大切。色々な考え方の人が集える場になるように継続した信頼関係を築くことが大切になっている。

専門職に相談することにハードルの高さを感じる人もいる。地域活動と連携して一緒に活動することで参加しやすくなるのではないかな。

特に高齢者がひきこもりにならないためには、いつでも気軽に集える場や一緒に活動する仲間が必要。活動を伝え、参加を促すきっかけづくりが重要。

③連携・協働

複数の課題を抱えていて、ひとつの機関だけでは対応できないケースが増えている。発見から解決するまでの仕組みを行政も含め、重層的に横のつなぎを強くして取り組む必要がある。

高齢・障害・子ども・貧困などカテゴリー分けした支援には限界がある。

地域住民だからこそ支えられることもあるのではないかな。広報や研修の機会などを通じてアンテナを張る人を増やしていいのではないかな。

専門職チームだけで関わっていても当事者が孤立したままになってしまうことがある。他の活動者などと連携し共有することが、多様性のある地域社会には必要。

専門職も地域もお互いが隙間を意識しながら支え合う社会が理想。

①「身近な地域」についての議論

前計画では、「社会的孤立を解決するための早期からつながる仕組み」がキーワードでした。

今計画では、「地域には孤立している人だけではなく、つながりを求めている人がいる」「その人らしいつながり方を大切にする」など、「対象像の広がり」や「つながり方の多様性」というキーワードがあげられました。また、そのような多様なつながり方を実践するため、「地域活動を増やすだけではなく、人と人、活動主体同士のつながりに注目することが大事」とし、「それぞれのつながりを大事に育てながら、つながりを芽づる式にしていくことも必要」という視点があげられました。

②「参加・参画」についての議論

前計画では、「地域のニーズが多様化している視点から、多様な主体による活動への参加」がキーワードでした。

今計画では、地域ニーズに対応するためだけではなく、より広い対象の人や団体に参加・参画を推進するうえでは「楽しさ」「より豊かな生活」という視点が加わることが重要になることや、一人ひとりの関心や参加意欲、個性に着目した「多様な参加（関わり）機会の確保」というキーワードがあげられました。

③「連携・協働」についての議論

前計画では、生活課題がありながらも自分らしく安心・安全に地域で暮らすために「生活課題への気づき」と「地域住民と専門職、公的機関との連携」がキーワードでした。

今計画では、「地域住民と専門職の継続した関係性」や「活動主体同士の横のつながりと重なり合い」など、地域住民と関係機関・団体がスムーズに連携するための具体的なキーワードがあげられました。

前計画のキーワード

早期からつながる仕組み

多様な主体による活動への参加

生活課題への気づき
地域住民と専門職、公的機関との連携

今計画のキーワード

身近な地域

対象像の広がり、多様性
その人らしさ

参加・参画

参加（関わり）の多様な機会の確保
楽しさ、より豊かな生活

連携・協働

継続した関係性
主体同士の横のつながり、重なり合い

chapter 3

第3章

文京区地域福祉
活動計画が
めざすもの

1 計画の基本理念と基本目標

計画の基本理念

この基本理念は、前計画時に策定したものです。この基本理念を踏襲しながらも「多様性」や「より豊かな生活」など新たな視点を加え、社会の変動に応じた取組を進めていくものとします。

知り合い、伝え・伝わり、心を寛げ、 つながりをもつことで 「お互いさま」が生まれるまち

課題を抱える状況になることはどの年代の誰にでも起こりうることです。しかし、課題が深刻化してからすぐに相談することや、制度につながることは難しいため、普段から信頼できる人とつながっておき、周囲の人が状況を早期に発見できるようにしておくことが重要となります。しかし、社会的な立場や、その人にとって心地よい関係は人によってそれぞれ異なります。このような現代社会の中で人々の様々な状況に対応できるよう、つながるための多様なしかけづくりが求められます。

このような人々の現状や課題を踏まえ、これまでの取組を充実させるため、地域住民同士がまず顔見知りになり(知り合い)、自分のこと・困りごとなどを人に伝え(伝え)、聞いた人に伝わり(伝わり)、寛容な心で受け止め(心を寛げ)、住民同士や多様な活動団体などつながりをもつことで(つながりをもつ)、制度・分野ごとの「縦割り」や「支援する」「支援される」という関係を超えて、「お互いさま」で助けあう気持ちが醸成されるまち(「お互いさま」が生まれるまち)を目指します。

文京区地域福祉活動計画(令和2年度～令和5年度)より

計画の基本目標

基本理念を実現するために3つの基本目標を定め、取組を進めていきます。

基本目標 1

地域には多様な人たちがいて、つながり方も多様である。身近なところで、気にかけて、声をかけ、関心を持ち、支え・支えられる関係性が増えている。

地域で暮らす、多様な世代や状況にある人たちが、知り合い、つながることで、様々な課題を抱えたときにお互いが気づき、課題が深刻化する前に適切な制度や支援が受けられるまち。地域の人がつながることで、安心して暮らすことができ、住んでよかったと思えるまちを目指します。

より豊かな生活をおくるため、多様な人たちに合わせた参加・参画の機会が広がっている。

多様性を尊重した幅広い参加の促進として、一人ひとりの関心や参加意欲、個性に着目した多様な参加・参画や関わりの機会があるまち。また、地域活動への参加・参画をとおして、参加者がやりがいを感じ、日々の暮らしが楽しくなるなど、より豊かな生活を送ることができるまちを目指します。

地域と関係機関、団体が知り合い、一緒に悩み・考え、お互いの強みを活かす機会をつくり、ネットワークで継続的に取り組んでいる。

複合的な課題に対応するため、多様な主体が知り合い、それぞれの強みを活かしながら一緒に悩み・考えるプロセスを大切に、継続した関係性を築くことができるまち。地域と関係機関、団体が連携・協働することのできるネットワークを構築していくことを目指します。

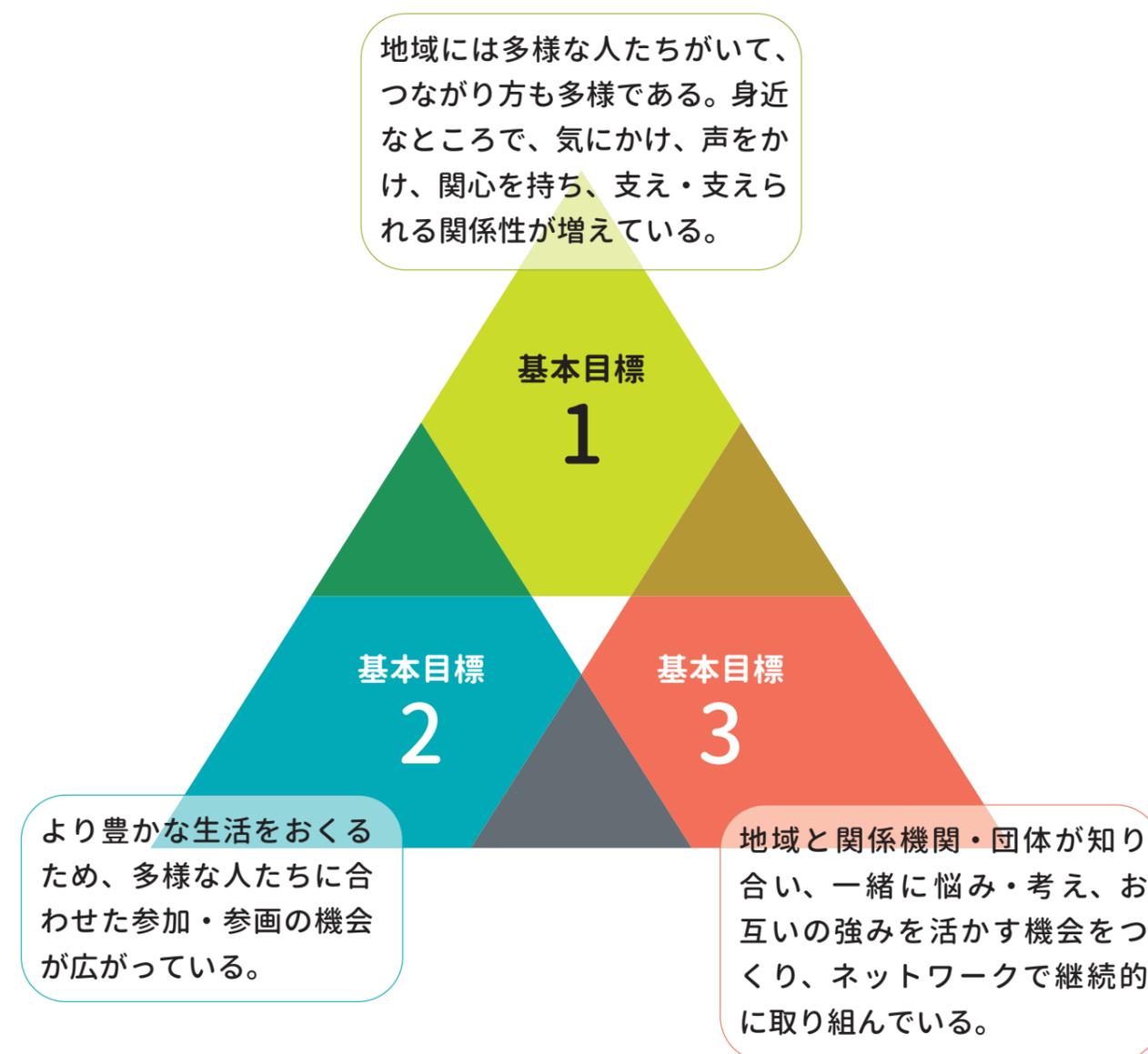
基本目標 2

基本目標 3

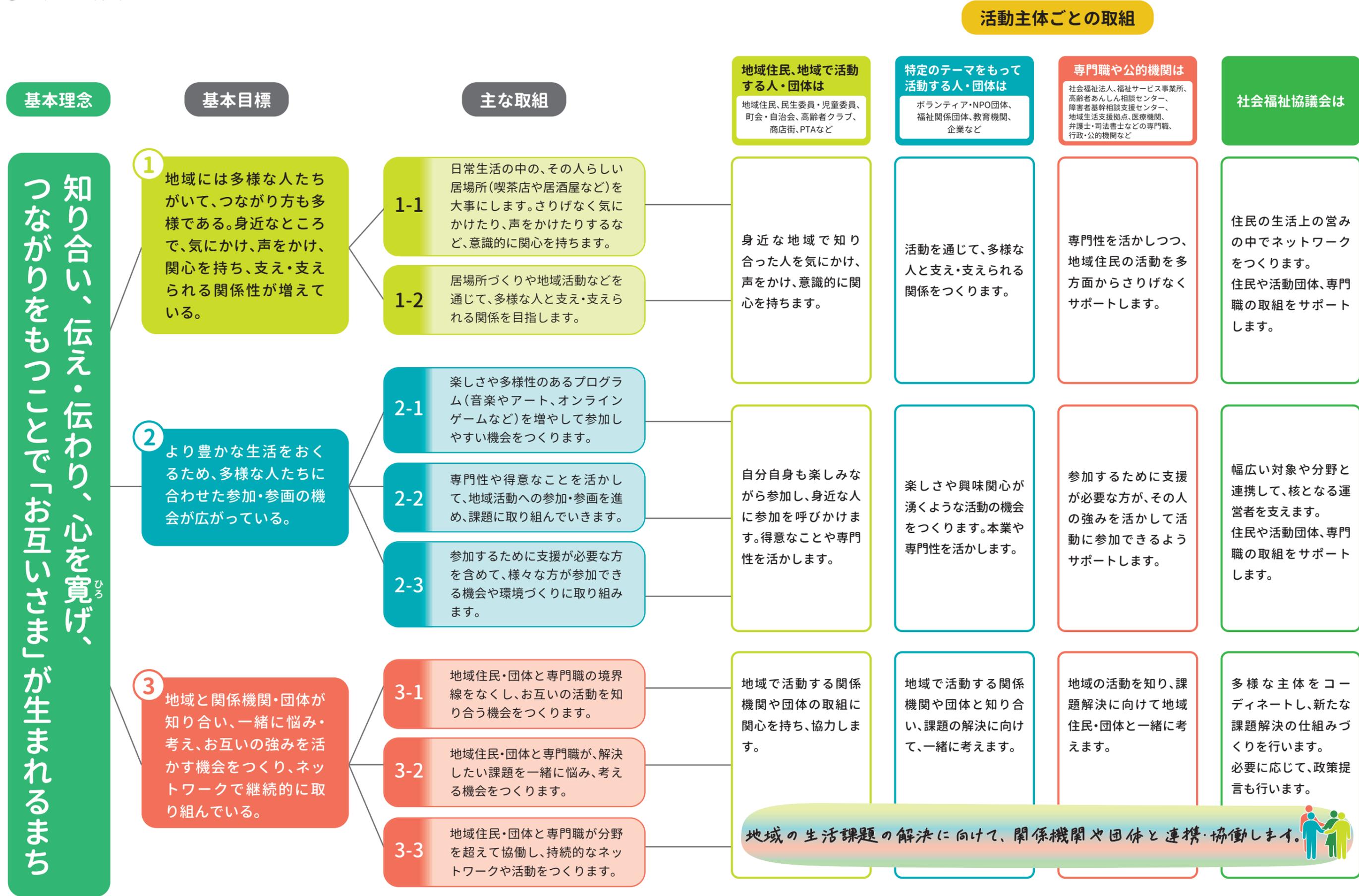
2 基本目標の関係性

基本目標は、それぞれに独立しているわけではなく、また特定の順序で行われるものではなく、図のように重なり合い、相互に効果を発揮しながら基本理念の実現に結びついています。

基本目標1は身近な地域での活動の視点、基本目標2は参加・参画の視点、基本目標3は連携・協働の視点で取り組むことが示されています。



3 計画の体系



4 基本目標の主な取組

基本目標 1 地域には多様な人たちがいて、つながり方も多様である。身近なところで、気かけ、声をかけ、関心を持ち、支え・支えられる関係性が増えている。

1-1 日常生活の中の、その人らしい居場所(喫茶店や居酒屋など)を大事にします。さりげなく気かけたり、声をかけたりするなど、意識的に関心を持ちます。

文京区では、核家族世帯や単身世帯が多くなっています。

特に高齢者は4人に1人が一人暮らしで、閉じこもりがちになっている方もいます。

誰かから押し付けられたものではない、自分らしい居場所を見つけていきましょう。

できたらいいストーリー
～自分らしい居場所をつくろう～

登場人物 **コウラクさん**

- ・数年前に妻を亡くして一人暮らしをしている男性
- ・自炊はせず、外食中心で友人はおらず、一人で食べて帰ってくる生活を送っている

登場人物 **コイシカワさん**

- ・定食屋の店主で長年地域に暮らす情報通
- ・お客さんのことをさりげなく気にかけている



戸田 孝雄さん

長く民生委員をやっていて、白山で「おへやカフェ natchan」を経営しています。

ごはんを食べに来たり、お茶を飲みに来る日常のつながりだけど、ちょっとしたことを気かけ合うような関係が増えたらいいですね。

家や学校、職場以外に、あなたが自分らしくいられる場所はどんなところですか？

1-2 居場所づくりや地域活動などを通じて、多様な人と支え・支えられる関係を目指します。

これまでの地域活動は、支える側と支えられる側に分けられることがありました。

これからは、居場所や活動とおして人と人が出会い、支える側にもなり、支えられる側にもなるという関係性をつくっていきましょう。

できたらいいストーリー
～支え・支えられて～

登場人物 **センゴクさん**

- ・居場所を運営している

登場人物 **ハクサンさん**

- ・子育て世代、小学校低学年の子どもがいる
- ・夫婦で飲食店を経営していて忙しい
- ・東南アジア出身



高嶋 弘子さん

小石川で、赤ちゃんから高齢者まで集う地域の居場所「ぶたねこいしか和」を立ち上げました。

お互いに支え、支え合う関係を居場所で作れるといいですね。

あなたならどんな居場所づくりや地域活動をしたいですか？

基本目標
2

より豊かな生活をおくるため、多様な人たちに合わせた参加・参画の機会が広がっている。

2-1 楽しさや多様性のあるプログラム(音楽やアート、オンラインゲームなど)を増やして参加しやすい機会をつくります。

文京区ではマンションが増えたり、外国籍の方も増加したりと住民が多様化しています。地域との関係が希薄になっており、地域との関わりがなく、どのように地域と関わればいいのか分からない人も多くなっています。音楽やアート、ゲームなども人をつなぐキーワードになります。色々なプログラムをとおしてつながりましょう。

できたらいいストーリー
～“楽しい”をきっかけに～

登場人物

- スイドウさん**
 - レコード店を経営
 - 色々な人が参加できる楽しい音楽イベントを企画中
- ホンコマゴメさん**
 - デザイン会社に勤めている30代
 - 新しいマンションに引っ越してきたばかりで、近所とのつながりがない
- メジロダイさん**
 - この地域で障害者支援に関わる専門職

① いろいろな人が楽しめて参加できるイベントが無いなあ。そうだ！自分でイベントを開催しよう！

② こんな楽しそうなイベントがあるんだ！

③ 僕は近所です。あなたは、普段どんな音楽を聴かれていますか？

④ 楽しかった～！参加してよかった～！

小石川に事務所がある建築家ユニットです。小石川植物祭を立ち上げました。



アレクサンドラ・コヴァレヴァさん

本当に多様な方が運営に協力してくださり、瞬く間につながりの輪が広がりました。

佐藤 敬さん

あなたにどんなプログラムがあったら、参加したいですか？

2-2 専門性や得意なことを活かして、地域活動への参加・参画を進め、課題に取り組んでいきます。

地域の活動では、専門的な技術や知識がある人の関わりを求めています。専門性や得意なことを活かして地域と接点をもつことができる機会をつくりましょう。そしてそれを、地域の課題に取り組める活動にしていきたいと思います。

できたらいいストーリー
～“得意なこと”が地域活動に～

登場人物

- スイドウさん**
 - レコード店を経営
 - 音楽をツールに色々な人が参加できるイベントを開催
- ホンコマゴメさん**
 - デザイン会社に勤めている30代
 - 新しいマンションに引っ越してきたばかりで、近所とのつながりがない
- メジロダイさん**
 - この地域で障害者支援に関わる専門職

① ミュージックフェス楽しかったな、もっと地域の人とつながれる機会があるといいな

② 自分も地域で何かできることはないかな、チラシづくりやSNS発信は得意だけど、場所がないんだよね

③ 月1回音楽サロンを始めたんだけどよかったです！参加しない？

④ いいね、知り合いにも声をかけてみるね

自分も協力するよ、貸せるよ！お店の場所を

本郷生まれ。長年、公立幼稚園に勤めていました。その経験を活かし、多世代が絵本で交流ができるサロン「ほんわかほぐ組」を主催しています。



荒木 尚子さん

自分の知識や得意なことで、色々な世代の方々と関わる活動ができてよかったです。毎回わくわくしています。

あなたの専門性や特技は、地域とどんな接点を持てそうですか？

2-3 参加するために支援が必要な方を含めて、様々な方が参加できる機会や環境づくりに取り組みます。

地域の活動に参加する際に、支援が必要な方もいます。好きなことや得意なことで自己実現できる多様な機会を持つことができます。そしてやりがいや喜びをもって豊かに生活することができる環境をつくりましょう。



できたらいいストーリー
～“好きなこと”で地域に参加する～

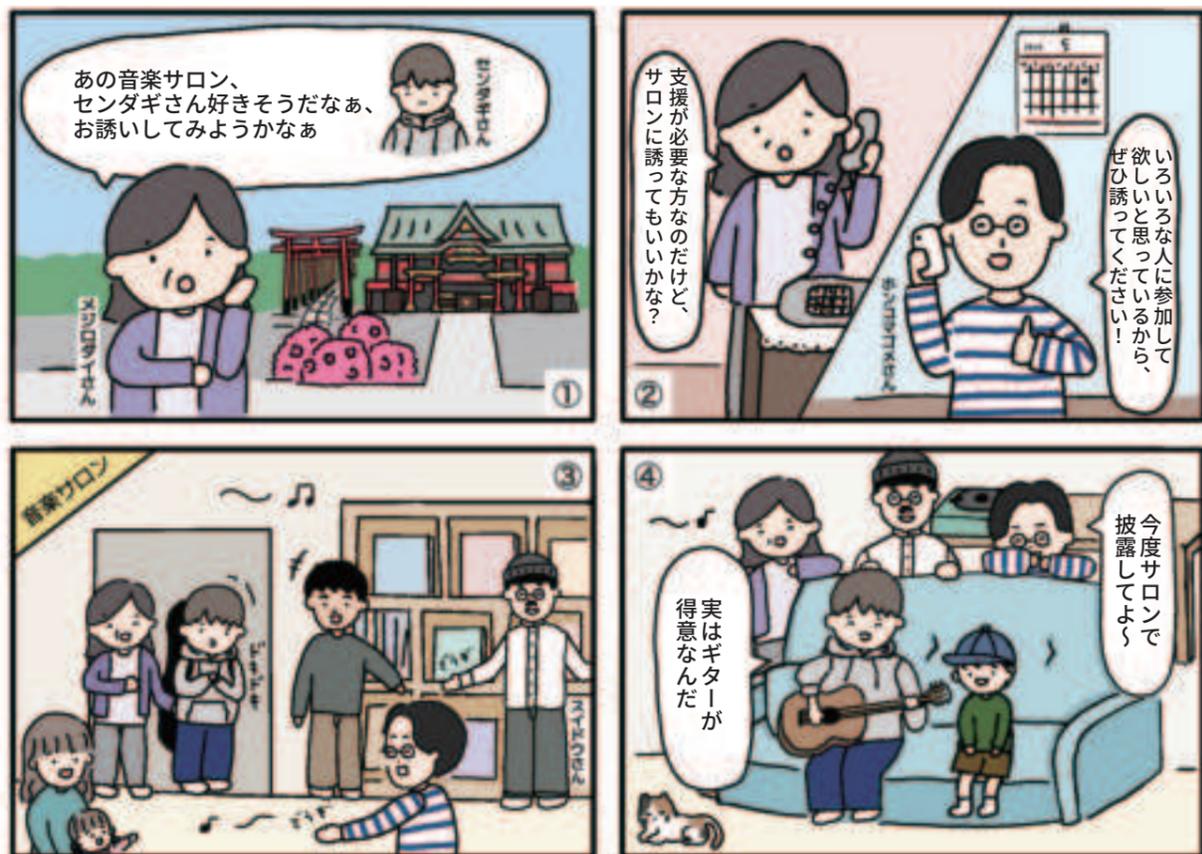
登場人物

スイドウさん
・レコード店を経営
・音楽をツールに色々な人が参加できるイベントを開催し、ホンコマゴメさんのサロンに協力

ホンコマゴメさん
・デザイン会社に勤めている30代
・新しいマンションに引っ越してきたばかりで、近所とのつながりが無いと思い、音楽交流サロン「レコード日和」を月1回開催。

メジロダイさん
・この地域で障害者支援に関わる専門職

センダギさん
・音楽好きでギターが得意
・精神疾患を抱えていて体調に波がある
・メジロダイさんが支援者



「茗荷谷クラブ」で、ひきこもりや発達障害など、生きづらさを抱える20～40代の方を対象に居場所活動など社会に向けての土台づくりのお手伝いをしています。

人を「問題がある人」ではなく、何か素敵な魅力がある人とみること。そしてそれが人の中で芽吹くことが大事です。



倉光 洋平さん

あなたにとって、豊かに暮らすとはどんなことですか？

基本目標
3

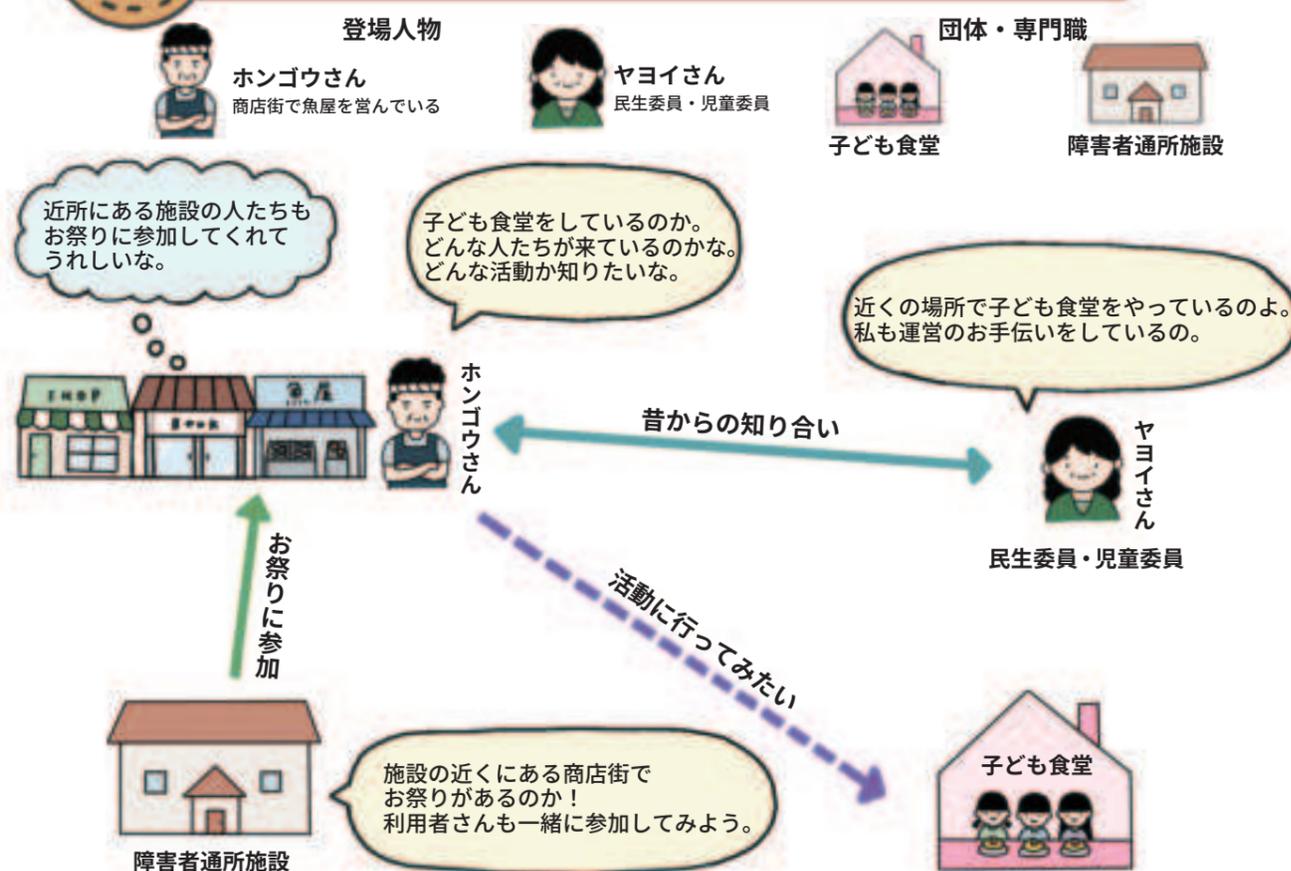
地域と関係機関・団体が知り合い、一緒に悩み・考え、お互いの強みを活かす機会をつくり、ネットワークで継続的に取り組んでいる

3-1 地域住民・団体と専門職の境界線をなくし、お互いの活動を知り合う機会をつくります。

地域住民と団体、専門職が連携・協働するためには、まずはお互いを理解し合い、知り合う機会が必要です。相手がどのような活動をしているのか、どのような思いを持っているのか、足を運んだり、ちょっと関心を持ったりして、意識し合ひましょう。



できたらいいストーリー
～知り合うきっかけはいろいろ～



武長 信亮さん

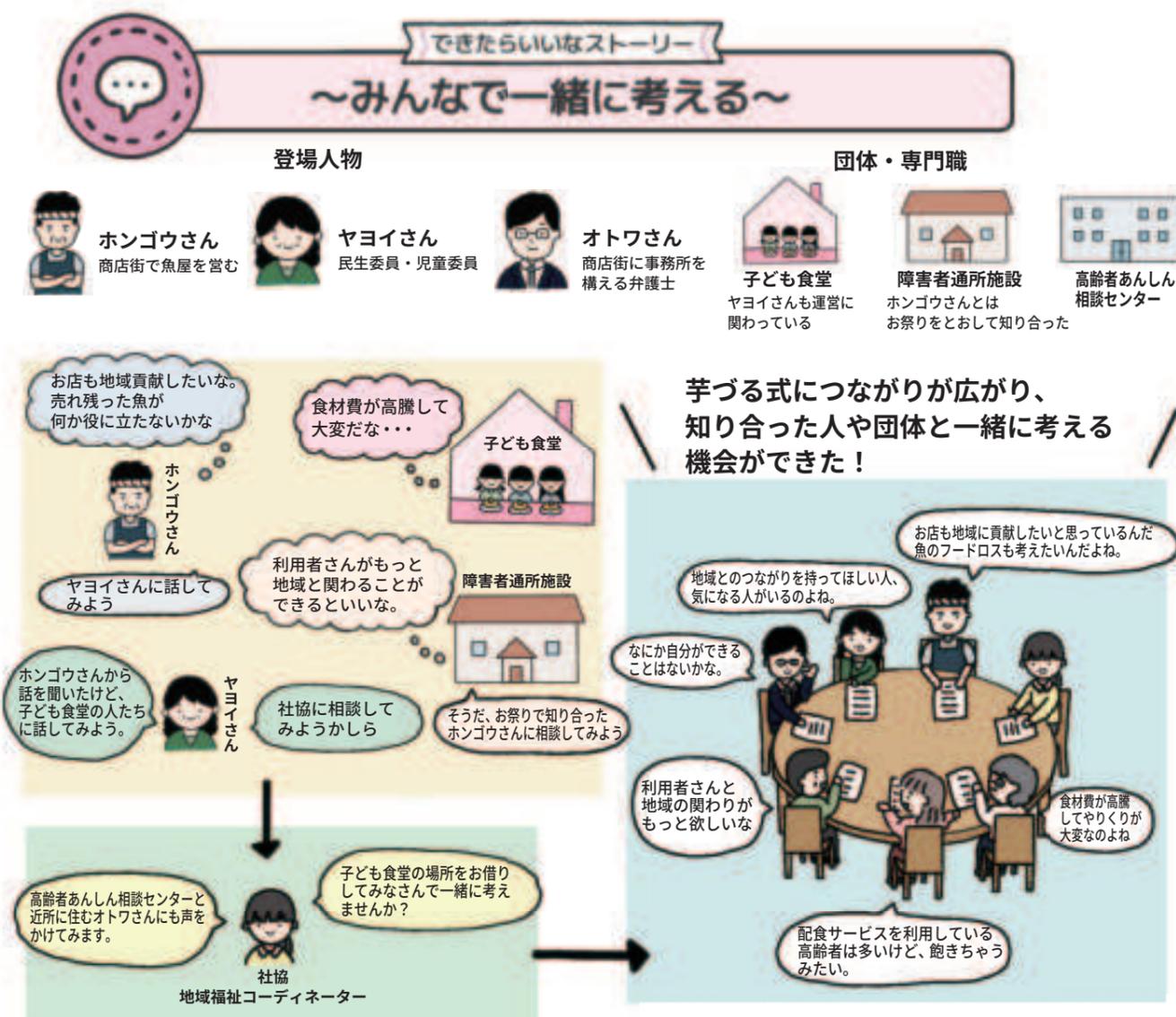
文京社会福祉士の会長で弁護士です。生まれも育ちも文京区です！

専門職のにおいを消して、地域住民の一人として色々な人との距離を近づけることを心掛けています。

あなたには関心がある専門職や活動は、ありますか？

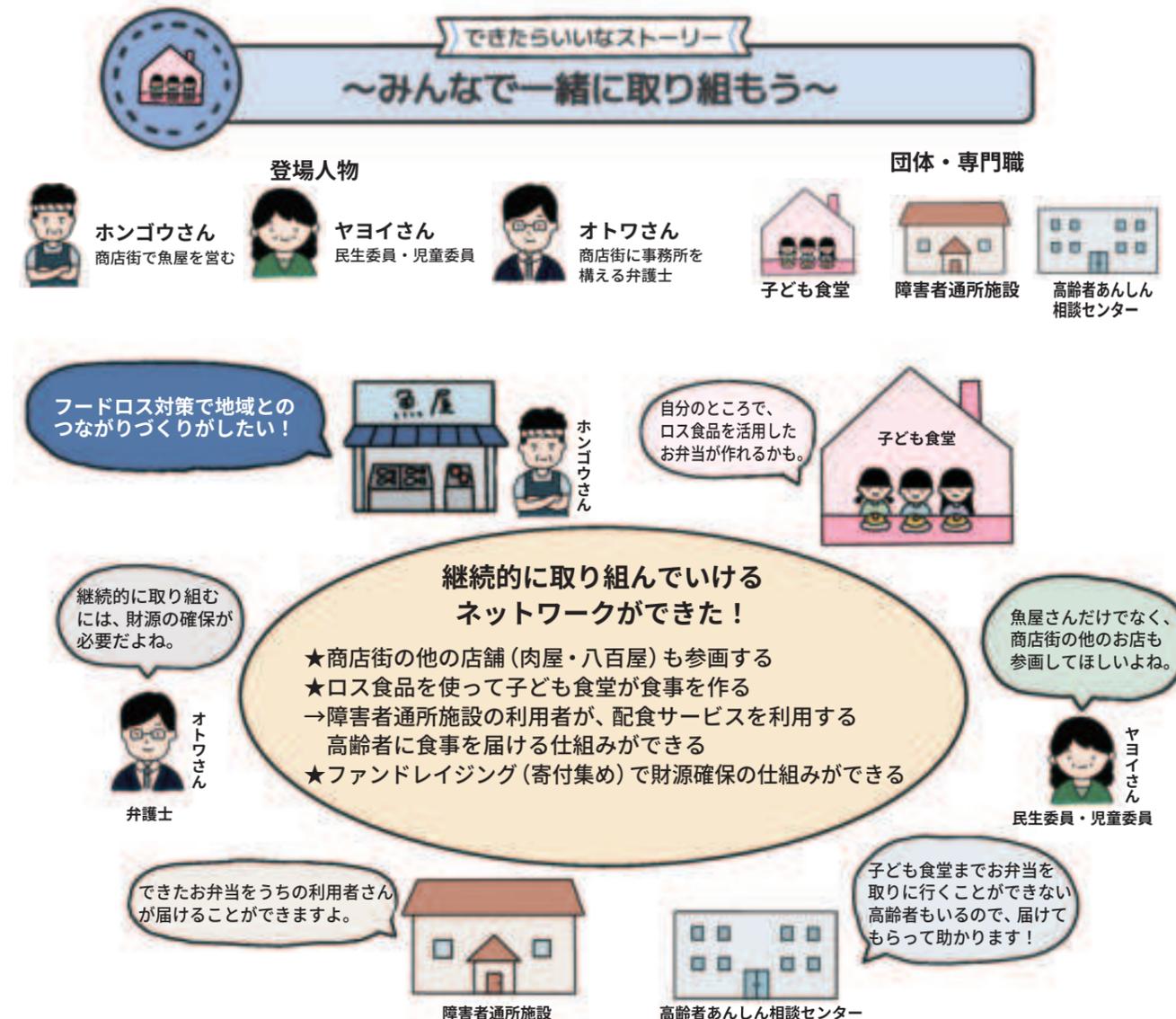
3-2 地域住民・団体と専門職が、解決したい課題を一緒に悩み、考える機会をつくります。

課題を解決するためには、一緒に悩み・考えるプロセスが重要です。制度やサービスでは解決できない難しい課題もありますが、解決できたらいいなと思うことをきっかけに、声をかけ合い、お互いの強みを活かして考えられる機会をつくりましょう。



3-3 地域住民・団体と専門職が分野を超えて協働し、持続的なネットワークや活動をつくります。

複合的な課題を解決するためには、分野を超えた連携・協働が必要です。それぞれの得意なことを活かして、継続的に取り組んでいけるネットワークをつくりましょう。



長谷川 大さん

本郷で魚屋を営んでいます。店主として、地域のために何かしたいと思っています。

食を通じたつながりづくりを様々な人たちと一緒に考えて、地域活性化を実現していきたい。

あなたには、だれかと一緒に考えたい課題はありますか？



石川 美絵子さん

区内の社会福祉法人全体でネットワークをつくり、長期休暇中の子どもの食支援をしています。

法人がアイデアを出し合い、協力し合うことで、ひとつの法人だけではできない実践ができていると感じます。

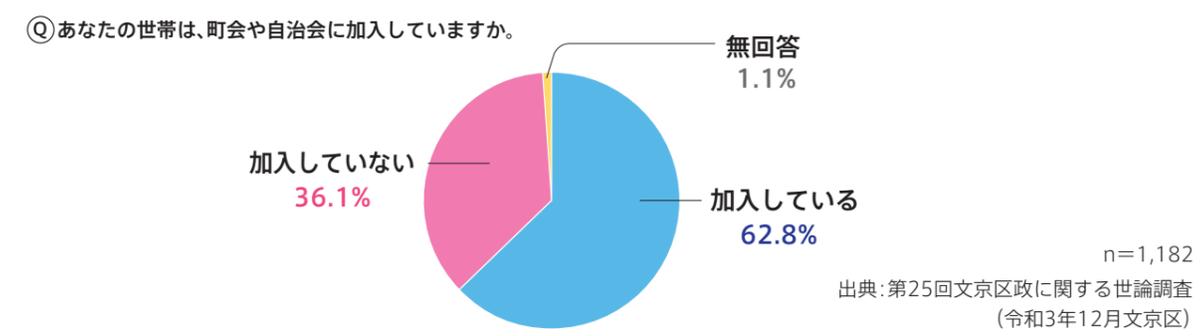
あなたには継続的に連携・協働をしていることはありますか？

資料編

1 統計データ

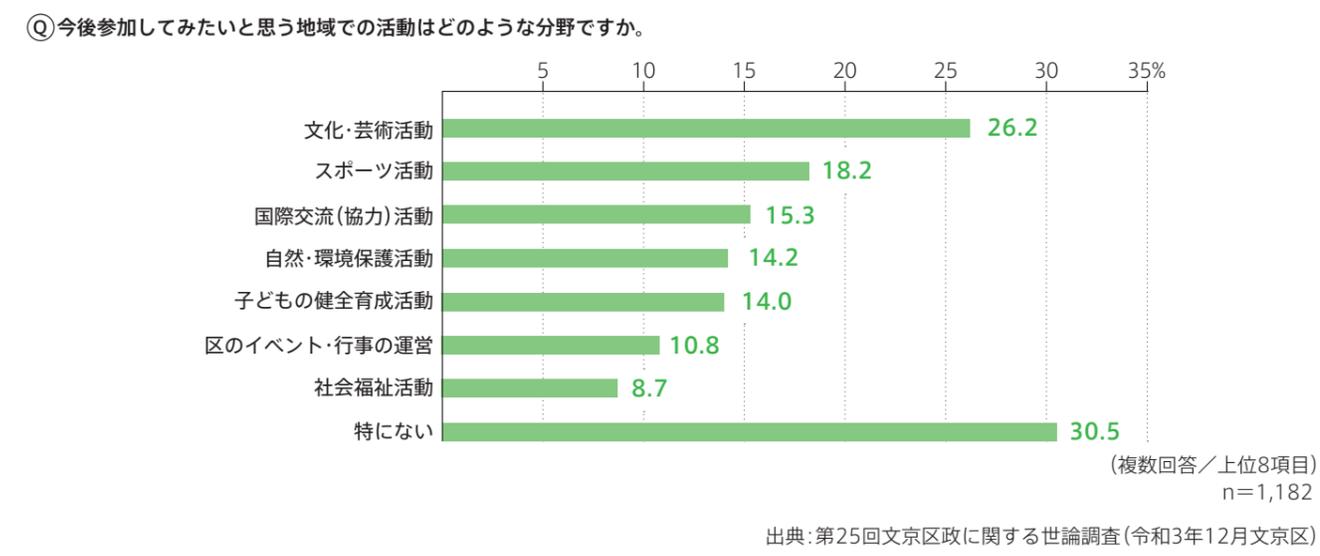
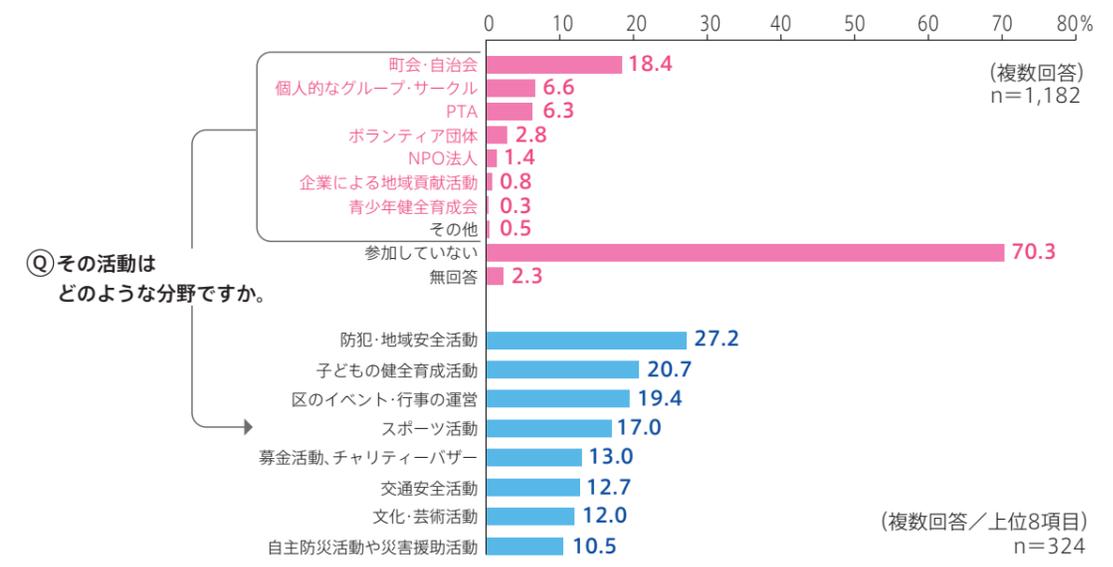
策定委員会・作業部会より出された意見 (P28~P42) に関するデータを掲載しています。

町会の加入率について



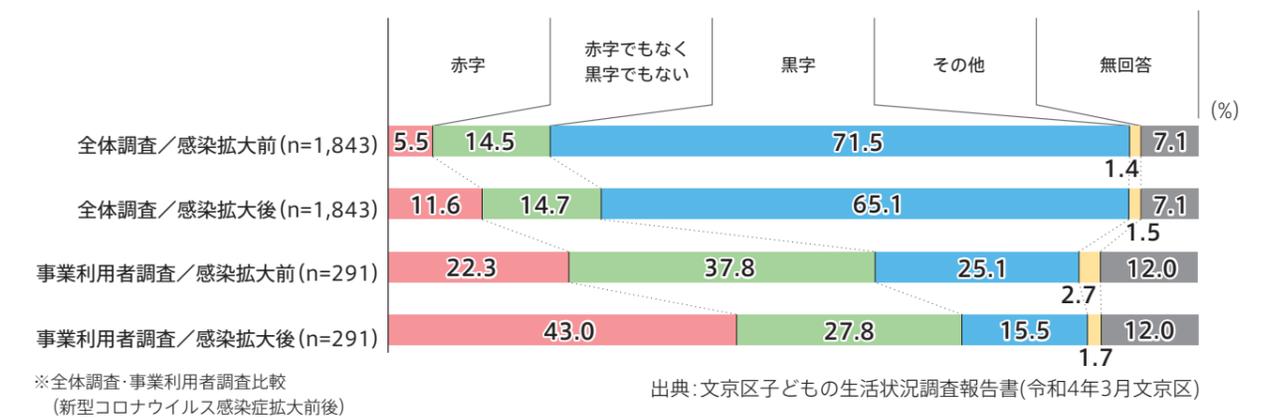
地域活動への参加状況について

Q 区内でNPO、ボランティア団体及び町会・自治会等の地域に貢献する活動を行っている団体、組織やグループの活動に参加していますか。

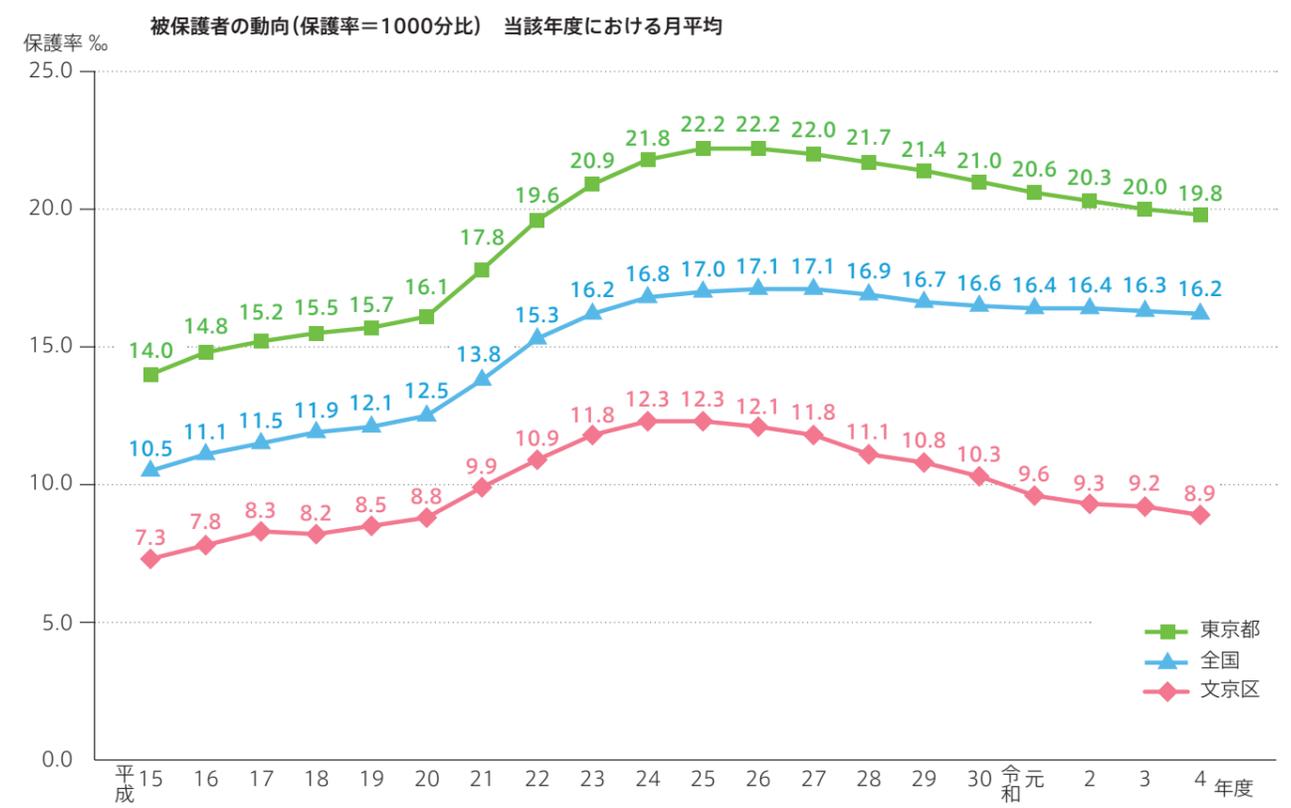


家庭の家計状況について

Q あなたのご家族の家計について、それぞれあてはまるものに1つに○をつけてください。

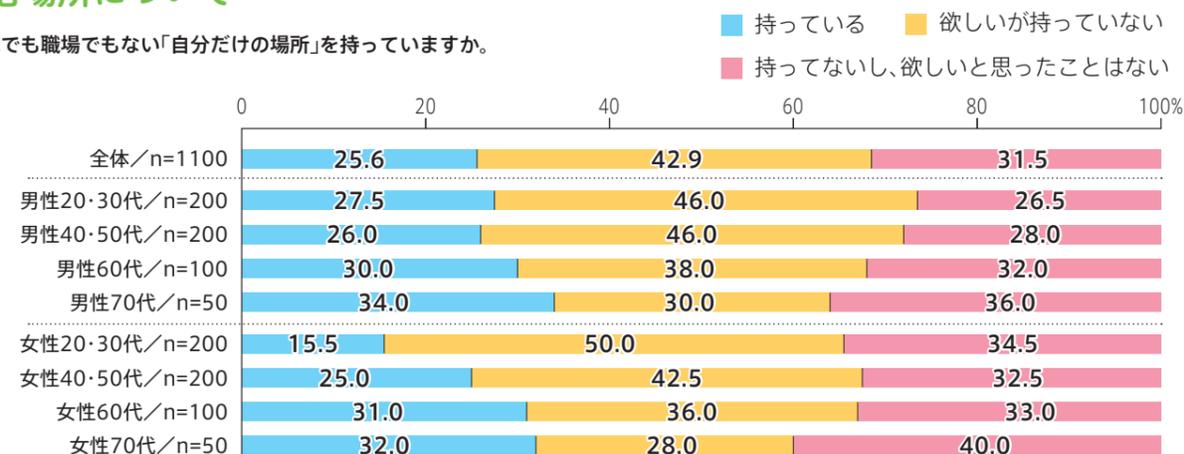


生活保護について



居場所について

① 家でも職場でもない「自分だけの場所」を持っていますか。



② 「自分だけの場所」はどこですか。

	カフェ/喫茶店	公園や河原・海などの屋外	スポーツクラブ/ジム/ヨガ	映画館/美術館/劇場	図書館/ネットカフェ/漫画喫茶	居酒屋/飲み屋など	デパート/駅ビル	サウナ/スパ/銭湯など	レストラン/飲食店	畑/園芸場/農園など	エステ/美容等のサロン	競輪場/競艇場	習い事教室や学習塾	特定ホテル・宿泊施設	病院/整形外科/マッサージ	ファーストフード店/ファミレス	カラオケ/ゲームセンター	屋外イベントスペース	麻雀・囲碁・将棋などのクラブ	その他		
全体/n=282	31.6	22.7	18.4	18.1	16.0	13.1	9.6	9.2	9.2	8.5	7.8	7.1	7.1	6.7	6.4	6.4	5.3	5.0	4.3	2.8	2.1	16.0
男性20・30代/n=55	43.6	16.4	20.0	9.1	12.7	20.0	10.9	12.7	10.9	10.9	12.7	0.0	1.8	7.3	5.5	9.1	0.0	9.1	7.3	3.6	1.8	10.9
男性40・50代/n=52	21.2	25.0	5.8	9.6	13.5	19.2	3.8	3.8	7.7	9.6	7.7	5.8	1.9	15.4	3.8	3.8	7.7	9.6	5.8	5.8	3.8	19.2
男性60代/n=30	33.3	30.0	16.7	23.3	20.0	23.3	3.3	6.7	3.3	10.0	3.3	16.7	0.0	13.3	0.0	6.7	6.7	3.3	3.3	3.3	3.3	23.3
男性70代/n=17	29.4	35.3	29.4	23.5	11.8	11.8	5.9	5.9	17.6	0.0	5.9	11.8	5.9	0.0	11.8	0.0	0.0	11.8	5.9	5.9	5.9	23.5
女性20・30代/n=31	54.8	22.6	25.8	16.1	6.5	6.5	19.4	6.5	6.5	6.5	0.0	3.2	19.4	3.2	3.2	3.2	9.7	3.2	0.0	0.0	0.0	12.9
女性40・50代/n=50	26.0	18.0	18.0	26.0	24.0	10.0	6.0	10.0	10.0	12.0	10.0	2.0	16.0	0.0	8.0	8.0	8.0	2.0	4.0	2.0	0.0	14.0
女性60代/n=31	16.1	19.4	35.5	25.8	6.5	0.0	6.5	16.1	9.7	0.0	6.5	16.1	3.2	16.1	3.2	6.5	0.0	0.0	0.0	3.2	3.2	12.9
女性70代/n=16	25.0	31.3	0.0	25.0	43.8	0.0	37.5	12.5	12.5	12.5	12.5	18.8	6.3	0.0	18.8	6.3	0.0	6.3	0.0	0.0	0.0	18.8

※男女70代については参考値

出典:『自分の居場所』に関する調査(平成26年12月株式会社読売広告社都市生活研究所)

ひきこもりについて

ひきこもりの者の推計数

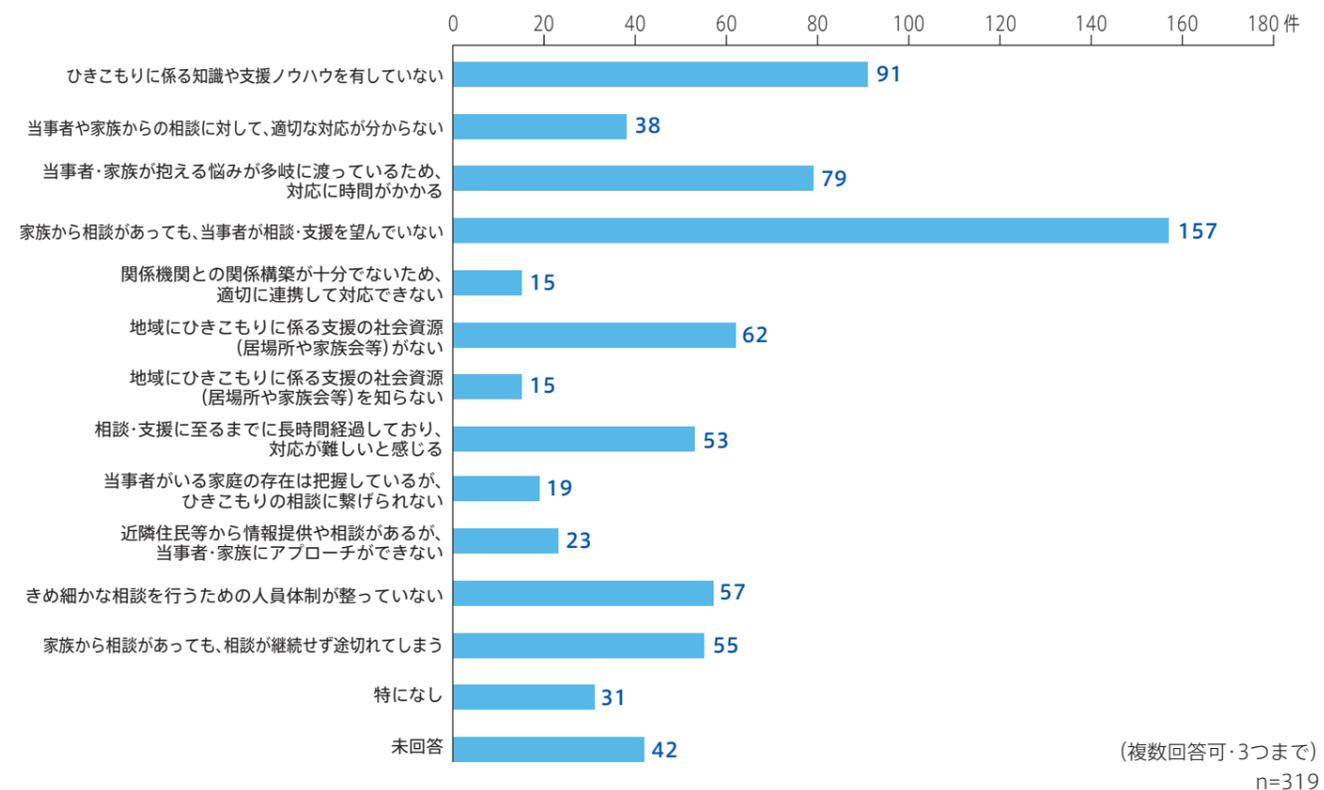
推計内容	該当人数(人)	有効回収数に占める割合(%)	分類
普段は家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する	67	0.95%	準ひきこもり
普段は家にいるが、近所のコンビニなどには出かける	52	0.74%	
自室からは出るが、家からは出ない	21	0.30%	
自室からほとんど出ない	4	0.06%	

令和4年度調査(対象:15~39歳)の結果

出典:子ども・若者の意識と生活に関する調査(令和5年3月内閣府)

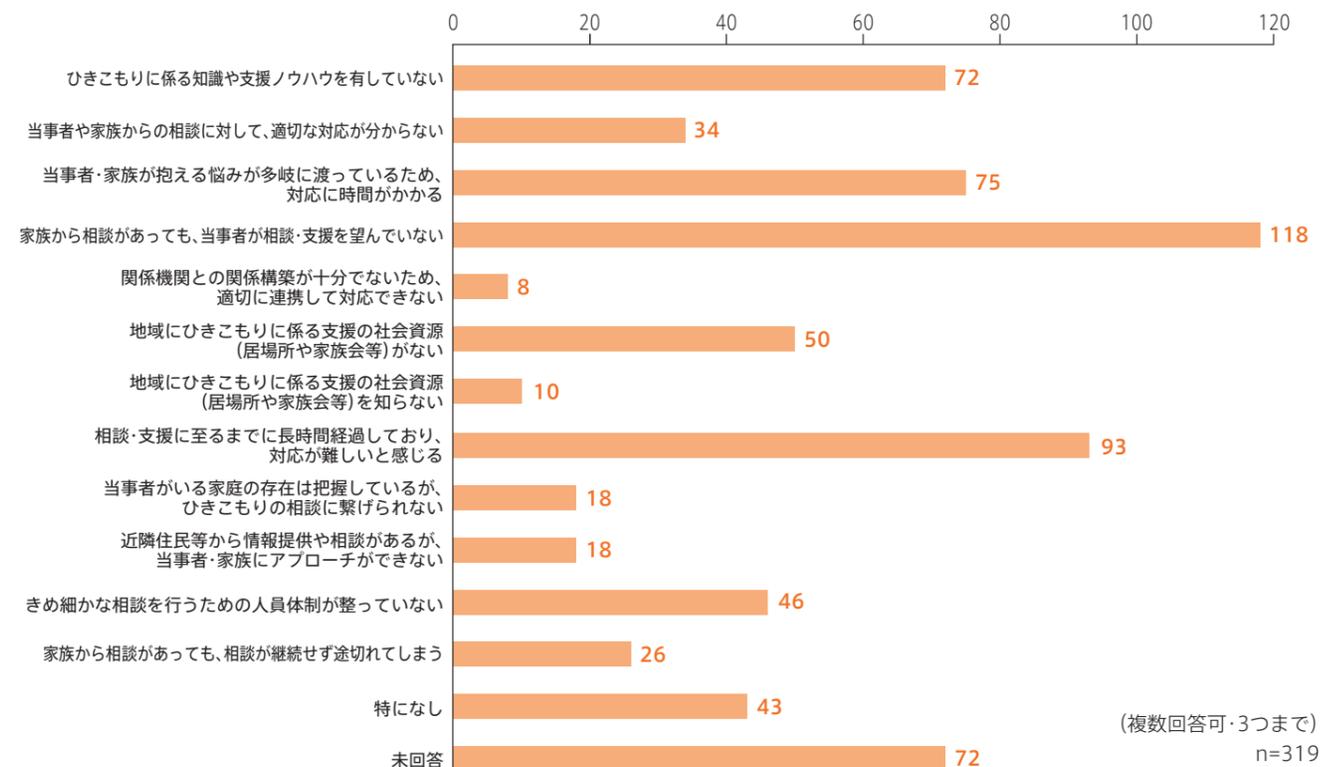
ひきこもりの若年層、中高年層への相談・支援についての課題について

若年層(おおむね39歳まで)への相談・支援において関係機関が課題と感じていること



(複数回答可・3つまで)
n=319

中高年層(おおむね40歳以上)への相談・支援において関係機関が課題と感じていること

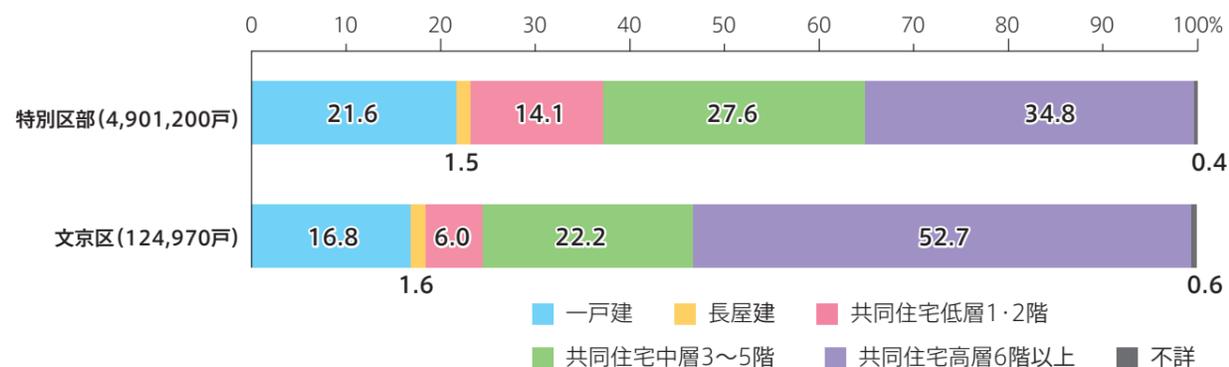


(複数回答可・3つまで)
n=319

出典:ひきこもりに関する支援状況等調査結果(令和3年4月東京都)

住まいについて

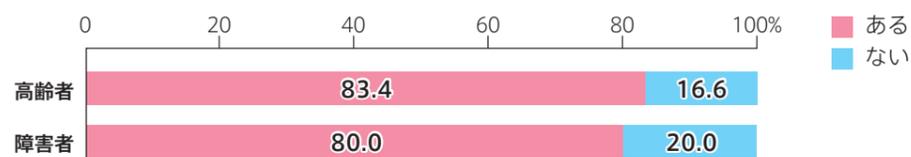
住宅の建て方別割合の特別区部との比較



出典:文京区の住宅政策の歩み(令和4年3月文京区)
資料:住宅・土地統計調査(平成30年総務省)

住まい探しについて

① 住まいを探していて、困っていることはありますか。



困りごとの内容(3つまで選択可)

	全体	高齢者	障害者
探し方がわからない	14.3	11.1	20.0
連帯保証人がいない	21.4	22.2	20.0
家主・不動産店の審査が下りない	21.4	22.2	20.0
賃料が高い	78.6	77.8	80.0
緊急連絡先がない	7.1	0.0	20.0
保証会社の審査が下りない	0.0	0.0	0.0
初期費用が不足	28.6	33.3	20.0
契約手続きが難しい	7.1	11.1	0.0
その他(年齢で)	7.1	11.1	0.0
回答者総数	14人	9人	5人

※各回答数÷回答者総数で割合を算出

出典:令和3年度すまいる住宅入居資格認定者の住まい探しに関するアンケート結果について(令和4年12月文京区居住支援協議会)

不登校について

定義:何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にある者(病気や経済的な理由は除く)

不登校の人数と出現率

学校種別	区分	H30年度	R1年度	R2年度	R3年度	R4年度	全国(R4年度)
		人数	出現率	人数	出現率	人数	出現率
小学校	文京区	73 (0.82)	79 (0.89)	91 (0.93)	139 (1.36)	173 (1.64)	105,112 (1.70)
	東京都	4,318 (0.74)	5,217 (0.88)	6,317 (1.06)	7,939 (1.33)	10,695 (1.78)	
中学校	文京区	107 (5.29)	107 (5.08)	125 (5.75)	135 (5.89)	183 (7.74)	193,936 (6.0)
	東京都	9,870 (4.33)	10,851 (4.76)	11,371 (4.93)	13,597 (5.76)	16,217 (6.85)	

※出現率=不登校者数÷在籍者数R5.2×100(%)

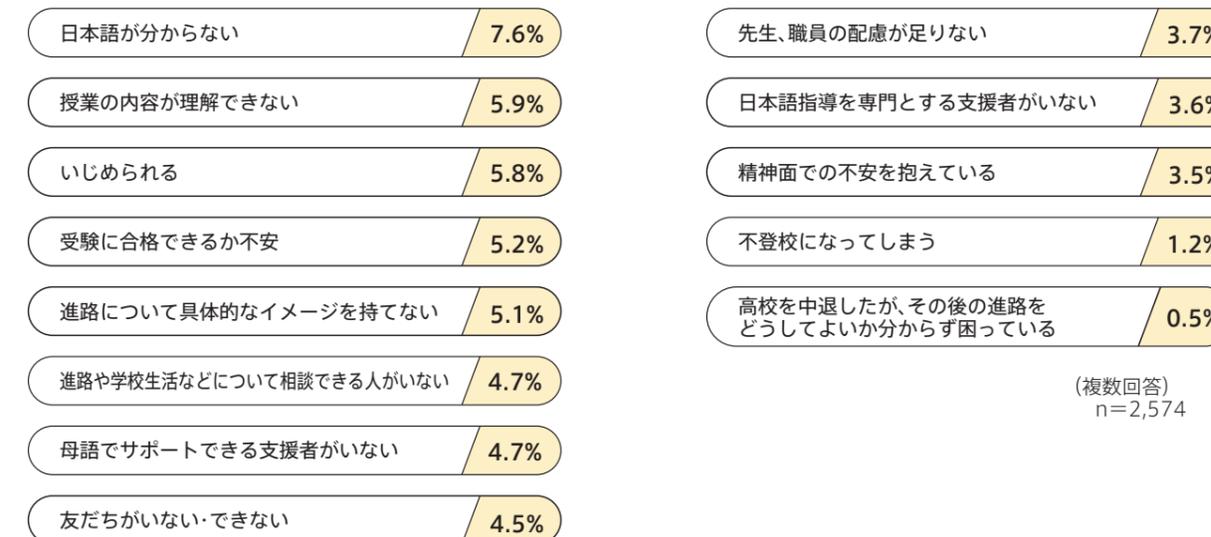
不登校の主な要因(R4年度)

小学校	①無気力、不安	39.9%
	②いじめを除く友人関係をめぐり問題	9.2%
	③親子の関わり方	8.7%
中学校	①無気力、不安	53.0%
	②いじめを除く友人関係をめぐり問題	9.8%
	③学業の不振	7.1%
	生活リズムの乱れ、あそび、非行	7.1%

出典:令和4年度における児童・生徒の問題行動・不登校等の実態について(令和5年12月文京区教育委員会)

外国籍の子どもについて

子どもが通っている学校において、子どもが困っていること



(複数回答)
n=2,574

出典:令和3年度在留外国人に対する基礎調査報告書より作成(令和4年8月出入国在留管理庁)

2 調査

文京区の地域福祉をめぐる現状と課題を把握するために「若者に関する調査」と「ひとり親が抱える課題に関する調査」を行いました。

1 若者に関する調査

(1) 専門職への調査および調査結果(概要)

1 調査概要

調査対象	主に区内に所在する、若者(15歳~39歳)と関わりをもつ専門機関
調査方法	調査票を個別に配付
調査時期	令和5年2月28日~3月17日
回答状況	配付数:13団体 回収数:12団体 回収率:92%

<データを読み取る際の注意事項>

今回の調査は、若者(15歳~39歳)が抱えている課題を地域で支援していくためにはどのようなことが必要であるかを調べるための調査であり、特定の団体の優劣や評価を行うものではありません。また、今回の調査は、団体の回答数が少ないため、解釈には一定の注意が必要となります。なお、自由記述については、一部抜粋・要約をしています。

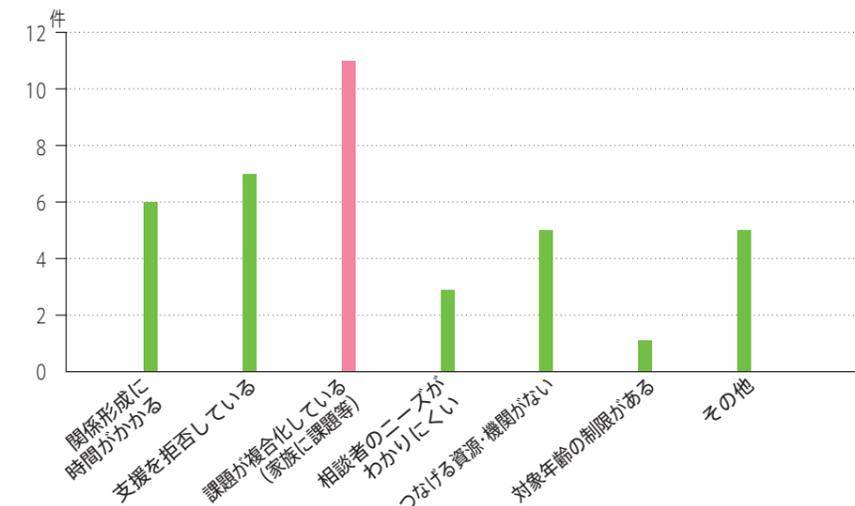
2 調査結果(概要)

若者が抱える課題(複数回答可)



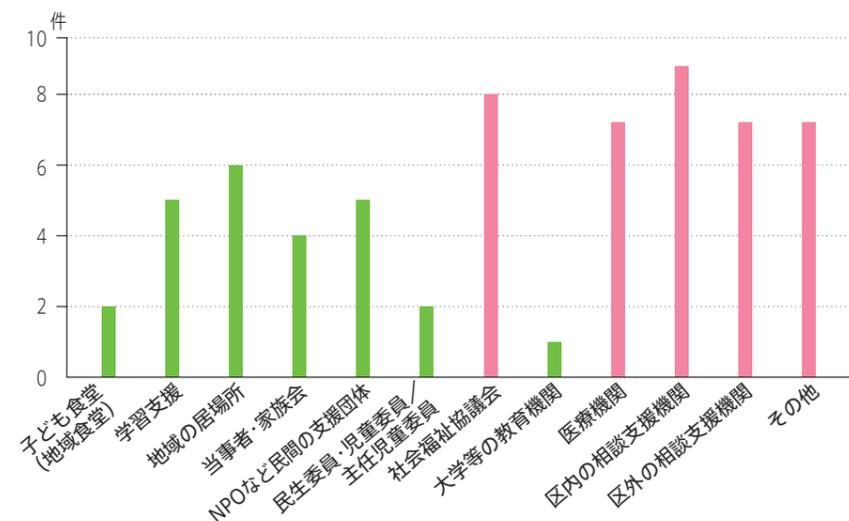
・若者が抱える課題は「障害(発達・精神障害等)」が最も高く、次に「家族関係」が高いことがわかりました。
・精神疾患や対人関係が困難など、様々な生きづらさを抱える若者がいることや、家族に何らかの課題があり、家族に頼ることが難しい若者がいることが考えられます。

若者支援が難しいと感じる理由(複数回答可)



・若者支援が難しいと感じる理由は、「課題が複合化している(家族に課題等)」が最も高いことがわかりました。
・本人だけでなく、家族が抱える複合的な課題に対し、教育、福祉、保健・医療、雇用等の様々な関係機関の連携が必要と考えられます。

連携先(複数回答可)



・若者支援を行うときの連携先としては、第1に「区内の相談支援機関」が最も高く、第2に「社協」、第3に「医療機関」、「区外の相談支援機関」、「その他」が高いことがわかりました。インフォーマルな関係機関よりもフォーマルな関係機関との連携が多いことがわかりました。

具体的な連携先の内容(自由記述)

NPOなど民間の支援団体

- ・炊き出し団体
- ・認定特定非営利活動法人 キッズドア

区内の相談支援機関

- ・文京区障害者基幹相談支援センター
- ・地域生活支援拠点
- ・文京区教育センター
- ・文京区保健サービスセンター
- ・文京区ひきこもり支援センター
- ・文京区子ども家庭支援センター
- ・文京区障害者就労支援センター
- ・ハローワーク飯田橋(飯田橋公共職業安定所)
- ・公益社団法人 青少年健康センター 茗荷谷クラブ

区外の相談支援機関

- ・地域若者サポートステーション
- ・東京都立精神保健福祉センター
- ・児童相談所
- ・東京都生活再生相談窓口
- ・東京しごとセンター
- ・TOKYOチャレンジネット

その他

- ・本人が趣味としているものをおして参加できるコミュニティ
- ・不動産会社
- ・東京ソーシャルファーム認証事業者

あったらいい資源や相談機関(自由記述)

- ・同じような悩みを抱える人が交流できる場。
- ・ふらっと立ち寄れたり、何もなくてもいられたりする場。いざとなったときに相談できる場。
- ・周りの目を気にせず温かい食事をとることができる場。
- ・ちょっとした困りごとやモヤモヤした気持ちを語り合える場。
- ・若者の状況に合わせて伴走しながら就労を支援する機関。
- ・成人した人を対象に就労の訓練が行える場。
- ・制度や年齢の枠でとれない相談支援システム。

■ 地域に期待すること (自由記述) ■

- 多様な生き方や価値観が尊重され、個人が認められる地域。
- 企業、行政、福祉などがそれぞれの立場の強みを提供し、地域が活性化されること。
- 地域共生社会の構築。
- 障害のある方が住みやすい、住み続けられる地域づくり。
- さりげない声掛けやみまもり。
- 若者が家族から巣立つ試み・人とつながれる試みとして、シェアハウスや一人暮らしができる場。

(2) 地域活動団体への調査および調査結果 (概要)

1 調査概要

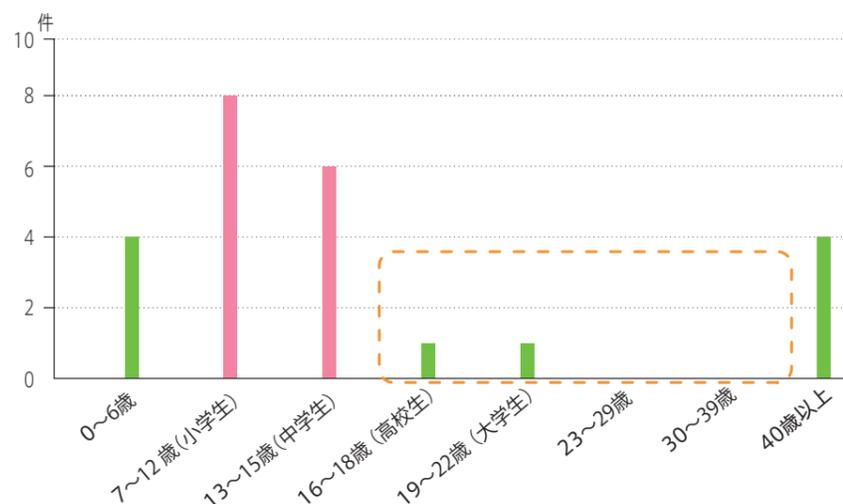
調査対象	区内で活動する、若者(15歳~39歳)と関わりをもつ地域活動団体
調査方法	ヒアリング調査
調査時期	令和5年3月17日~5月15日
回答数	11団体

<データを読み取る際の注意事項>

今回の調査は、若者(15歳~39歳)が抱えている課題を地域で支援していくためにはどのようなことが必要であるかを調べるための調査であり、特定の団体の優劣や評価を行うものではありません。また、今回の調査は、団体の回答数が少ないため、解釈には一定の注意が必要となります。

2 調査結果 (概要)

■ 地域活動への参加年齢 (複数回答可) ■

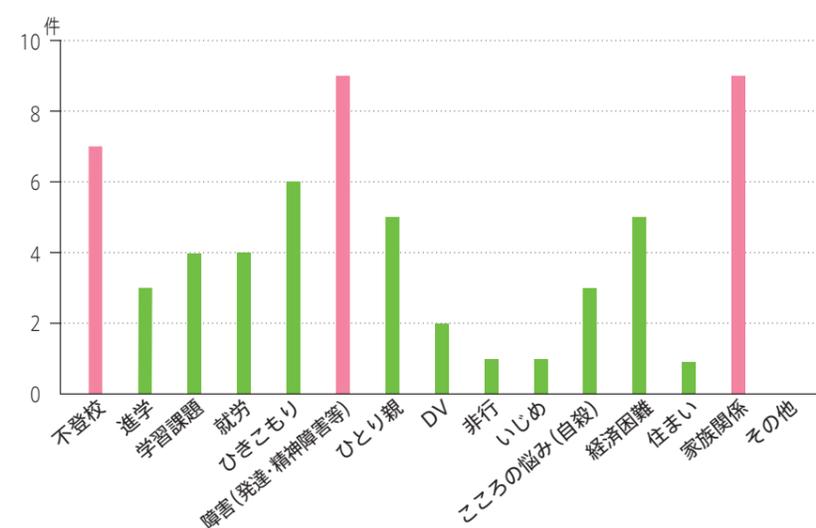


地域活動への参加年齢は「7~12歳(小学生)」が最も多く、次に「13~15歳(中学生)」が高いことがわかりました。若者の年齢にあたる高校生以降は地域との接点を持ちにくく、低年齢の頃から、地域との関わりが必要と考えられます。

■ 若者が地域活動につながる事が難しい理由 ■

- 身近な地域活動へ行くことに抵抗を感じるようになるから。
- 求める関係性が大人ではなく、同世代や年代の近い若者になるから。
- 塾や部活など習い事があることで、生活リズムが合わなくなるから。
- 課題によって相談先が変わってしまうため、若者自身から困りごとの発信がないとつながりにくいから。
- 若者が抱える課題が多様化しており、その課題によって相談先が変わり支援も細分化されているから。
- 小さい時から顔見知りになって、関係性を築いていないから。

■ 若者が抱える課題 (複数回答可) ■



• 若者が抱える課題は専門職への調査と同様、「障害(発達・精神障害等)」と「家族関係」が最も高く、次に「不登校」が高いことがわかりました。

• 特に、地域活動団体の調査結果では、不登校が課題としてあげられており、学校や家庭以外でのつながりを持つ予防的な取組の必要性が課題感としてあがっていると考えられます。

■ 対応や関わりを通じて感じていること ■

- 小さい頃から関わっていれば、ある程度の状況がわかるが、その前提がないと関わる事が難しい。
- 高校に進学すると状況が見えにくくなり、本人と直接やりとりしないと実態がわからない。
- 課題ごとの相談窓口はあるが、包括的な相談をどこですたらいのかがわからない。
- 本人がSOSを出す先が分からず、ネット情報で答えを探して、直接的な関わりまで発展しないことがある。
- 本人と関わる事ができても、背景にある様々な課題に対してどの程度関わっていいのかわからない。

■ 本人とつながれた・つながることが難しかった理由 ■

つながることができた理由

- つなげる人が一緒に活動に参加したり、同行してくれたりしたとき。
- 地域と専門職で役割分担をして関わることができたとき。
- 支援者には言えなかった話を継続的な地域活動への参加を通じて話してくれた。アットホームな家庭像を活動をとおして共有できることで、将来を考える支援につながったのではないかと思う。

つながることが難しかった理由

- そもそも活動や場に来るまでのアプローチができないとき。
- 親の支援の意向と本人の意向が異なったとき。
- 活動や場所を紹介するだけだと、一度つながっても継続しない。

■ 公的機関や支援機関との連携で期待すること ■

- 情報共有し合えるといい。
- 民間団体との連携。本人への支援だけでなく、支援者となる団体側のサポートも必要だと感じる。
- つなぐ側と受け入れる側の支援者同士が、フラットな関係性でいること。
- 人との信頼関係は小さい時から培われていないと、苦しい時に相談することは難しいので、入り口をどのように作るかが大事ではないか。

■ 社協からのサポートで期待すること ■

- 本人に紹介できる資源などの接点づくりを一緒に考えてくれること。
- 既存の地域にある資源だけでなく、NPOなどの民間団体との連携。多様な主体が関わるコミュニティづくり。
- 同じ支援を行うメンバーとして、団体や活動に関わってもらいたい。
- 新たに出てきた課題に対して、資源開発や仕組みをつくっていくこと。
- 行政と専門職の間に立つ役割。
- 団体同士が知り合う機会づくり。

2 ひとり親が抱える課題に関する調査

(1) 子ども食堂への調査(概要)

1 調査概要

調査対象	区内の子ども食堂 2団体
調査方法	ヒアリング調査
調査時期	A団体:令和5年5月11日 B団体:令和5年3月30日

<データを読み取る際の注意事項>

今回の調査は、団体の回答数が少ないため、解釈には一定の注意が必要となります。

2 調査結果(概要)

■ ひとり親世帯の概要 ■

A団体

- 40家庭中、ひとり親は3家庭。
- 関係性ができたことで、自身の話をしてくれるようになった。
- 子どもが発達障害や不登校で、サポートが必要なため、フルタイムで働けない。
- フルタイムで働いている家庭は親族の助けがある場合が多い。

B団体

- 20家庭中、ひとり親は13家庭。
- フルタイムで働いている人が多い。
- 就労しているが、メンタル不調の人が多い。DV被害者はトラウマやフラッシュバックなどもある。
- 頼れる親族がいない。家族との関係が良くない。

■ 子ども食堂につながったきっかけ ■

A団体

- ほかの子ども食堂からの紹介
- 同じ境遇であるシングルマザーからの紹介

B団体

- 地域福祉コーディネーターや教育センターからの紹介
- ママ友ネットワーク
- SNS(LINEやFacebook)

把握している困りごと

A団体

- 情報を取りに行く時間がない。
- 子どもと向き合う時間がない。
- ひとつの部署で解決ができない複合的な課題を抱えている。
- 1つのことを決めるまでに踏まなければならないステップが多すぎる。
- 食支援だけでなく、日用品などの支援も必要。
- 複雑な家庭で親族に頼ることができない。
- 入学金や学費の負担が難しい。支援につながる情報を持っていない。

B団体

- 貯蓄がなく、ギリギリの生活を送っている。
- 社会的資源につながっていない。
- 自分から情報を取り行かないと情報を得られない。
- 誰に聞けば良いのか、相談して良いのか分からない。
- 子どもが不登校になると学校やママ友とのつながりがなくなり、情報が入りづらい。
- 母国語しか話せないシングルマザーはママ友とのつながりもなく、行政での手続きも支援が必要。
- 学校への送迎が負担になっている。
- 学用品(制服など)の負担が大きい。
- 相談先が分かりづらい→ひとり親家庭が活用できる情報がまとまっていると良い。

団体で受けた相談ごと

A団体

- 家庭以外の居場所の提供。(発達障害の兄弟が家にいて、勉強できる場所がないため)
- 相談には至らないが、生活上の不安などを聞いている。(子どもの発達・不登校のことなど)

B団体

- 塾の費用が高くて行くことができない。
- 進学先についての情報。
- 相談には至らないが、日々の状況などを聞き取り、必要に応じて情報提供している。

団体からの連絡ツールや団体との関係性や距離感

A団体

- 気になる家庭には子ども食堂開催前に運営スタッフからメールを送る。
- お弁当受け渡しの際に話を聞いている。

B団体

- LINEグループやお弁当受け渡しの際に話を聞いている。

3 調査のまとめ

インフォーマルだからこそできること

相談まではいかないが、
日常の悩みや心配ごとを
話せる場になっている

必要に応じて、
地域福祉コーディネーターや
行政につないでいる

関係が築けたから分かること

子ども食堂の利用をとおして
スタッフとの関係が構築され、
色々な話をできるように
なっている

親族やママ友には
相談しづらいが
第三者だと話しやすい

情報にアクセスしづらい

特に①子どもに障害がある②フルタイムで就労している
③親族関係が不和である場合は、情報を収集する時間や
方法がなく、必要な情報を得られていない

3 文京区地域福祉活動計画策定委員会・作業部会設置要綱

社会福祉法人文京区社会福祉協議会地域福祉活動計画策定委員会設置要綱

平成27年4月1日制定

(設置)

第1条 文京区地域福祉活動計画(以下「活動計画」という。)を策定するため、社会福祉法人文京区社会福祉協議会(以下「協議会」という。)に文京区地域福祉活動計画策定委員会(以下「委員会」という。)を設置する。

(組織)

第2条 委員会の委員は原則として21名以内で組織する。

2 委員は、次に掲げる者のうちから、協議会会長が委嘱する。

- (1) 学識経験者
- (2) 地域福祉活動団体等関係者
- (3) 協議会事業関係者
- (4) 関係機関職員
- (5) 協議会職員

(任期)

第3条 委員の任期は、委嘱した日から活動計画が策定される日までとする。

2 補充により就任した委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第4条 委員会には委員長・副委員長を各1名を置く。

2 委員長は学識経験者のうちから委員の互選により選出する。

3 委員長は委員会を代表し、会務を統括する。

4 副委員長は、委員のうちから委員長が指名する。

5 副委員長は、委員長を補佐し委員長に事故あるときは、その職務を代行する。

(会議)

第5条 委員会は必要に応じて委員長が招集し、委員長がその議長となる。

(意見聴取)

第6条 委員長が必要があると認める時は、委員以外の者の出席を求め、説明、意見を聞くことができる。

(作業部会)

第7条 委員会の効率的な運営を図るため、委員会の下に作業部会を設置する。

2 作業部会員は、委員のうちから委員長が指名する。

(庶務)

第8条 委員会の庶務は、協議会事務局において処理する。

(委任)

第9条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は別に委員長が定める。

付 則

この要綱は、平成27年4月1日から施行する。

4 計画策定のプロセス

推進委員会

	開催日	主な議題
令和5年度 第1回	令和5年 6月19日(月)	・これまでの成果と課題について

策定委員会

	開催日	主な議題
第1回	令和5年 7月3日(月)	・現行計画におけるの成果と課題について ・文京区の地域課題について
第2回	令和5年 10月30日(月)	・体系案について
第3回	令和5年 11月20日(月)	・中間まとめ(案)について
第4回	令和6年 1月29日(月)	・パブリックコメントの結果について ・文京区地域福祉活動計画(案)について

作業部会

	開催日	主な議題
第1回	令和5年 7月31日(月)	・地域のつながり、取組の現状共有
第2回	令和5年 8月28日(月)	・関心をもってもらう、参加するきっかけについて
第3回	令和5年 9月25日(月)	・“つながりが広がりづらい人”や“参加につながり そうな人”を受け入れる場や活動をどのように支 えていくか

パブリックコメント

期 間：令和5年12月4日から令和6年1月4日まで
提出件数：16件

5 文京区地域福祉活動計画策定委員会委員名簿

	作業 部会員	氏 名	団 体 名 等
委員長	○	熊田 博喜	武蔵野大学人間科学部教授
副委員長	○	小林 良二	東京都立大学名誉教授
	○	柴崎 清恵	文京区民生委員・児童委員協議会会長
		諸留 和夫	文京区町会連合会会長
		和田 懋	文京区高齢者クラブ連合会会長
	○	小川 豪	Reなでしこ元町副代表
	○	亀山 恒夫	さきちゃんち運営委員会
	○	高嶋 弘子	おもてなし食堂
	○	倉光 洋平	公益社団法人青少年健康センター 茗荷谷クラブ
	○	岩井 佳子	高齢者あんしん相談センター富坂センター長
		安達 勇二	文京区障害者基幹相談支援センター所長
	○	武長 信亮	文京社会福祉士会会長 弁護士
	○	深野 幸江	生活支援員
	○	箱石 まみ	文京区権利擁護支援連携協議会委員 公益社団法人成年後見センター・リーガルサポート東京支部
		石川 美絵子	社会福祉法人日本国際社会事業団常務理事
	○	渡辺 ひろみ	文京手話会副会長
		金木 悠	特定非営利活動法人Woods代表理事
		小澤 洋子	株式会社松下産業
		木村 健	文京区福祉部福祉政策課長
		安藤 彰啓	文京区社会福祉協議会事務局長

6 委員からのひとこと

武蔵野大学人間科学部教授 熊田 博喜 委員長

今期(令和6年度～令和9年度)から初めて策定委員長として計画策定に関わらせて頂きました。今期の計画は「つながり」をつくることに焦点を当てて、委員の皆様から多くの意見やアイデアを頂きました。「地域で大切なことはその地域の住民や関係機関が一番よく知っている」という当たり前で且つ大切なことを前提とした策定委員会となりました。そして生まれた計画は、ユニークな「おもしろい」計画となっています。地域のつながりづくりは面白さも大切であることを本計画策定から教えて頂きました。計画の核となっているのは、住民・関係機関の皆様の冷静な分析と熱意、そしてそれを漏れることなく受け止め整理して会議にフィードバックする事務局の皆様の熱意、この2つの熱意です。委員の皆様、事務局の皆様、そしてこの熱意に寄り添った確かなコメントを頂いた副委員長の小林先生に感謝申し上げます。次は本計画が描いた姿を4年の期間を通して実現することにあります。引き続きのお力添えをお願い致します。

東京都立大学名誉教授 小林 良二 副委員長

今回の計画では、住民が主体となる活動計画であることがより明確にされたといえます。第1に、前回の計画では、現代の都市生活の特徴である孤立・孤独などに対して、地域でのつながりを作ることが強調されていましたが、この計画では、多様な住民がその人らしい地域活動をする中でつながりを形成しようとしていること、第2に、住民の参加による活動体が育ち、横につながることによって地域ネットワークが形成されること、第3に、こうしたネットワークを踏まえ、行政等の公的機関と地域住民の連携を深めようとしています。全体に文字情報とともにビジュアル情報がふんだんに取り入れられ、ユニークな計画書になったといえるでしょう。

柴崎 清恵 委員

策定委員としてはじめて参加させていただきました。多くの委員の皆様がそれぞれの立場で文京区の福祉の充実を願って様々な活動を展開されていることを再確認いたしました。この計画をとりまとめてくださった社協に感謝申し上げますとともに、この計画が有意義に実行され区民の皆が心豊かに生活できますことを願っております。

和田 懋 委員

高齢者にとって最大の課題は、令和2年から続いたコロナ禍で外出の自粛、対面での交流の機会が減り、人間関係が希薄化しており、身近な地域に、何時でも気軽に足を運べる居場所を作り、つながり易い環境を整えることです。友愛活動を通して声かけやクラブ体験参加を呼びかけ、一緒に楽しむことで新たなつながりを作っていく。

亀山 恒夫 委員

地域福祉の原点は、人は一人では生きられない、ことと思います。人と人の関わりがなければ福祉は生まれません。一方で、関わりがあっても福祉が生まれるとは限らない。互いを一人の「人」として認め、よりよい暮らしを目指して協働できるか。計画策定に携わり、考える機会をいただけたことに感謝申し上げます。

倉光 洋平 委員

本計画の作成に携わる貴重な機会を頂き、改めて御礼を申し上げます。作業部会で、各委員が率直に意見をし、それらを社会福祉協議会の方々から迷いなく拾い続けた過程は目を見張りで、とても有意義なものでした。この自由で相互的な場で結実した本計画が、今後どのように地域の皆と血を通わせ、肉づけするか、非常に楽しみです。

諸留 和夫 委員

世の中には様々な人がいて夫々の人生を送っていく。生まれつき境遇に恵まれなかったり、ハンディを背負ってきたり、当初は問題がなかったのに何かの原因で生き様が変わってしまった人もいます。でも多くは世捨て人にはならずこの社会の中で生きていく。今は行政の見守りも手厚くなってきています。人がこの人間社会の中で生きていくとき本人が幸せと感じる人生を過ごして欲しいと願います。

小川 豪 委員

策定委員を初めて務めさせていただき地域福祉活動計画に関して深く理解することができました。これまで地域の居場所運営に携わってきましたが地域の課題に向き合うだけでなく文京区全体で共通する問題点や課題にも取り組む必要性を感じる良い機会となりました。今後も様々な活動を通じて地域の皆様の支えとなるよう努力を重ねて参ります。

高嶋 弘子 委員

楽しさだけを原動力に、地域食堂と居場所を運営している私にとって、その思いを「地域福祉活動計画」という公的な計画に合った言葉に変換することは、時にとても難しい作業でしたが、周りの皆様のご意見に接し、世界が広がったように感じています。親しみやすい読みやすい計画書になり嬉しく思っています。ありがとうございました。

岩井 佳子 委員

地域で活動されている皆さんの熱い思いに触れ、わくわくするような気持ちで参加いたしました。社協の皆さんのアイデアもすばらしく、誰もが手に取ってみたいくなるカラフルな活動計画が出来上がりました。「こうだったらいいな」のたくさん詰まった計画書。地域の皆さんと一緒に何ができるか、また新たなわくわくがやってくる予定です。

安達 勇二 委員

2回目の策定委員会ですが、今回も楽しく参加させて頂きました。ありがとうございました。しかしまあ、会議で出された様々な意見をよくそこまで反映させたなあ、と、地域の方々の熱い想いとともにより地域活動についての社協の皆さんの熱い想いに感動しました。私たち障害者の地域生活を支える専門職も、この計画に基づき、地域の皆様とつながっていただければ、と強く感じました。あとは実行あるのみですね。

深野 幸江 委員

「遠くの親戚より近くの他人」という諺があるように、昔から日頃の地域住民同士のつながりや支え合いの大切さがいわれてきました。この活動計画が多くの方の目にとまり、よりよい地域社会作りに関心を持ち、「誰もが安心して心豊かな日々を送れる文京」にするように、自分の置かれた立場でそれぞれに取り組む人が多くなることを望みます。私も区民のひとりとして努力したいと考えています。

石川 美絵子 委員

地域には多様な人たちがいて、多様なつながりがある。委員会では、そのようなことを話し合いました。一人ひとりが豊かな暮らしを追求する中で、互いに気にかけて声をかける、あるいは見守るという関係性が広がっていく。それは、価値を押し付けることなく、お互いを尊重することでもあります。この度は貴重な学びの機会をいただき、感謝申し上げます。

金木 悠 委員

今回初めての参加にあたり、私はあらゆる世代、事情を抱えた人々の暮らす街を包括する地域福祉活動計画の策定とはと前計画を読むほどに迷走していました。ですがそこには地域を支える人々の等身大があり、それがそのまま形になる過程は互助そのものでした。今計画が地域の方々に届き、選択肢の一つとなるよう私も尽力して参ります。

木村 健 委員

この度、参画された多くの皆様のご尽力により「地域福祉活動計画」が、新たに策定されました。区の「地域福祉保健計画」も同じタイミングで改訂します。文京区の地域福祉の推進を支える両輪の計画として、文京区における地域包括ケアシステムを推進しながら、世代や年齢、障害の有無等に関わらずに参加できる多世代交流(ごちゃまぜ)の場を通じて、区民一人ひとりが生きがいや役割を持ちつつ、支え合い、助け合いながら暮らせる地域をともに創っていく「地域共生社会」の実現を進めてまいります。

安藤 彰啓 委員

計画策定委員の皆様による活発な議論がなされ、その意見が十分に反映された計画になったと思います。この計画は、地域住民等が中心となって、地域共生社会の実現に向け、どのように活動していくのかを示すものです。今後は、この計画を多くの区民や団体等に知っていただき、そして行動に移していただけるように、文社協もその一員として取り組んでいきたいと思っております。

武長 信亮 委員

策定委員及び社協スタッフとのエキサイティングな議論を経て完成した本計画。このメンバーでプロセスを共有できたことを本当に誇りに思います。ひとまず計画は完成しましたが、皆で話し合っ決めて肝心の内容が絵に描いた餅にならないよう、「できたらいいな」の実現に向け、今度は地域の担い手として仲間と共に頑張ります。

箱石 まみ 委員

「文京区には仕事や学校があるから来ているだけだし」という方も、「文京区に住んでいるけど特につながりとかないから」という方も、ぜひ、P52からの「できたらいいなストーリー」をお読み頂けると嬉しいです。いつも立ち寄りのお店、ワンコのお散歩コース、続けている趣味など、意識していない日常から、これらのストーリーのような地域とのつながりが広がるかもしれません。

渡辺 ひろみ 委員

策定委員として委員会や作業部会に参加し、さまざまな地域活動を知ることができました。と同時に、その情報が必要なのに伝わらない人がいる、というもどかしさを感じました。だからこそ、基本目標に掲げた「つながりをもつことで『お互いさま』が生まれるまち」を目指すことが大切なのですね。この委員会で生まれたつながりを、今後の文京手話会の活動に広げていきたいと思っております。

小澤 洋子 委員

文京区地域福祉活動計画策定委員会に参加させていただき、委員みなさまや社会福祉協議会のみなさま方の「熱い思い」がとても伝わりとても勉強になりました。誰もが生きがいを持って安心して暮らせるまち、すべての人が地域の力であり、さらなる向上を期待いたします。私も企業における地域への参加、貢献の在り方について再度考えていこうと存じます。ありがとうございました。



7 用語集

以下の用語は本書において、次のような意味で使用しています。

あ

【アウトリーチ】
支援が必要であるにもかかわらず届いていない人に対して、積極的に働きかけて支援する方法。

い

【一億総活躍プラン】
女性も男性も、お年寄りも若者も、一度失敗を経験した方も、障害や難病のある方も、家庭で、職場で、地域で、あらゆる場で、誰もが活躍できる、全員参加型の一億総活躍社会を実現するためのプラン。

【インフォーマル】

家族や友人、地域住民、ボランティアなどによる、制度に基づかない非公式な活動領域のこと。

か

【介護予防・日常生活支援総合事業】
市区町村が中心となって、地域の実情に応じて、住民等の多様な主体が参画し、多様なサービスを充実することで、地域の支え合い体制づくりを推進し、要支援者等の方に対する効果的かつ効率的な支援等を可能とすることを目指す事業。

【かよい〜の】

文京区において週1回以上介護予防の体操等を行いながら、住民同士の助けあい・支え合い活動を積極的に行うことでより良い地域づくりを目指す住民主体の介護予防の場。

き

【企業地域連携推進ネットワーク】
企業の社会貢献活動担当者等を対象に、事例発表、意見交換、情報交換が行える場を設け、企業と地域、企業同士のネットワーク形成を支援し、ボランティア・市民活動、社会貢献活動への理解を深めることを目的とした集まりのこと。

【教育センター】

子どもの教育相談と発達相談を一元化し、教育の充実・振興を図ることを目的とした機関。

け

【権利擁護センター】
区民、福祉関係者からの権利擁護、成年後見制度等の相談、苦情、問合せに対応し、情報及びサービスの提供を行う文社協の部署。

こ

【高齢者あんしん相談センター(地域包括支援センター)】
高齢者の総合相談窓口。高齢者が、いつまでも住みなれた地域で安心して生活を続けられるように介護・福祉・健康・医療など、様々な面から支援を行う。

【高齢者クラブ】

高齢期の生活を健康で豊かなものにするために、地域の高齢者が自主的にクラブを結成し、社会奉仕、教養の向上、健康の増進、レクリエーション及び地域活動等の活動を行うもの。

【子ども家庭支援センター】

18歳未満の子どもや子育て家庭のあらゆる相談に応じるほか、ショートステイや一時預かりなど在宅サービスの提供やケース援助、サークル支援やボランティア育成等を行う機関。

さ

【サロン】
月に1・2回程度、地域の住民が自主的に運営しており、交流によって仲間づくりや生きがいづくりを行う活動のこと。

【サロンぶらす】

社会課題解決をテーマに活動する団体を対象とした助成金の名称。

し

【市民活動】
社会的な課題解決に向けて、市民が自主的、自発的に行う公益性・公共性のある活動。

【社会的孤立】

家族や地域社会との関係が希薄で、他者との接触がほとんどない状態。単身世帯の増加、婚姻率の低下、若者の社会的自立の遅れなどが背景にある。

【社会福祉法人】

社会福祉事業を行うことを目的として、社会福祉法の定めるところにより設立された法人。

【主体】

自らの意志に基いて行動する人や団体、組織など。

【障害者基幹相談支援センター】

障害者(児)とその家族に対する相談支援の中核的な役割を担い、障害の種類や年齢にかかわらず、各種相談や情報提供などの支援を行う機関。

せ

【生活困窮者自立支援事業】

区市(町村部については東京都)が実施主体となり、複合的な課題を抱える生活困窮者を幅広く受け止め包括的な相談支援を行う自立相談支援事業(必須事業)と、本人の状況に応じた支援を行う各支援事業(任意事業)があり、自立相談支援機関において策定される自立支援計画に基づき、各種支援が行われる。

【青少年健全育成会】

文京区の青少年のすこやかな成長を目的に活動しているボランティア団体。地域の大人たち(町会、PTA、民生委員・児童委員、保護司、青少年委員、スポーツ推進委員等)が力を合わせ、区や学校と協力してイベントなどを実施している。

【制度の狭間】

高齢者福祉、障害者福祉、児童福祉などの従来の縦割りの制度では網羅しきれなかった領域。

例：ひとり暮らしのひきこもり、ごみ屋敷でサービス拒否

た

【多機能な居場所】

週に3～4回程度開いている常設の場で、多世代の人々が自由

に交流することができる場所。また、地域での助けあい・支えあい活動の創出の場として住民が役割をもって関わることができ、地域にある様々な活動との密接な連携が可能な場所のこと。

ち

【地域活動センター】
町会・自治会、その他の地域活動団体の活動拠点であり、地域に密着した行政サービスや会議室貸出等を通じて、地域に密着し身近に利用できるコミュニティ形成の場を提供する施設。

【地域子育て支援拠点】

地域で子育てを支援している団体等が、親子で交流できる場や地域の子育て支援情報の提供、子育て相談などを行う拠点。

【地域生活課題】

福祉サービスを必要とする地域住民及びその世帯が抱える福祉、介護、介護予防、保健医療、住まい、就労及び教育に関する課題、福祉サービスを必要とする地域住民の地域社会からの孤立その他の福祉サービスを必要とする地域住民が日常生活を営み、あらゆる分野の活動に参加する機会が確保されるうえでの各般の課題。(社会福祉法第4条第3項より抜粋)

【地域生活支援拠点】

障害者の重度化・高齢化や「親亡き後」を見据え、居住支援のための機能(相談、緊急時の受け入れ・対応、体験の機会・場、専門的人材の確保・養成、地域の体制づくり)を、備えた地域の拠点。

【地域福祉】

それぞれの地域において人びとが安心して暮らせるよう、地域住民や公私の社会福祉関係者がお互いに協力して地域社会の福祉課題の解決に取り組む考え方のこと。

【地域福祉コーディネーター】

住民等からの相談を受け、地域の中へ入り、地域の人々や関係機関と協力して課題を明らかにし、解決に向けた支援をする専門職。住民主体の地域活動に対する立上支援や運営支援を行う中で、住民がより自主的に活動を発展できるようサポートする。

【地域福祉支援計画】

都道府県が策定する計画で、区市町村地域福祉計画の達成に資するために、各区市町村を通ずる広域的な見地から、区市町村の地域福祉の支援に関する事項を一体的に定める計画。

【地域福祉保健計画】

区市町村が策定する計画で、だれもが住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるよう、区の公的なサービスの充実と地域の様々な主体との連携による地域の支え合いを強化し、地域福祉保健施策を総合的かつ効果的に推進することを目的とした計画。

と

【東京らしい“地域共生社会づくり”のあり方について(最終まとめ)】
東京都社会福祉協議会が、東京において今後いかにして地域共生社会づくりを進めるべきかをテーマとしてワーキングを設置、検討して取りまとめた提言。

に

【ニーズ】
本人あるいは家族が援助してほしいと望んでいるもの、または本人あるいは家族が実際に生活上等で困っているもの、専門職の目で援助が必要と思われるものの総体。

【日常生活圏域】

介護が必要な状態となっても住み慣れた地域で生活していくことができるよう、介護サービスや介護予防サービスを整えることで必要なサービスを切れ目なく提供するために区域を区分したもの。文京区では4圏域に分かれている。

は

【8050(はちまるごーまる)】
長期間のひきこもりをしている50代前後の子どもを、80代前後の高齢の親が養い続けていることで発生する問題。

【話し合い員】

福祉活動に理解と熱意のある区民の中から区長が委嘱する、文京区独自の制度。訪問対象者の話し相手となるほか、ハートフルネットワーク(文京区で生活する高齢者の方々に住み慣れた地域で、安心して、いきいきとした生活を続けるために、地域で支え合うネットワーク)の協力団体として、地域におけるみまもり体制の一部を担う。

【パブリックコメント】

行政機関等が実施しようとする計画や政策などについて、あらかじめ住民等から意見を聞いておき、それを意思決定に反映させるために行う制度。

ふ

【ファミリー・サポート・センター】
保育施設への送迎や放課後に子どもを預かる等、子育ての援助を受けたい住民(依頼会員)と、子育ての援助を行いたい住民(提供会員)が、地域の中でお互いに助け合いながら子育てをする、会員制の事業。

【フミコム(地域連携ステーション)】

新たな担い手の創出やあらたなつながりによる地域課題の解決や地域活性化を目指して各種事業を行っている。文社協が運営する協働の拠点。2016年4月にオープン。

【文京区地域公益活動ネットワーク】

社会福祉法人の使命に基づき、地域における福祉課題の解決に向けて、区内の社会福祉法人が互いに連携・協働を図るために立ち上げたネットワーク。

【文京ユアストーリー】

身近に頼れる人がいなくても、住み慣れた文京区で安心して暮らし続けられるよう、元気なうちに備えをしておいて、亡くなったあとのことまで一体的にサポートするという文社協の事業。

ほ

【保健サービスセンター】
母子保健、生活習慣病などの相談指導、保健師による訪問相談、栄養相談、歯科健診、保健指導等を行う機関。

【ボランティアセンター】

ボランティア・市民活動の推進を目的として、相談受付・活動

紹介・コーディネートや団体への支援、福祉学習を行っている。

み

【みまもり】

東京都『高齢者等の見守りガイドブック』（平成 25年）によると、みまもりは、われわれの身の回りの人々の状態に気づいたり声をかけたりする（あるいはしない）ことであり、近隣住民や事業者などによる「緩やかなみまもり」、特定の人々が訪問する「担当によるみまもり」、専門職による「専門的なみまもり」に分けられているが、孤立化が進む現代社会においては、「緩やかなみまもり」を重視した、地域でのみまもりネットワークの形成が重要だとされている。

【みまもり訪問事業】

ひとり暮らし等の高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らしていけるよう、地域のボランティアである「みまもりサポーター」が月に2回程度で利用者の自宅を訪問して声かけをする文社協の事業。

【民生委員・児童委員】

地元町会の推薦により、区及び都の推薦会を経て厚生労働大臣から委嘱された非常勤の地方公務員。それぞれの地域において、常に住民の立場に立って相談に応じ、必要な援助を行い、社会福祉の増進に努める役割を担っている。

や

【ヤングケアラー】

家族にケアを要する人がいる場合に、本来大人が担うような家事や家族の世話を引き受けている 18歳未満の子どものこと。

B

【Bチャレ(提案公募型協働事業)】

文京区社会福祉協議会地域連携ステーション「フミコム」の「新たなつながりを創出し、地域の活性化や地域課題の解決を図るための協働の拠点」の機能として、ボランティア・NPO・企業・行政・学生(学校)等による地域課題解決のための事業を募集し、その事業を実践する活動に助成する取組。

N

【NPO】

「Non-Profit Organization」の総称。ボランティア活動をはじめとする市民の自由な社会貢献活動を非営利で行う団体。

S

【SNS】

「Social Networking Service」の略称。登録された利用者同士が交流できるウェブサイトの会員制サービス。

地域福祉活動計画

<https://www.bunsyakyo.or.jp/publication/plan>



福祉マップ

<https://www.bunsyakyo.or.jp/map>



地域福祉コーディネーター・

生活支援コーディネーター 活動報告書

<https://www.bunsyakyo.or.jp/publication/coordinator>



地域連携ステーション フミコム 事業報告書

<https://fumicom.tokyo>



文京区 地域福祉活動計画

令和6年度～令和9年度

【発行】社会福祉法人 文京区社会福祉協議会

〒113-0033 東京都文京区本郷4丁目15番14号

【電話】03(3812)3040 【FAX】03(5800)2966

【ホームページ】<https://www.bunsyakyo.or.jp/>

